れに依ると、先づ長安城の大きさは城郭の周圍六十五里とある。外形が長方形であるか、正方形であるかは明かでないが、前に述べた樣に上代都市の平面は正方形と見て好いし、唐の長安城も大體正方形である所から考へて漢の長安城も正方形と見て好からうと思ふ。正方形だとすると周圍六十五里は即ち方十六里餘であつて、今日の大いさにすると一里二十九町四方の都市になる。考工記にある方九里の都市即ち一里四方の都市に比較すると其面積は約三倍半弱に當るのであつて、可成り大きな都城である。此の城郭が高さ三丈五尺、上部の廣さが九尺であつて此の城郭の九尺幅の平坦な場所に更らに高さ六尺の城垣が設けられ城郭の四方に三門宛十二門があり、外に濠があつて此の幅が三丈、深さが二丈であり、門に對して各々石橋が架けられてをつたのである。城中に道路が十字形に交叉して通じ三宮、九府、三廟の建物を始め商家、民家が建てられて居つたのであるけれどもその配置の詳細は分らない。又九市と稱して西方に六市、東方に三市あり

その大いさは一市が二百六十六歩四方であるから今の三町半四方以上に當る。可成り大きな市であるが市とは今日の商業地區といつた位の意味のものではないか。尤も支那に於ける市場の發達は必ずしも馬鹿に出來ないのであつて今日の市場の樣な形式の發芽が既に上代に於いてあつたのかも知れないが私は未だそれ等に就いて何等の調査もしてゐないので明言の限りではない。それから十二門の事であるが此の城門は私の考へでは可成り進歩した建物であつたらしく考へるのであつて、今その名稱を掲げてみよう。尤も此の名稱は彼の王莽が一時天下を取つて纂立してその名稱も十二門中十門迄改正したのであるが今序いでゝあるから兩者を掲げてみよう。

東面南から北へ（　）内は王莽の改名

一、第一門　霸城門。その色が青色に塗られて居つたので青城門青門等と俗に呼ばれた、又青綺門ともいはれて居つた。（仁壽門無疆亭）

第二門　清明門又は籍田門、凱門、城東門。（宣德門布恩亭）

第三門　宣平門又は東都門(春王門正月亭)

南面して東から西へ

第一門　覆盎門又は杜門。門内に長樂宮があつたといふがその北寄りか、中央か又は南寄りかよく分らない。又此杜門外の石橋は長樂宮に入る橋である關係でもあるか工巧絶世だつたと傳へられてゐる。(永清門長茂亭)

第二門　安門又は鼎路門。(光禮門顯樂亭)

第三門　西安門又は便門、平門。門内には未央宮があつたといふがその位置は長樂宮と或は對照の位置に在つたのであらうが分らない。(信平門誠正亭)

西面して南より北へ

第一門　章城門又は章門、光華門、便門(萬秋門億年亭)

第二門　直城門、此の門の上に銅龍が飾つてあつた爲めに龍樓門とも

いひ、又直門とも呼ばれた。(直道門端路亭)

第三門　雍門又は西城門。(章義門著義亭)

北面して東から西へ

第一門　洛城門又は高門、鶴雀臺門。

第二門　厨城門。(建子門廣世亭)

第三門　横門。

此等の各門には門衛が設けられて居り、その形式も、入口が三箇所あつた。三輔決錄には十二門三塗洞闢と記してある。考工記の文字の註解に道路が三つに分れて人道車道の區別があつた等といふ不合理よりも此の方が遙かに肯かれ易い。尙以上十二門の設けられてゐる城郭から十三里の外即ち今の里程で一里十六町の外に外郭があつた。だから外郭の大いさは今の里程で四里二十五町四方である。

以上私の記述は甚だ蕪雜であり、前後甚だ相通じ難い所もあるだらうが

要するに秦漢時代を中心とする所の上代の都市計劃の實際がどんなものであつたかに就いて略記述しつくしたつもりであるが、最後にそれ等の要領を一括して述べておこう。上代の都市は大體に於いて正方形の平面を有し、南を正面として造られ、周圍には城郭及び濠を設け時としては更らに數里の外に外郭が設けられてゐる。城郭には城門が開き道路は碁盤の目形に通じてゐる。此の配置の方法は所謂 Gridiron と稱する都市の一形式であつて、最も早くから行はれ又普遍的の形式のものであるが支那の都市は此の形式である。城内には王宮が造られてゐるがその位置は都市の中央の場合と中央の北扁りの場合との二つの形式があつた様に思はれる。以上數項の事實は甚だ幼稚な都市の一般的の形式ではあるけれども、又此れが支那の都市の特徴でもある。考工記や漢代の諸文獻が如何程の事實を傳へてゐるか又その記述は單なる文字に過ぎなかつたかの問題は今容易に決し難い問題であつて上代都市の遺跡が次ぎから次ぎへと破壞され又建設されて行く過去の事情を思ふ時吾々は此の問題は永久に解き難い謎であるやうな氣もしないではない。併し二千年或はそれ以上もの上代に於いて組織的な計劃の下にその都市を建設して行つた支那人の偉大さに感服せざるを得ないのである。

一三　黄衣の厠神

あまり美しい場所の噂さではないが、住宅の中で一番不潔な場所といへば、先づ便所であらう。だから昔からなるべく清潔を保たせしめん爲めに便所には厠神があるから常に清くしなければならないと教へてゐる。我邦の農家に於てもそうであるが支那に於いてもやはり農家等は便所らしいものを特に設けない。一般の民家に於いても便所は甚だ粗末である。奉天の

北陵の方にはそれでも天子の便所と稱するものがあるが、城内の宮殿にある淨房は、到底宮殿の便所とは思へない。早い話が我邦の辻便所位の所であらう。一般に支那人の頭には便所を清潔に保つといふ樣な考へがないのかも知れない。私は何時であつたか新聞紙か何かで次の樣な記事を見た事がある。それは南支那方面では米作が盛んであるがその爲めに人糞が缺乏して人々はこれを得ることに腐心し、美しい心持ちの好い便所を設けて行人の用便を歡迎してゐる珍現象を報じたものであつて日本の大都會の人々が金を出してさへ汲取りに來てくれないのを喞つてゐるのと面白い皮肉な對照であることを私は感じたのであるが然しこんな例は恐らく一時的のことであらうがともかく私は一般に支那人は便所をもと〳〵不潔な場所だからことさら清潔にするにも及ばぬ位に考へてゐるのじやないかといふ樣な氣がしてならぬ。

前置きが長いがこゝにこうした支那人にも似ず感心な一人の事が靈應錄

といふ書物に出てゐる。臺州に王と呼ぶ人があつたが此の人が感心な心掛けの人で常に厠神を祭つて便所を清くして居つたがある日そこへ行つてみると黄女子が立つてゐた。黄色の衣服を纏つてゐたのであらう。女子とあるからは厠神は女神だつたに違ひない。王氏は誰だと問ふた所がその黄女子が答へて私は人間ではない厠神である。常々お前が私を尊敬して祭つてゐるのに感じて今お前に告げたいことがあつて來たのであると云て更らに言葉を續けていふにはお前は蟻の言葉を聞き分けることが出來るかどうかと尋ねたので、王氏はいえ私は聞き分けることは出來ないが古くからそういふ話を聞いてゐないではないと答へたので、厠神は懐中から小さな函を出してその中の膏藥の樣なものを指先でつけてその王氏の右の耳の下に塗つてくれていふには、蟻を見たならばその側で耳を傾けてその言ひ合つてゐるのを聞いて見よ、必ず何か得る所があるからといつてその姿は見えなくなつて終つた。その翌日の事ある柱の礎石の下に多くの蟻が群がつて紛

紙としてゐる。之を見た王氏は昨日厠神から聞いた話を思ひ出して、はあこれだなと耳を傾けてみると果してその蟻どもはしきりに相語り合つてゐる。そのある蟻は自分等の住處の穴をもつと暖かい場所へ移轉させようといつてゐるとその側の他の蟻が何故そんな必要があるこゝで好いじやないかと聞くといや此處の下には寶があるから非常に寒くて自分等の住處に適しないからだ……こんな會話をしてゐるのを聞いた王氏が蟻どもが引越して行つた後でその跡を探してみると果せるかな白金十錠が出て來た。

此れは便所の神様を大切にして特別賞與にありついた話であるが、陰德あらば必ず陽報ありとか積善の家に餘慶ありといふ様な思想の行はれてゐる支那には同工異曲ともいふべき此種の訓話は仲々多い。

一四　碑碣の様式

古來支那人は盛んに碑碣の類を建てゝ居る、主として墳墓に建てものであるが、又寺廟祠觀等にこの碑碣を見ないことはないくらいであるこれらの碑碣に就いての研究は古くから支那の學者に依つて行はれてゐる。所謂金石學なるものゝ重なる部分がこの碑碣の類であるから、その碑文や書體又はそれに關係することがいろ〳〵な學者に依つて、研究されて居ることは勿論であるが、その碑碣の起原や様式等についてもやはり多くの學者に研究され、從つていろ〳〵の學說が行はれて居る。その內我邦學者の重なるものを述べると、先づ關野博士をあげなければならない、その學說は東京帝國大學紀要第八冊第一號の同博士著『支那山東省に於ける漢代墳墓の表飾』中に漢碑の事が論じられて居る。次ぎは塚本博士であつて書苑第二號二『碑碣に就いての疑問』を、又考古學雜誌第五卷十二號に『碑の裝飾』

第三十五圖　漢碑之圖

（本文一五〇頁參照）

が發表されてゐる。その他に白鳥博士もその起原に就いて論じて居られるが最近では市村博士が東洋學報第十五號第二號に『漢碑の様式に就きて』と題して從來の學說を批評してのち新說を提出して居られる。私は大體以上の先輩の文に依つて碑碣の様式を紹介し又不遜ながら私の意見をも述べることにする。

先づ現今殘つて居る碑碣の類又は文獻たとへば金石索や金石圖說などに依つて知り得る最古のものは後漢時代のものである。前記の諸學者の研究もすべて後漢の碑についてゞある。宋の歐陽修が『後漢以後に始めて碑文があつて前漢時代の碑碣はない、これは墓に碑を用ひるのは後漢以來のことだからである』といつたようなことを述べてゐるが後漢時代に始めて造られたものかどうかは別として、この宋時代に既に後漢時代以前の遺物がなかつたといふことだけはたしからしい、そこで現在存する最古の遺物である後漢時代の碑がどんな様式のものであるか述べてみよう。關野博士の

漢金恭關

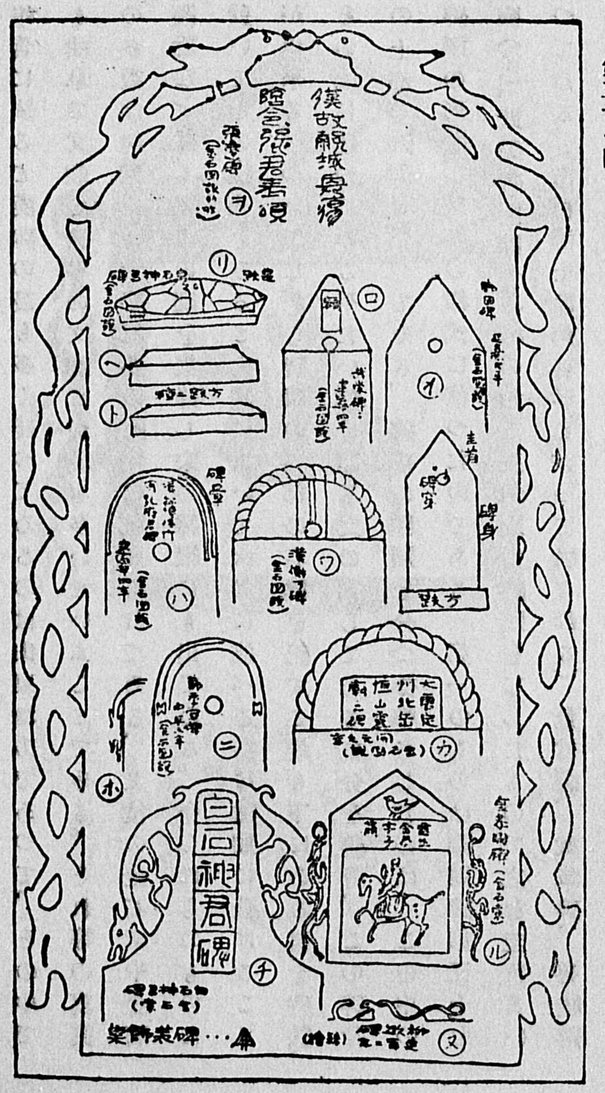
隸續云金恭
關上刻一禽三
足次横刻金
君姓名次刻一
人執扇乘馬似
是金君也旁有
龍虎啣環其
下斷裂隸釋
云子下一字缺以
墓碣參知是子
肅鵬搜下似尚
有缺文或闕字
或墓字不定至
馬上人乃執符非
扇也

第三十六圖　金恭關之碑

（本文一五三頁參照）

報告に依ると漢碑の最も多く殘つてゐるのは山東地方であつて、その中でも曲阜の文廟と濟寧の文廟とが最も多いといふことである。それ等の寫眞の多數は同博士の大學紀要の附圖に載せられてゐる、又彼の金石索や金石圖說などにも多くの圖を集錄し宋の隸續にも出てゐる。今これらのものに就いてその樣式をみると大體に於いて次ぎに述べる樣な種類に分けることが出來る。ついでながら碑碣の各部の名稱を記すと最も下にある臺を碑趺、その上に建つてゐる平たい部分即ち文の刻してある部分を碑身、この碑身の上部を碑頭といつてゐる。碑碣の種類を分つ標準としたのは、この中の碑頭の形狀、裝飾の樣式に依つたのである、第一のものは鄭固碑第三十七圖（イ）、武榮碑同圖（ロ）等の如き三角形の碑頭をなしたもので之を圭首といつてゐる。（市村博士は角首形といつて居られる）景君碑、武斑碑、魯峻碑蒼頡廟碑などがみなそれである。第二のものは碑頭に虹形の溝があるもので、これを碑暈といつてゐる（これを市村博士は圓首形といつて居

られる）孔府君碑（八）鄭季宣碑（二）がそれであつて、孔謙碣（第三十五圖）



第三十七圖

孔宙碑、孔褒碑などはみなこれである。以上二つの形式のものは、その多くが碑身の上部又はまれには中央のあたりに表から裏へ貫通した穴がある、これを碑穿といつてゐる、そして碑の下方には碑趺がある。この碑趺は方形であるから方趺ともいはれてゐるが、これには關野博士の報告に依ると二種類あつて第三十七圖の（ヘ）（ト）がそれである。又碑量の形にもいろ〳〵あるのであつて大別すると右と左とが同形になつてゐるものとそうでないものとがある、又その溝も二本のものや三本四本のものといふ樣に必ずしも一定してゐない、それから碑穿はその直徑が大がい四寸くらい前後であつて表から裏へ貫通し、碑身の中央上部にあるのが普通であるが、金石索にのせた孔謙碑や夏承碑のやうにまれには中心よりもかたよつた位置にあるものがある。第三の種類は碑頭、碑側、碑趺などの各部に比較的多くの裝飾をほどこしたものである。今その一二の例を上げると金石索にある白石神君碑は第三十七圖（チ）の樣な碑頭をなしてゐる。即ち中央の額には白

石神君碑の五字をたてにあらはし、左右に龍及び人の如き形を表はしてゐる、又金石圖說にあるこの碑の下部即ち碑趺には龜(リ)を表はして居る、後世の龜趺といはれる形がすでに漢代にあつたといふことにもなるが、私は勿論この實物をみないし金石圖說にある形は(リ)のようなもので、はたしてどの程度まで信賴すべきであるかはなはだあやしいものである。關野博士は漢碑には龜趺をもつたものがないといはれ、また市村博士もこれをみとめて居られるからこの兩博士の說に從ふと金石圖說にある白石神君碑の龜趺は一層疑はしい。しかしながら漢代に龜趺は用ひられなかつたとするもおそらくは碑趺に龜形を用ふるやうになつた起原ではなからうかと思われるものがある、それは碑身下方に龜蛇が表はされてゐるものゝあることであつて、その例としては隸續に載せてあるところの柳敏碑(ヌ)馮緄墓道碑などがある。碑の裝飾に龍を用ひ龜蛇を用ふることがはたして何の意味から出て居るのか今これを明らかになし得ないけれども、或ひは龍といひ龜蛇といふところから考へて四神すなはち靑龍、白虎、朱雀、玄武(龜蛇)を以つて碑の裝飾をしたものではなからうか、多少これを想像せしめ得るやうなものとしては金石索にのせてある金恭闕碑がある、(ル)に示したものがそれであるが頭部三角形の額には三本足の鳥を表はし左には龍右には虎を意味した形があらはされてゐる。又柳敏碑、馮緄墓道碑などの下方に龜蛇があることは今述べたがこの碑頭の三角形のところには鳥が表はされてゐるが、これは恐らく朱雀であらう、そのほか益州大守無名碑には上に朱雀を下に玄武をそして左右には環をふくむ龍が表はされてゐる、又(ヲ)に示した金石圖說にある張靈碑には、上部に二匹の鳥、碑側にはおのおの三匹の龍をあらはしてゐるが、かくして四神を四方にあらはしたものゝ實例は見ることが出來ないけれども以上にのべた樣な二三の實例を綜合的に考へると、靑龍(東)白虎(西)朱雀(南)玄武(北)の四神を碑碣に擬して碑頭を陽と考へて南、碑趺又は碑の下方を陰とみて北とし、したがつて右方

を西、左方を東としてこれらをその裝飾に應用したものではないかとも考へられぬでもない。なほ一つ金石圖說には漢の衡方碑と稱するもので(ワ)のやうなものをのせてゐるが、大體此の金石圖說なる書物は金石索などにくらべると著しく杜撰なものであつて、其の圖のごときは到底信賴し難いものであるから(ワ)の如きものがなにを表はしてゐるのか不明であるけれども、同じ樣に金石圖說にのせてある唐碑には(カ)の如きものがある、只前者は左から右へ順に弧狀の線がかさなつてゐるが後者の方は左右同じ形になつてゐるくらいの差があるのみである。

漢碑の樣式は以上のやうであるけれども、その樣式は何からうまれてきたものであるか卽ちその起原はどうであるかといふやうな點をすこしのべてみやう。これらのことについては市村博士が細かにのべて居られるが支那に於いて碑といふ字があらはれてゐるのはもちろん秦漢以前であつて、儀禮にでゝゐるのが最初であらう。そのほか禮記にもやはりこの碑といふ

字がみえてゐるがこれらに對する鄭玄の註を綜合してみると、犧を繫ぐための用や、あるひは葬時に棺をつるし下すための用に供するものに碑と稱するものゝあつたことが知られる。これをいひかへると碑と稱するものがあつてそれは犧としてひき出される牛や羊をつなぐために用ひられ、又埋棺の時にこの碑に一種の簡單な轆轤を篏裝しこれに繩を卷いて棺を墓穴におろすために用ひたものであるといふ、そしてその碑はたいていの場合に石で作られたけれども葬時に用ふるものは木製であつた。ともかくこの二つの用途のために碑といふものがあつたことは儀禮や禮記の本文に依つてもあきらかであるが、なほ鄭玄は日の影を測定するためにも碑が用ひられたといふやうなことをその註にのべてゐるが、もちろんその事實を證明すべき何物もない、かつ又繫牲、窆棺のためにあつた碑がどんな樣式のものであつたかさえも今日ではこれを知るべき何等の資料がない。それでは初めにのべたやうな墓上に用ひられる碑なるものはいつの頃から初まつたか

といふに、私ははじめに歐陽修が「後漢以後はじめて碑文あり」云々といつてゐる文を引いてすくなくとも宋代においてすでに後漢以前の碑の存在して居なかつた一證左となるとのべて置いたが、果してこの歐陽修のいふやうに冢墓の碑は後漢以來はじめてあるのであらうか。劉寶楠の漢石例の卷の一には『淮南弓盧敖見若士逃乎碑』とあつて、高誘がこれの註をして『置於碑陰此見於西漢人書也』といつてゐるから、後漢より前に碑があつたやうにも見えるが後漢頃からのものと同じ意味の碑が有つたかどうかといふ確證はない。又劉熙の釋名には『碑被也。此本王莽時所設也』とある、王莽は前漢の末の人であるから後漢以前に碑が造られたといふことになるが、實は釋名の古本には「王莽のときに設く」とはなくて「葬時所設也」とあるから王莽時代に碑のあつた證據にはならない、そこでやはり市村博士もいつて居られるやうに大體において前漢の末から後漢の初めへかけて碑の樣式がやうやくさだまるやうになつたとみることは先づまちがつかへないで

あらう。即ちすでにのべたやうな三つの樣式が現に存するもの及び文獻にみえるものにみとめられるわけであるが、それらの樣式がなにに起因しているかといふにこれについては支那の多くの學者がすでにとき及ぼしてゐるのであつて、それらの說はみな棺を下す時に用ひた碑の樣式から出たものだといつてゐる。たとへば封氏聞見記、隸續、山左金石志、或ひは碑版廣例等にその說が出てゐるのであつて、關野博士はそれら支那の學者の說を祖述紹介してその當れる說であることをみとめて居られる。いま關野博士の文を引用すると『碑に穿あるは一つは廟庭の牲をつながんが爲めに設けられたる穿孔より出でしものなるべし、然らざればその來由殆んど解すべからず、又此轆轤に捲きたる繩の一方人の負ひ引くところのものを碑の頭部に斜にかぶらせ、摩擦に依り容易に滑下すべからざらしめ且外に失脫せしめざらんが爲め陰溝を作りしもの蓋碑頭の暈の起原なるべし、否らざれば碑頭に

前後に斜に暈を作り其端の左垂右垂せるが如き殆說明の途なきなり」といつて居られるのである。ところが塚本博士は碑穿は棺を下す目的の爲めでなくて碑身をもちはこぶために造つたものであるとし又碑暈は龍であらうとしてたとへば鄭季宣碑の暈のはしが(ホ)のやうに龍になつてゐると云ひ、ほかにも實例を示して居られる。又考古學雜誌の上では虹彩の文樣であらうともいつて居られる。白鳥博士は木牌からきたものだとしてその碑暈はすなはち木理のあらはれたものをかたどつたにすぎないといつて居られる。市村博士はこれらの諸說に批評をくはへたのち博士の新說を發表して居られる、それによると古來の支那の學者の說に對しては『儀禮や禮記にみえたる碑はその所在の場處も用法も大體知ることが出來るけれどもその樣式に到つてはまつたく判らない。たゞ鄭玄の註に依つて碑穿の存せるものであつた樣に思はれるが、碑暈につきては何等いひ及ぼして居らぬのみならず古代の碑に文字が刻せられてあつたか否かも判らない、故に漢碑が古代の碑に基づいたとの舊說は單に碑の語原の相同じきだけの事であつて未だその樣式の淵源を充分に證明するにはたらない』とて舊說を排し、又塚本博士の說に對しては其碑穿の實用說は根據にとぼしいといひ、其碑暈の虹彩說も根據がないとして居られる。白鳥博士の說に對しても首肯することが出來ないといつて最後に市村博士の新しい說を發表して居られる今その說の結論を聞くと淸の吳大徵の古玉圖考及び米國のラツフアー氏の著述にある琬圭、琰圭の二つをもつて漢碑の樣式の根據として玉器を貴ぶ支那人がこれを碑の形に用ひたものだといふにある。そうして琬圭は鄭玄の註に、琬猶圜也とあり、又琰圭有鋒芒とあるので、これをもつて漢碑の圓首形は琬圭を摸し、角首形は琰圭を模したものではあるまいかと論じて居られる、その證據として水經註陰溝水の條の『闕北有圭碑』の文をひいて、圭と碑との連想の存在して居つたことはうたがわないといひ、さらに宛炎又は琬琰といふ字が石刻または碑文を意味して使用されたといふ實例をひき、これ

が碑の異名として用ひられたのはけだし後漢から後のことであらうといひ、何の故に特に碑を稱して琬琰といつたのであらうか、これは碑の形が琬圭と琰圭とに似てゐるところからおこつたもので必ずしも美名のみをかりたものではあるまい、もし果して然らば漢碑の樣式が琬圭琰圭より出たものであらうとの推斷は必ずしも理由のないことではあるまいと結び、最後にかくの如く解すると碑穿や碑暈の解釋も容易であつて、碑穿は琬圭や琰圭に紐を通す爲めにうがつた孔を模し、碑暈はその紐をたゝんでたれかけた形だと解し、角首形のものに暈のないのは或ひはそのところに紐がたれ止ることが出來ない爲ではあるまいかと想像し、かくの如く琬圭琰圭の樣式を模した漢碑が碑といふ名稱でよばれたのは古代の碑と同じく竪石といふ類似があつた爲であるといふのが市村博士の漢碑の樣式に對する新しい說である。

私ははなはだ不遜ではあるがこの市村博士の琬琰の說にも贊意をあらはすことが出來ないのである。何故だといふとかりに漢碑の圓首形角首形といふ二つの樣式が圭の形から來たものだとするもその穿や暈の樣式をその孔や紐と解釋することはむしろ附會の說に近いものではなからうか。碑頭の樣式が琬琰から來たものだといふうごかすべからざる證明が出來たあとでさへ、私はあの漢碑の穿や暈をその一種の象徵化した裝飾とみることは出來ないのであつて、碑暈が事實において紐を象徵化したものだとすれば必ずしもこれを陰溝であらはす必要はなかつたらうし又その圭の孔だといふところの穿も今少し相關的な位置をとらねばならないと思はれる。現存する遺物の上から見て紐(碑暈)と、孔(碑穿)との間には何等圭のそれらしい連絡をみとめることが出來ない、又碑穿の方についていふとこれを圭の孔だといふためにはすくなくともこれが今少し碑の全體からみて裝飾的な取りあつかひをうけねばならないし、かつすべての碑すくなくとも漢代の碑には必ずこの碑穿がなければならないはずであるのに事實はこれの

ないものもあるし、然かもこれのあるものも必ずしもその穿は裝飾的のものとは思はれない、紐であるべき暈が時としては相當に裝飾的にとりあつかはれて居るのに一人同じやうな意味の孔である穿が無造作にとりあつかはれてゐるといふことは、この暈と穿との間には紐と孔といふやうな裝飾的の意味のないことを充分に證してゐると思ふ。いはんやその碑頭の樣式が圭の形から來たのだといふうごかす事の出來ない證明がおこなはれない以上私は殘念ながら市村博士の新說にも贊意を呈することが出來ない。博士があげられたやうな傍證即はち圭と碑との連想の存在を證すべきもの、或ひは碑を琬琰といふ名稱でよんでゐた實例などもちろんその琬琰說に對する好い傍證となり得るけれども、然しその說を否定するものにとつても少しの障害とはならない。即はちそれは單に形の似てゐるところから來たものだとみるならばあだかも博士が琬琰から來たものを碑といふ名でよんだのはその古來の碑との類似からきてゐると解しようとされるのと同じで

あるからである。私に言はしむれば琬琰から來た形に琬琰に關係ある名稱をつけるのがむしろ當然であつて何故にことさら琬琰といふ美名を捨て碑といふ名稱を用ふる必要があつたか、かつまた琬琰といふやうな好ましい玉器から出た樣式をながく用ひないでなにの必要からほかの樣式にあらためたのかはなはだ解しにくいのであつて、この點からみて私は碑の樣式を琬琰にもとめることは反對である。

私はかくも大膽に先輩學者の新說を否定し去つたけれどもしかしそれにかわつて主張すべき卑見のないことは甚だ遺憾であり又先輩に對して敬意を失するわけであるがこれ亦止むを得ない。只私は最後にもう一度注意して考へなほしたいことは關野博士に依つて肯定せられてゐるところの支那學者の從來の學說である葬時下棺に用ひた碑からきたといふ舊說である。市村博士も引用されて居られるが封氏聞見記には『墓前碑碣、未詳所起按儀廟中有碑所以繫牲並視日景。禮記公室視豐碑。三家視桓楹。天子諸侯葬

時下棺之柱。其上有孔。以貫綆索。懸棺而下。取其安審。事畢。因閉壙中。臣子。或書君父勳。伐於碑上。後又立之于隧口。故謂之神道。言神靈之道也。』とあるが、恐らくは右のうち圈點をほどこした句がその碑の樣式の依つて來るところの眞相をかたるものではなからうか。すなはち封氏聞見記に從へば葬時埋棺に際してその棺を墓穴の中に下すために柱がもちひられ、これには上部に孔があつて繩を通して吊り下して埋棺が畢れば、君ならば臣が、親ならば子が、その君父の生前の勳功をその柱の上に記してこれを墓前に立てたのだといふことがわかるのであつて、埋棺に際しては何らかの機械的方法を用ひなければあの重い棺を無事下すことは出來ないから、所謂碑と稱する樣な簡單な而かも有効な方法がもちひられたのであらうことは想像に難くない、そしてかくの如き柱(即ち碑)が用ひられたとすればそれが埋棺後何等かの形となつて保存されることは極めてありうべきこととして考へられる。私は後世考へるところの碑なるものが、此埋棺の際に

用ひた碑を象つたものだといふ說はあまりに穿ちすぎた見方であるとかんがへるのでそれには贊成出來ないけれども、最初にはその埋棺のさいに用ひた實用上の碑を一種の紀念品としてこれを墓前に立てたものではないかと思はれる。碑暈はやつぱり古來からの說のやうに繩の摩擦に便するためのものであり、そのためにあらかじめ刻り付けるべき溝を多少體裁よくみせるために、二本乃至四本五本といふ具合に美術的にしたものではないか、かくの如くみれば碑穿が極めて無造作に穿たれてゐること碑身の刻文と何等の交涉なく存在してゐること、殆んど又漢代のみであつて直ちにその樣式が略後世みるやうなものにあらためられたこと、及び漢代に於いても白石神君碑のやうなものがあることなどが甚だ容易に了解せられるのである、葬時に用ひたものをそのとき直ちに廢棄しないである形で保存しやうとする思想は極めてあり得べきことで、現に我邦土佐地方ではその葬送の際に用ひた輿の長柄を切つて埋葬した土の上に立てその上に輿の屋根を二つに

切つて(餘り大きすぎるため)のせておく習慣がある、所謂新佛であつて普通四十九日間位で石造りの碑石と取りかへるのであるが、支那に於ける碑なるものもかういふ意味に於いてその埋葬後墓前に立てられたものが後墓前にも暑一定の樣式の碑を立てることゝして恰かも我邦の墓石を作るやうに埋葬後別のものを造つて立てたのではないかとおもはれる、だから漢代に於いて白石神君碑のやうなものがあることも、漢以後に漢碑と同樣の碑の存することも、あへて不合理ではないといふことになる、市村博士の所謂角首形なるものに暈のないのは實際上これに刻んでも實用上の意味がないためである。然らばこの所謂角首形即はち碑首は何の形であるかといへば、私は矢張關野博士がいつて居られるやうに、木製の柱の水垂れの勾配をつけたものと思ふ。埋棺の用に供したものは木製のものが普通であつたやうに文獻にはみえてゐるが、石製のものも勿論あつたので今日のこつてゐるものはそれであらうと思ふ。普通には木製であつて、從つてその木製

を用ふる程度の人の棺は比較的に輕く故に碑の上に溝を彫る必要がなかつたか、或ひは當初はこれが施してあつて後墓前に立てるときに圭形に切つたものかもしれない。その形が石に於いても尙襲用されたと考へられぬでもない。いずれにしても私は漢碑の大部分は埋棺の際の碑に模して造つたものではなくてそのものをそのまゝ墓前に立てたものだと考へるのが至當のやうに思はれる、これが後埋棺の際のものはそのまゝ廢棄されるか、又は埋棺の方法が變つたか、いづれにしても墓前に立てる碑は別に新らしく墓前に立てられるものとして造られたものであると思ふ。從つて實用上必要な溝(暈)を彫るにあたつてもいくらかでも體裁よくするために二條又は三條四條とし、又鄭季宣碑のやうにたまたまその暈が龍のやうであるために龍首を彫つたりなどしたことが、つひに碑首に龍を用ふる因緣となり、既に龍を用ひることとなるとこれから當然連想するものは白虎朱雀玄武などの四神であるから、それらに支那一流の陰陽說を附加して上に龍下に玄

武といふやうな約束が生じて唐時代に見るやうな螭首、と龜趺といふ完成した様式が出來上つたものであると私は考へてゐる。

一五　宋代の石工

建築にその裝飾上の目的で石材を使用してゐることは仲々に盛んであるが、然かも、それは決して近世に起つたことではなく、隨分に古い歴史を有つてゐる。漢時代に可成り發達した技術の存して居つたことは確實に知られるけれども、勿論周代既に相當に進歩した技術があつたらしいことも、想像に難くないのであつて、その想像を助ける様な文献もないではない。漢以後六朝から隋唐にかけて著しく盛んになつたことは言ふ迄もないが、此處に宋の李誡の營造法式に載せられてゐる所の造石作次序之制の項を譯出して、宋代の石工法を覗ふことにしよう。

造石作次序の制に六種ある。今その一つ一つを畧説すると次の様である。

一、打剝　これには（用鏨揭剝高處）と説明してある。所謂我邦でいふ玄能拂ひと稱するものであつて、切り出して來た石材を極く大體に所要の大さのものにする爲め、出つ張つた所を玄能で叩き落すのである。

二、麤搏　これは（稀布鏨鑿令深淺齊勻）と記してあるが、我邦の瘤取りと稱する程度である。大體の形に仕上げる爲めに凹凸のない様に玄能で荒仕上げをすることである。

三、細漉　（密布鏨鑿漸令就平）とあるから、恰度我邦の中鑿切り又は中切りと稱するものに當る。鑿を使用して石の面を平行に斜に叩いて仕上げてゆくから平行した鑿のあとが殘るものである。

四、褊稜　（用褊鏨鐫稜角四邊周正）これは各邊の稜角を正して直角にすることである。

五、斫作（用斧刀斫作令面匀平）といふのであるから我が、小皺きの事に相當する。我邦に於いても、此の小皺きと稱する仕上げはその仕事の程度や目的に應じて二返小皺き、三返小皺き等と稱して繰り返して行ふものであるが、此の時代に於いても矢張り同様で（斫作三遍）等と稱して行つたものである。

六、磨礲（用沙石水磨去其斫文）即ち磨きと稱するものである。

以上六種の工程は我邦の今日の石工間に於いて行はれてゐる花崗石等の仕上げの順序と全く一致してゐるのであるが、更らに石材の表面に彫刻を行ふ場合、即ち、營造法式の用語に從ふと彫鐫制度なるものに次の四等の別があつた。

一、剔地起突　これは石の表面に高肉彫りを施こすことであるが、この爲めに石材は斫作一遍、即ち一返小皺き仕上げとする。下繪を施こすに便利であるからであらう。

二、壓地隱起　一種の薄肉刻であつて、しかもその表面が大體に一平面をなしてゐる様な彫刻法である。これを行ふ爲めには斫作兩遍、即ち二返小皺きに仕上げるものとしてゐる。

三、減地平鈒　文様を陰刻したものであるから壓地隱起とは全く反對である。從つてその石の表面は斫作三遍、即ち三返小皺きとするものである。

四、素平　何等文様を彫刻しないもの。依つてその表面は磨礲即ち磨きをかけて平滑にする。

石材表面に施こされる彫刻文様には十一種の名が擧げられてゐる。一は海石榴華。これは海を渡つてきた石榴を意味するもので、南方からでも傳へられたことを暗示するものではないか。營造法式に載せられてゐる圖様では他の文様と著しい區別が附けられない程度のもので、これを實相華だといつてもその異同點を指摘するに苦しむ位。二は實相華であるが、これが前の海石榴華や三の牡丹華と區別し難い位に酷似してゐる。强ひて區別

すると、一の海石榴華はその花と思はれる部分が幾分か石榴の形に近いものを思はせるし、三の牡丹華の方は花辨の部分が少し大きく出來てゐる樣に思へる位のものである。四は蕙草。蕙はにほひぐさと訓むのであるがどんなものか分らない、營造法式に海藻文樣の樣なものを描いてこれに蕙草としてゐるから或ひは蘭の一種の樣なものの文樣ではないか。五は雲文。これは雲の文樣であり、六は水浪であるから波の文樣である。七は寶山。八は寶階。此の二つの圖は掲げられてゐないし、文字の上からも一寸と想像がつかない、九は鋪地蓮華、十は仰覆蓮華、十一は寶裝蓮華であつて此三種の蓮華は皆柱礎に施こされるもので、鋪地蓮華は、單瓣の下向きのもの、仰覆蓮華は下向きの蓮華の上に更らに上向きのものをのせたもので、佛像などの臺座によくある形である。寶裝蓮華は複瓣の下向きの蓮華である。尙石彫類に應用された文樣の中には鳳凰、龍、獸類、鳥類を始め比較的多數の種類があつた樣である。

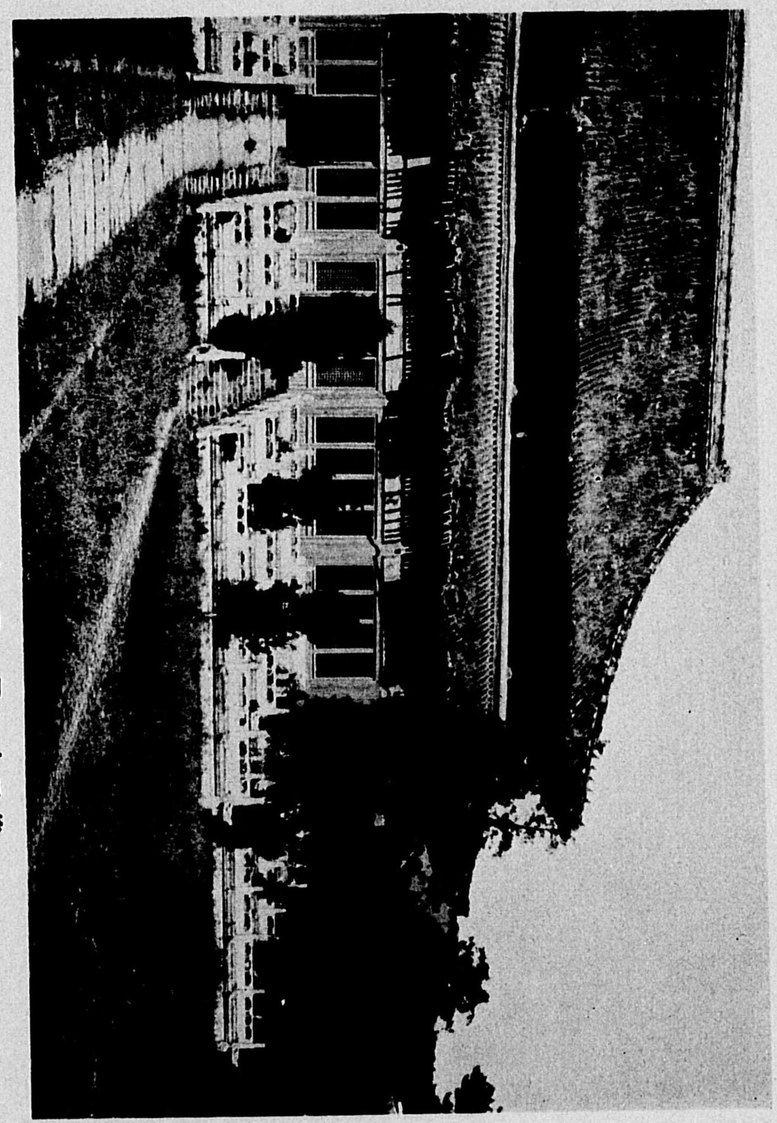
第三十八圖　元時代の碑の頭部

第四十圖　明の帝陵に於ける文官の石像（亞東攝）

（本文一九六頁參照）

第三十九圖　明の帝陵に於ける武官の石像（亞東攝）

（本文一九六頁參照）



（蘇東坡）　殿恩後の陵帝の明　圖一十四第
（照參頁七九一文本）

一六　梁上の鬼魅

梁上の君子といふ言葉がある。此の君子はあまり感心出來ないが、それでも梁下の會話を聞いて眞人間になつたそうであるから後には感心すべき君子になつたかも知れない。所が此處に紹介しようとする梁上の先生は正體がよく分らない。話すことや飲食する事は恰かも人間の樣で、而かも姿が見えない。日本でいふおばけの類であらう。おまけに梁下の會話を聞いて改心するどころか、反つて家人をおどかして、一騷ぎさせたといふやつかいな君子（？）である。時代は古く吳の頃といふから今から千六七百年程前のことで嘉興の子の彥思といふ人の家の出來事である。此彥思の家に鬼魅が住んで居つたが、或る夜彥思が床の中でその母に此の怪物の事を話して心配して居つた所が、噂をすれば影といふ譯で屋梁の上から此の鬼魅の聲がして彥思よお前は女と共に俺の噂をしてゐるが、俺は今お前の家の梁

を切り落してやるぞといふと共にその木を切る音がごしごし聞えて來た。彦思は若しも家の梁が切り落されては一大事と驚いて火をつけて照して視ようとするとその鬼魅が忽ち彦思のつけた火を消して終つて、木を切る音は愈々はげしくなつて來る。そこで彦思は萬一家が壞れでもすると大變だといふので家財の大小一切を取り出して後さらに火を點けてよく視ると何のことはない。家の梁はもとのとほりで少しも變りがない。彦思が一杯喰はされた譯である。

一七　支那の帝陵

一般に支那の帝陵といへば彼の明の十三陵や奉天の北陵、東陵を誰しも想起するものであつて、誠にその規模の壯大な事に於いて世界の各民族間に多くその比を見ない所であるが、一體支那に於いては古くから宮殿建築が中心として發達したのでその理由は總べてが王道思想を基礎として出發してゐたからであつて帝王の陵墓も矢張り同樣な考へから來たものであらうと思ふ。彼の墨子の中に「生時は臺榭を治め死すれば又墳墓を修む」といふ事が書いてあるが、かういふ思想は必ずしも支那民族のみが特有したのではなく各國民族間にもあつたものであつてその結果は我邦にしても古來から宏大な墳墓が行はれ又有名な埃及等の墳墓も築かれたのである。然し乍ら支那に於ける帝陵は明の十三陵に於いて殆んど完備の姿にまで發達してゐるけれども、決して古代からあの樣な形式をもつてゐたのではなくて、次第に完成されたのであるが、然らばどんな徑路を取つて來たかに就いて、その內部の構造は多く問はないで單にその外形樣式の變遷に就いて私は以下極めて簡單にその大略を述べてみる。

上代の事は果してどんな狀態であつたか分らないけれども恐らくは極め

て簡單なものであつたに違ひない。葬といふ字はその構造に示してある樣に死體を草の間に捨てた事を語るものであるが、恐らく一般庶民の墳墓等といふものは甚だ粗末なものであつたと想像される。然し帝王又は諸侯の墳墓等は周時代には既に相當の發達をなし、比較的に備つた形式を有つて居つたものの樣である。春秋戰國時代頃となつて諸侯が次第に勢力を得、從つて周室の規則を模し更らにそれ以上の華美を裝ふ弊風が生じたものと見えて墨子等はそれを極力戒めてゐる。即ち節葬篇の文に明かであるが今その節葬篇に記されてゐる所に依つて堯舜時代の帝陵なるものを知ることが出來る。これが果して事實であつたか否かは到底知ることは出來ないが先づ同篇の文を見ると『昔は堯は北に八狄を教へ、道に死して蛮山の陰に葬らる、衣衾三領、穀木の棺、葛以つて之れを緘す、既に窆して卒哭し、埳を滿して封無し。已に葬りて牛馬之れに乘る。舜は西に七戎を教へ、道に死して南巳の市に葬らる。衣衾三領、穀木の棺、葛以つて之れを緘す、

既に葬りて市人之れに乘る。禹は東に九夷を教へ、道に死して會稽の山に葬らる、衣衾三領、桐棺三寸、葛以つて之れを緘す、之れを絞べども合はさず、之れに道すれども、坎せず、地を掘るの深さは下は泉に及ぶなく、上は臭を通ずるなし、既に葬りて、餘壤をその上に收め、壟は三壟の畝の若くなれば則ち止む』とある。これに依つてみると、地下の構造はともかくとして、地上に何等墳墓らしい標識さへなかつたものの樣である。禮記の壇弓篇には「古は墓して墳せず」とあるし、同書王制篇には「封せず樹えず」とあるから若し傳へられる樣であると棺を埋めるが、その上に土を盛らない、即ち土饅頭を造らない、又之れに樹木も植えない、墳墓としての標識がないから、前記墨子の文にある樣に牛馬や市人がその上を歩むで通るといふ樣な狀態になる。まさか堯舜の墳墓がこんな簡單なものであつたとも信ぜられないのであつて、恐らくはその儉德を誇大に言つたものであらうが、然し一般的に考へてみても、決して大規模な墳墓が築かれたとも

思はれないのであつて、埋め餘りの土がその上に盛られてあつた位のものであらうと思はれる。然し乍ら地上の標識としては、以上の樣な狀態であつたとしても、その死體埋葬の法は相當に禮をつくしたらしく、死體そのまゝを埋葬したものでなく、必ず棺を用ひたものであろう。前記墨子の文にも穀木の棺とか桐棺等の字が見えてゐるが其他に瓦棺等のあつたことは禮記の壇弓篇や古史考等に見えてゐる。然し乍ら此等のものが、今日遺物として發見せられたのでもなく、又周代或はそれ以前の墳墓と思はれるものの學術的發掘が行はれたといふのでもないから、前記の文獻に記されてゐる範圍に於いての想像にすぎない。

周代以前の事は以上の樣であるけれども、周代になつてから特に春秋戰國の時代にはその墳墓の構造や、又これに就いての規格等もやかましく制定されたものの樣である。それ等の內容は禮記や儀禮に甚だ詳細に記載されてゐる。それに依ると棺制等も詳はしく書かれてゐるし棺を入れる槨の

作られたことも分る。そしてその棺槨の間には種々の副葬品が入れられたのである。然しそれ等の內部構造の實際も周代以前のそれと共に、今日では明かにされてはゐないけれども、外部即ち地上標識のそれは周代と雖も多く異る所はなく、只高く土を盛つて封土をなしたのみである。前記の諸文獻に依つても只單に土を盛つたことは知られるけれども、他に何等の施設をしたのではない。今日存在する所の周代の帝陵が果して當初の姿を傳へてゐるかどうかは甚だ疑はしいものであつて、その今日の姿を以つて即ち周代帝陵の外形を論ずることは出來ないけれども、恐らくは又大なる變化のあつたものとも思はれない。その形式は例へば武王のそれの樣に圓形の平面で土饅頭のものもあるが、又文王や成王のそれの樣に一種の截頭方錐形のものもある。土饅頭形にしてもこの截頭方錐形のものにしても、恐らくはその形に何等特殊の意味があるのではなくして、土を盛るに最も自然な又便利な形だと思はれる。秦の始皇帝の陵墓は先づ此の種封土の最大

のものであるが方錐形であつてその基底面の一邊が千百三十尺程ある、半球形にしろ截頭方錐形にしろ又は方錐形(ピラミッド)にしろ總べて盛土には甚だ自然な形であるが、周代のもの秦のもの等は此の封土以外に何があつたか明かでない。恐らく前述の樣に周代のものは單なる封土のみの樣に思はれるが、秦の始皇陵では先年關野博士が此の時代に屬すると思はれる文樣のある屋瓦を發見せられた由であつて、それが果して秦時代のものであり、秦陵に用ひられたものだとすると當時の帝陵には既に何等の建築的の施設があつたものと見なければならない。秦漢時代は後世のそれ等にも劣らない盛大な帝陵が築かれたのであつて始皇陵の如きも今日では僅かにその墳丘が存するのみであるけれども、當時には恐らく立派な建築物があつたらしい事は彼の關野博士が屋瓦を發見された事や、又此の次の漢代帝陵の規制からも略々想像はつく。

漢代帝陵の規定は甚だ完備したものであつて、天子が即位した翌年に、直ちに陵墓の工事を始めるものであつて、天子の在世中にその陵は出來上つてしまふ、之れを壽陵と稱する。これは漢代普通の制度であるが、秦の始皇陵も史記に依れば壽陵である。又我邦にもその例はあるのであつて仁德帝陵――これは我邦帝陵中最大のものである――も矢張り此の壽陵であつた。漢代の壽陵は甚だ宏大なものであつて、その築造の爲めに、天下の公賦の三分の一がその費用として當てられたと傳へられてゐる。墳丘は大體截頭方錐形をなしてゐるが、その上には寢堂が建てられた樣である。此の墳丘の上に建築が出來たのは、恐らく漢代のみであつてその以前のものにもなかつたらしく、又その後のものにも認められない。(但し私は墳上に建物のあつたといふことは信じない) それから墳の四方には羨門があつてこれに依つて墓室に通ずる樣になつてゐる。墓室は墳の中央にあるのであつて、石築又は塼築である、天子の在世中は羨門に依つて內部に通じてゐるが、埋葬後は之れを閉ぢるのである。これ等羨門や墓室の構造は果して

如何なるものであつたか明かではないが、漢代の墳墓は恐らくそれらしいと考定されるものが、現に旅順勾家屯に於いても、我邦學者の手に依つて發掘研究され、又漢時代の漢人の墳墓として有名な朝鮮の樂浪郡の古墳の多數が我邦學者の手に依つて學術的に詳細に研究されてゐるのであつて、これ等に依つて當時代の墳墓の構造は明かにされてゐる。漢の帝陵も規模の上に大小の差はあるが大體想像されぬでもない。これ等墓室の中へは多數の副葬品が入れられた事は、古來から同樣であつて一層それが盛んとなり、又種類や數量も一層豊富となつた樣である。だから支那の樣に常に亂れてその主權者が變るといふ樣な狀態にあつては、その帝陵も容易に完全に保護されないで、その內部の貴重な副葬品を盜まんとするものの爲めに常に發かれてゐる。貴人の墓を發いてその內部から貴重な副葬品を盜み出すことは非常な罪惡だとは考へられてゐるけれどもそれにも拘はらず近代のみではなく古くから此の盜掘は行はれてゐる。傳へる所に依ると項羽は

始皇陵を發いてその副葬品を盜み三十萬人が三十日間寶を運び出して尙盡きなかつたといはれてゐるし、前述した漢の帝陵も古くから盜掘が行はれその爲めに外形等も著しく損はれてゐる。彼の王莽が天下を奪つた時は漢陵を毀ち、以來度々盜掘が繰り返されてゐる。——古來墳墓の內部に貴重な品々があり、又貴重でなくともそれ等が所謂土中品として一部の人々の間に喜ばれる所からこれを盜み出さんが爲めに、發掘の行はれた事は獨り漢陵のみではないし、又支那のみではない、朝鮮に於いても又我內地に於いても古くから行はれ屢々問題を起してゐる——こんな譯で現在の漢陵には僅かにその當時の規模の一部を想像する遺跡を止める位のものであるけれども、その遺跡や又は文獻に依ると墳丘の裾から二百尺乃至三百尺餘も距てゝ四方に垣が造られ、これに四方にそれぞれ門が造られたのである、惠帝の安陵、景帝の陽陵、武帝の茂陵、昭帝の平陵、宣帝の杜陵、成帝の延陵、哀帝の義陵等には門趾が今尙殘つてゐるそうであるし、特に宣帝の

杜陵等は墳丘の外に二重の垣が造られたもので、今その跡があり又門の柱礎等も存してゐるといふ話である。墳の高さは八九十尺から百二十尺位であり、陵域は一千尺平方乃至一千六百尺平方位あるから隨分大規模であるが天子崩じて此處に葬られると、その墳墓を中心として將軍以下の近臣はその住居をこゝへ移してその陵墓へ奉仕し又守護するのであるが、それ等の人々は富豪貴顯の人々であるから、城廓等を造つて立派な一縣をなしたものである。これを陵邑と稱するが陵邑の大きなものは數千戸から一萬戸に及んだと傳へられてゐるのであつてこの爲めに良民がその職を變へその地を變へることはよくないといふので元帝の渭陵を造つた時から詔して廢された位であつた。漢代の帝陵はこんな風で甚だ盛んなものであつたけれども後世に見る樣な陵前に石人石獸の類が立てられたらしい形跡もなく、恐らくは唐代からのものであろう。然しこゝに一つ注意しておきたいことは、後漢代の碑のことである。此の時代の墳墓には碑が用ひられてゐるのであつてそれ以前即ち前漢などにも用ひられたかも知れないけれども遺物が存するものは後漢時代以後である。碑は埋棺の際に使用したもので、これをそのまゝ墓前に立てたものであろうと私は考へてゐるのであるが、或はそんな習慣は必ずしも後漢に入つてからのみ始められたものでもなかろうが、後漢頃から漸くその風が盛んとなり又材料に石材が使用される樣になつたのであろう。前記の前漢帝陵の規制から考へると埋棺の際に碑を用ふ必要はない樣に思はれるけれども漢代又はそれ以前の墓が横穴式のみのもので竪穴式のものがなかつたといふ事は何等證據立てられないのであつて私は寧ろ竪穴式のものが普通であつてこれが爲めには芝棺の爲めの碑が必要であつたので前漢帝陵の横穴式のものは天子生前に造つた壽陵であるが爲めの特殊の必要からではないかと思はれる。或は又羨門から墓室への通路は必ずしも平坦でなく、墓室は普通地盤よりも下にあつて、その通路は內部に向つて勾配をなして居り、從つて碑の必要があつたのかも知れな

いが、これ等は單に私の想像にすぎない事であつて尙充分に考究してみたいと思つてゐる。要するにそれはともかくとして墓前に碑が立てられる樣になつたのは少くも遺物の上からは後漢時代からである。

現存する遺跡は可成り荒廢に委せられて居つて當年の規制は窺ふことは出來ないけれども、文獻に傳へられる所では、秦漢時代の帝陵は隨分に立派な形式を備へて居つた樣である。然し乍ら何といつても帝陵の規制が完備され、整然とした形式をなして今日見る樣な明の十三陵等の形式の起原をなしたものは唐時代である、或はそれ以前に胚胎してゐるのかも知れないのであつて、現に陵前に石獸の類を駢列させる事などは必ずしも唐代から起つたことでなく、文獻に依ると秦漢六朝位から行はれた樣である。即ち例へば事物紀原には石羊虎は漢から始まつたといひ又輿地志に依ると南齊の高帝の泰安陵、武帝の景安陵、明帝の興安陵等には陵前には大石麒麟があつた事が記され、丹陽縣志に依ると梁の簡文帝の莊陵にも石麒麟があ

り、上元縣志には陳の武帝の萬安陵に石馬があつたと記してある。然し遺憾乍ら此等の帝陵を實見しないし、且又淺學な私はそれ等の事柄に就いて實見又は調査された人の報告や記錄等の何物にも接しないで現存するか否かをも確かにすることを得ないのであつて、そのものが果して齊梁等のものであるか否か勿論之れを斷ずることは出來ないのである。依つて今の所では先づ遺物を基礎としていへば唐代からであるといふより他はない。

唐代の帝陵は長安附近にあるがその內で太宗の昭陵の形式に就いて述べて此時代帝陵の一斑を知ることにしよう。昭陵は醴泉縣の九嵕山に在る。唐書に依ると貞觀十一年漢の壽陵に倣つて造られたものであつて、一族功臣もその培塚の地を下賜された。卽ち昭陵も矢張り皇帝在世中に造られた壽陵である。醴泉縣志を見ると昭陵には獻殿、後殿、下宮、游殿があつたが、今は廢せられたとあり、又陵の北には石屋三間、六駿、十四人像等があり、又周垣重門、通路のあつた事も記してある。陵前に石人石獸の類が

多數に列立されたことは此時代のものから始めて遺物が確然とあるのであつて、現に高宗の乾陵等は實に整然と列べられてゐる。又此の昭陵の附近には諸王、公主、妃嬪、宰相、丞郎、功臣、大將軍等の墳塚凡そ一百七十七が造られてゐる。さうしてこれ等の墳塚の前方には矢張り石人石獸の類が立てられたのであつて今尙それ等は殘つてゐる。此等唐代帝陵にある石獸の種類は馬、（駝馬、龍馬を含む）獅子、羊等であるが文獻通考に依ると後周の太祖の嵩陵（鄭州新鄭縣）には羊、虎、馬等のあることが記してある。これが宋代になると大體唐陵の形式と變りないものであるが、幾らかその石獸の種類や數が多くなつてゐる。

北宋はその都は汴京であつたが帝陵は總べて鞏縣の西南の高臺に在る。北宋の八陵といはれるものがそれであるが滿洲に興つた金が侵入して宋室は南に走つて所謂南宋となつた頃、此の八陵は金の爲めに痛ましくも發掘破壞されたけれども形式外觀丈けは舊態を存してゐるといはれて居る。その中で此處では太宗の永熙陵に就いて述べてみると、陵道の最南端に神門があつたので今その遺趾がある。此の門から百間餘の北方に第二の神門がある。これも現今ではその遺趾のみであつて乳臺趾と稱する。此の乳臺趾から北方には道の左右に石人石獸の類が列立してゐる此れ等は勿論左右一對宛であつて、その距離は百三十尺である。今それ等の石物を列記すると次の樣である。

一、石華表一對。八角柱で蓮座の上に立ち上部に寶珠形を冠し八角の各面には雲龍寶相華文樣を薄肉彫りとしてゐる。

二、石象一對。高さ七尺五寸、長さ十尺五寸。

三、石馬首鳥一對。馬の首の鳥であつて岩石の形と共に彫り出してある。

四、石貘一對。

五、鞍馬二對。馬卒左右各二人。馬の長さ約九尺五寸、馬卒高さ八尺。

六、石虎二對。跪座するもの。高さ約六尺。

七、石羊二對。前脚を折つて座せるもの。
八、石人三對。
九、文官石像四對。高さ約十尺。
十、石獅一對。
十一、武官石像一對。

その種類は唐代のもの等に比して遙かに多樣である。此の石物の列が終ると第三の神門があつたのでこれも遺趾が存し鵲臺と稱してゐる。第二の神門から此第三の神門迄は四百四十尺程ある。此の鵲臺から二百七十五尺程北方に墳塋の基址がある。墳はその裾で一邊の長さ約百七十五尺程あり、藏頭方錐形をなしてゐる。墳の周圍には方形に神牆があつたもので、その大きさは七百尺平方以上もある。南方に鵲臺があり東西北の三面にも矢張り門があつたらしく四隅角にも角臺があつたので現在土堆が殘つてゐる。漢代唐代等の帝陵規制から考へてみても唐代帝陵をそのまゝ模したかの樣

な宋陵に建築物の一つもなかつたといふことは考へられないことであつて、前述した樣な建築物の遺趾には當時相當見るべきものがあつたのであらう。

以上は永熙陵の外觀であるが北宋の八陵は大體に於いて立派な規制を備へてゐるのであるがこれに對して寂寞の感を强くするのは彼の南宋の六陵である。宋は金の侵略に依つて南に走つて南宋となつたけれどもいづれは金を追ふて再び汴京に歸るの意志があつた爲めに、その帝陵なども帝陵と稱しないで攢宮と稱したのである。その規模も從つて甚だ狹小である。而かも南宋のそうした志も成らずして天下は元の爲めに統一され南宋の天子の攢宮の在る地方卽ち江浙地方には蒙古僧の楊璉眞伽といふものが總攝として赴任し彼れが南宋の天子の攢宮を悉く發掘破壞してその財物を盜み出して終つたので全くその舊態を失つたものであつたが後に明が代つて建國すると共にその墳墓を修築して今日に至つたものであつて恐らく支那歷代帝陵中で最も寂然としたものであろう。南宋隨一の名天子として知られて

ある孝宗の陵でさへその兆域は東西八十尺、南北九十尺の垣を繞らし南に簡單な切妻の門があり、その中には三間四面の享殿があつてその後方に直徑十五尺、高八尺程の圓墳があり前方に碑が立つてゐるのみで甚だ粗末なものである。

明代のものは年代も比較的に新らしくなつてゐるので、その外觀形式がよく存してゐるし且つ帝陵としての樣式が次第に發達して建築物が可成り主要な位置を占める樣になつて來たので甚だ莊嚴な規制となつてゐることが遺物の上によく窺はれる。此の明の帝陵は天壽山、石門山、聚寶山、史家山、金嶺山等といふ山々の麓に據つて二里三里或は七里八里の距離を置いて十三陵並んでゐるのであつて、これを明の十三陵と稱してゐる。此等十三陵中最も規模の大きなのは成祖の長陵である。昌平山水記や昌平州志等に明陵に關して比較的詳細な記載があるが、今此處には長陵の現在の狀態に就いて記して明陵の一般の形式を知ることにする。長陵は昌平の北五

支里程の所に明陵の第一門である所の石造の大牌樓がある。此の牌樓は非常に大きなものであつて恐らく支那に現存するものの中の最大のものであらう。その五闕六楹をのせる最も下の方の地版石の大きさが、長さ百二十三尺餘、幅が二十八尺ある。石闕の中で中央が大きくその開きが十三尺餘、その左右が十一尺餘、その左右が九尺餘で次第に狹くしてある。これに從つてその內法の高さも次第に低くなつてゐるから屋根も順に低くなつてをつてこの爲めに比較的よく纏りがあり、一種の律的の遞減が見るものの眼に快感を思はせるけれども、牌樓としては決して美くしい方ではない。唯特殊の點はすばらしく大規模であることとこれにやゝ優れた彫刻が施こされそれ等がよく明代初期の形式手法を傳へてゐる事である。初めは豐潤な色彩が施こされて居つたのであるが今は剝落してその痕跡もない。此の牌樓の北一千米程の所に大紅門がある。これは煉瓦造であつて三闕、アーチ形の門が三つある。その大きさは東西百二十六尺、南北三十六尺、アーチ

の廣さは十八尺である。大紅門の北四百米の所には碑樓がある。碑樓は八十七尺餘平方の重層入母屋造りの建築であつて十六尺程の廣さを有つアーチ形の道路が十字形に造られその交叉點には高さ二十七尺の碑があり、碑は龜趺の上に立つてゐる。碑面には

大明長陵神功聖德碑　洪熙元年四月十七日孝子嗣皇帝

と刻まれてゐる。此の建物は全部煉瓦造りであつてその上に木造建築の樣に彩色を施こしてゐる。碑樓の前後には一對宛の華表柱がある。これは八角の臺の上に立つた八角柱であつて表面には雲龍の薄肉彫があり、柱頭の下には雲形の貫があり、柱頭の上には往天虎と稱する龍の樣な怪獸がのつてゐる。全體の高さは三十六尺ある。碑樓の北三百米の所に又一對の華表がある、之は前の華表より低く二十五尺の高さ、六角石柱である。華表の北五十米を距てゝ陵道の左右に石物類が並んでゐる其種類は次の樣である。

一、獅子の坐像
二、獅子の立像
三、犀の坐像
四、犀の立像
五、駱駝の坐像
六、駱駝の立像
七、象の坐像
八、象の立像
九、麟の坐像
十、麟の立像
十一、馬の坐像
十二、馬の立像
十三、武官の立像（第三十九圖）
十四、武官の立像

十五、文官の立像（第四十圖）
十六、文官の立像
十七、文官の立像
十八、文官の立像

即ち石獸類は總べて坐像と立像との一對宛となり、石人類はその容貌服裝等から見て、高官の人と否との區別がある樣である。これ等の石物は白大理石でその臺と共に一石から彫り出したもので、最も大なるもので長さ十二尺餘、高さ臺を除いて十尺、幅六尺とあるから臺を除いたもののみでも七百二十立方尺もある巨石を用ひたものである。此の石物の列が終ると石門がある。石門の裡は廣莫たる大平野であつて、その盡くる所、即ち石門から北方凡そ十里の所、天壽山の南麓に長陵がある。先づ第一に三闕單層入母屋造りの門があり、門內の東方に碑樓がある。門の北方には五楹三闕單層入母屋造の大門があるが、此れを稜恩門と稱する。白石で造つた基壇

があり、基壇には勾欄があり、前後に三箇所の階段がある。此の稜恩門から左右に牆壁が出て大きな院子を圍んでゐるが、その中央に大殿がある、即ち稜恩殿（第四十一圖）である。稜恩殿は三成壇の上に建つた九間五面重層四注造りの大建築であつて、前面が二百二十尺餘、側面が九十五尺餘、直徑三尺餘の柱が三十二本あつて、楠の一本柱であるといふ。內部は明代初期の特徵を有つた裝飾が施こされ、天井は格天井であつて、唐草が描いてある。我邦の拜殿の樣なもので內部に皇帝の位牌が安置されてゐる。稜恩門の北方に三座門があり、門內に小碑樓があり、その北に石造の五石供がある。此の北方に碑樓があるがこれは高い牆壁上にある高樓でアーチ形の隧道があり曲折して上に昇ることが出來るが樓內には「成祖文皇帝之陵」と刻んだ碑があり此れに色彩を施こしてゐる。此樓の北方が即ち墳丘である。

以上の形式は長陵に於けるそれであつてその宏大な規模は驚くべきもの

であるが、他の十二陵も大體に於いてその規模に大小はあるが形式に大差がない。即ち支那歴代帝陵は、以上に述べた樣に相當何れも宏大なもので あるが、その墳丘に達する迄の施設外觀は明陵に及ぶものがないといつて好いであろう。清時代となつてから彼の太祖や太宗の陵を滿洲に營造し、その後の帝陵を北京近郊に營造した時は、總べて此の明陵の規制に依つたものであつて、それを小規模にし、又多少の變化がある丈けであつて大體に於いて非常によく似てゐる。清代の帝陵といへば先づ滿洲にある清の三陵であろう。三陵とは永陵、福陵、昭陵のことである。永陵は清朝祖先を祀つたものであり、福陵は俗に東陵と稱し太祖高皇帝、昭陵は北陵ともいひこれには太宗文皇帝を祀つてゐる。いづれも殆んど同樣の樣式を有つてゐる。今北陵の大體を述べて清陵の一般を窺ふことにする。

先づ最南方に下馬牌一對が立ち、その四十五米程北方に華表柱一對がある。これは明陵のものと同じ形式である。華表柱から八十五米程北に石獅子一對がある。これから百米程北に神橋があり、これを渡つて八十米程進むと石造の牌樓がある。此の牌樓は明陵のものに比して遙かに小さく三闕であるがその格好は遙かに明陵のものに優つてゐる。牌樓を入つて北進すると正門がある。此れは單層入母屋の三闕門であつてその前方には東方に門房、更衣廳、その奥に靜房即ち厠があるし、西方には門房、宰殺廳がある。正門から東西に牆壁が延び更らに北進して陵域を包んでゐる。牆壁には東西に各一門がありその前方に下馬牌がある。正門を入ると、左右に一對の表柱がありその北に石獸類が左右に並んでゐる。盛京通志には麒麟、獅子、虎、駱駝、馬、各二と記してあるが、此記事と實際とは符合しない即ち

一、獅子　一對
二、麒麟　二對
三、馬　一對

四、駱駝　一對
五、象　一對

である。石物の列が終ると碑閣があり中に大清昭陵神功聖德碑（康熙二十七年十二月初五日孝子嗣皇帝）がある。これは滿漢兩文で碑文を美くしく刻んでゐる。明陵に倣つたものである。碑閣の北に又一對の華表があり、その北方の左右には茶膳房、果房、滌器房、省牲亭、齊班房（依盛京通志）等があつて正面には高い城壁の上に隆恩門がある、これは入母屋三層樓である。門の左右から高い城壁が廣い院子を包んでゐるが此の城壁を方城と稱し四隅に重層四方千鳥破風造りの角樓がある。院子の中央に隆恩殿がある。これは二成壇の上に立ち單層入母屋造りで內外共に美くしく彩色され內部に玉座が設けられその後方の厨子には寢臺がありその上に皇帝皇后の神位が安置してある。殿の前には東西各二棟の配殿があり一基の焚帛石樓がある。殿後に小牌樓、五石供があり一對の望柱が立つてゐる。それから

明樓があつてその中に「太宗文皇帝之陵」と滿漢兩文字を刻み之れに彩色を施こしてあるがこれ等の形式は全く明陵と同じである。明樓の北に月牙城と方城とを以つて墳丘を包んでゐるその北方に隆業山が築かれてゐる。これは人工の山である。以上は北陵の形式の大體であるが、東陵と大差がない。尙盛京通志にも記してある樣に、北陵の西北に妃嬪の墳墓がある、牆壁や門、殿宇の半ば荒廢したものの北に幾つかの小さな墳がある。

支那に於ける歷代帝陵の大略を簡單乍ら記述し終つた譯であるが、その墳丘內部の構造や又は墳丘そのものの外觀形式はともかくとして陵域を飾る施設の宏大な事は世界民族中多くその比がないのみでなく、明陵の如きに至つては實に世界最大の帝陵であるといはねばならぬ。かくの如き支那帝陵の形式は矢張り朝鮮に傳へられてゐるのであつて、唐代の文物は總べてに亙つて、朝鮮に移入されたが、帝陵の規制も同樣であつて朝鮮王陵は大體に於いて支那唐代の帝陵を基礎として發達して來たものである。然し

乍ら支那に於いては生時は室を別にし、死すれば墓を共にするといつた樣な考へが古くから行はれ皇帝皇后は普通合葬されてゐるが、朝鮮に於いてはその陵は別々に營まれてゐる。高麗の恭愍王の玄陵とその妃の正陵とは二つの陵が連絡結合して出來てゐるが、合葬といへば言へないこともないが、これ位が例外であつて一般には別々に葬られてゐる。我邦に於いても矢張り朝鮮のそれの樣に天皇皇后陵は各々別々に造られてゐる。

一八　柱礎に就いて

堀立て柱の行はれて居つた時代の事はともかくとして、少し建築法が進んで來ると、柱は必ず何か石等の上に立てられる。それが次第に美くしい形をしてくる。世界どこの建築をみても少し進んだ程度のそれには必ず此の柱礎がありその上に柱身が立つて居つて上部には多くの場合に多少裝飾された部分があり、又は別に柱礎に相應する所謂柱頭なるものがある。支那のそれをみても、柱の上部には、はつきりと柱頭と稱すべきものがないかも知れないが組物等が用ひられてゐる場合にはその大斗（マスガタ）は柱頭の役を務めてゐるものといふことが出來る。柱頭や柱身のことは今は言はないで、少し柱礎卽ち「いしづゑ」に就いて古い所を一瞥してみよう。

支那に現存する遺物の上で柱礎の存在を明かに證明し得るものは、先づ後漢時代であらう。併し乍らこれとても柱礎の實物そのものが現存してゐる譯ではないのであつて、他の遺物からそれを比較的に的確に證明し得るに過ぎない。卽ち後漢時代の遺物として信じられてゐる所の、彼の畫像石に表はれてゐる。建築圖樣の中には柱の下部に礎石のあるものが存在する。畫像石の圖樣が後漢時代の遺物であることは今日疑ひを容れない所であるから、これに礎石が表はされゐる以上此時代の建築物には礎石が一般に用

ひられたものであると斷言しても過りはないであらう。私の考へでは、文獻の上からは可成り古い時代まで遡ることが出來るのであるから、もつと支那の遺跡調査が科學的な計畫の下に行はれる樣になれば相當古い時代の遺物を發見することが出來て、而かもそれ等の年代等も正しく考察される時期が來るものと信じてゐる。併し乍ら今の處寡聞な私は柱礎の存在を具體的には後漢以前に遡ることは出來ないのである。然らば文獻に表はれてゐるものはどうであるか。宋の高承の事物紀原卷八の石礎の條に「古へは之れを質礎と謂ふ、尙書大傳に曰く、大夫には石材有り、庶人には石承有り」と記し「注に石材は柱下の質也、石承は柱下に當るのみ、外に出だして以つて飾りと爲さず」とあるのが恐らく最も古い所であらう。質は礩の字であるが、此の尙書は普通に殷代の文獻といはれてゐるけれども、殷代と思はれるのはその中僅かの數篇であつて、其他は周代のものであると信じられてゐる。何れにしても、周代旣に柱下に石材が用ひられて居つたと

いふことは、文獻上これを認めることが出來るのであつて、又恐らく最も古い文獻であらうと思ふ。此の時代に柱礎なるものが一般的に用ひられて居つただろうといふ想像はこの文に依つて確かであるが、然らば、どんな形式のものであつたか、勿論知ることが出來ないが、單に石材を柱下に用ひたのみで、何等裝飾的の意味のなかつたこと、從つてその形式は極めて簡單なものであつたに違ひない。說文といふ書には、楮といふ字が載せてあつて、柱の底であると解し、注には今の礎であるとしてある。營造法式には此の字に就いて「古は木を用ひ、今は石を以つてす」と言つてゐる。此等から考へると、太古には木材で柱の臺を作つたものかも知れないが、此の邊の詮索は今は省いておく然し乍ら序いでに文字の事を一言すると柱礎といふ意味に使用されてゐる字は前に記した處の礩や楢の他に、博雅や義訓等の書には「碣。礎。礩」といふ樣な字がある。(營造法式には此等の他に「碣。碌。」等も礎の樣に解してゐるが今の字引きにはそんな意味は記して

ない）

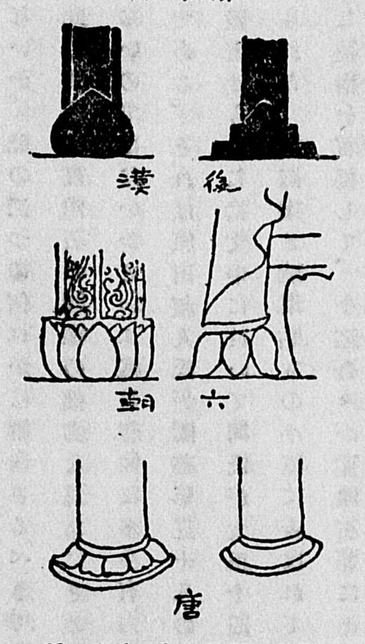
周代の柱礎の形式はさきに私が想像した如くに、甚だ簡單なものであつた樣に思はれるが前漢時代になつてくると建築法が進歩しこれに依つてその裝飾が發達し從つて柱礎等の形式も餘程立派なものとなつた樣に考へられる。三輔黃圖には「雕楹玉碣」といふ句があり、張衡の西京の賦にも之れと同樣の句があるし、班固の西都の賦には「玉瑱を雕み以つて楹を居ゆ」とある。

此等の記事が前漢時代の建築の實際をどの程度に傳へてゐるかといふ樣な事になると、多少面倒な議論になるが、今は只此の記事を以つて、當時の實際を言つたものとして、その柱礎の形式はどうであつたかといふ樣な事を少し想像してみよう。今此處に掲げた程度の字句丈けでは前漢時代の建築裝飾を想像することは出來ないけれども、三輔黃圖や文選に修められてゐる所の種々の文章等をみるとその眞僞はともかくとして實にすばらしいものであつた。別項「漢宮の裝飾」中に引用した。西京雜記の文に依つてもその一班は窺はれるであろう。そこで今此處に引用した一二の句に見えてゐる樣な、彫刻を施こした柱や玉石で造つた礎といつた樣なことも必ずしも文飾のみではない樣にも思へる。玉瑱を雕んで柱を此の上に立てたといふことも別に、驚く程のことでもない。何故ならば我々は玉といふと、直ちに寶玉を聯想し、甚だ高價な剛玉や紅玉を思ふのであるが、支那の文章に表はれてゐる玉なるものは必ずしもそんな高貴な玉類のみをいふのではない、大理石位のものは堂々と玉石と記されてゐる。別の話であるが奉天の北陵（清の太宗の陵）の寢殿の前面の敷石一枚は可成り大きなもので、巾が三尺近く長さが四尺以上もあろうと思はれる石は彼の高價な翡翠である。此んな事を思へば柱礎に所謂玉石位の使用はまあ驚くにも當らないのである。尙進んで私は私の想像を逞ましうしてみよう。後漢時代の遺物として信じられてゐる畫像石の中に當時の建築を窺ふに足る樣な圖樣のある

ことは、前にも一寸と述べておいたが、此のものによつて知ることの出來る後漢時代の柱礎の形式はどんなものであるかといふと、柱の直徑よりも大きな、そして割合に高さのある石が用ひられ、あるものはその上部に突起した部分、即ちホゾを作つて柱の下面にそれに相當する小穴を堀り、以つて柱が礎石の上からづれ出さない樣にしたものゝあることを想像するに足るものさへある。併し乍ら此の圖樣に表はれてゐる版圖に於いてはその建築物も比較的に簡單なものであり、幼稚なものであつて、從つてそれに用ひられてゐる礎石等も甚だ簡單なものである。私は非科學的な態度ではあるが、文獻の上から想像して、前漢時代の建築は相當に進步發達して居つたものであることを信じたいのであるが、後漢時代の畫像石に於ける建築圖樣から考へると、聊か失望せざるを得ないのである。そこで問題は次の樣な二つに歸著する。即ち一には前漢時代は勿論、後漢時代に於いても建築の術は文獻から想像する程そんなに進んで居つたものではなく、せいぜいあの圖樣に表はれてゐる位の所が、當時の最美のものであつたのではないか。二には兩漢時代の建築術は實際は文獻と多く距りのない程度に進步して居つたのであるが、會々畫像石にその眞相が畫かれずにあつたものではないか。此の二つの何れかに解決さるべきであるが、最近に於いて、私は此の問題は畫像石の圖樣の拙劣な爲めにその當時の建築の眞相を傳へてゐないのではないかといふ樣な想像に多少有力な資料を得ることが出來たのである。それは原田淑人氏が國華第三十八の一冊に漢代の人物畫と題して發表せられた論文中に於いて同氏が大正十四年に朝鮮樂浪の遺蹟で發見せられた、漆圓案と瑇瑁貼りの小匣に表はれてゐる漆繪を論ぜられその優秀な技術を賞揚して、今迄吾々が畫像石等にある圖樣を以つて漢代の繪畫を知悉して居つたのであるが、此の漆繪のある圖案と小匣との發見に依つて更らに優秀な繪畫の技法が漢代に存して居つたことを知り得るのであるといふ意味を附言されてゐるそれである。私は同氏の言の御多分に洩れ

す畫像石の繪畫的構圖、技法を少くとも後漢の一般的のものと考へて居つたものであるが、今原田氏の發見に依つてより優れた技法の存することを知ることが出來た以上は畫像石に表はされた建築圖樣が拙劣であり幼稚であつたとて、引いて建築術の實際をまで拙劣であり幼稚であつたとして悲觀するには當らないことになつたのである。

第四十二圖



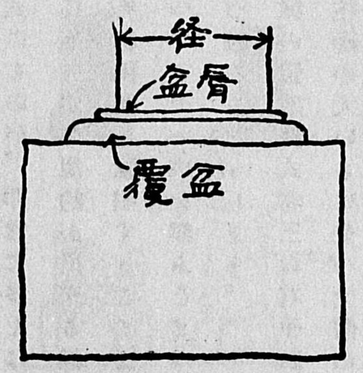
彫刻に現はれたる柱礎六種

そこで私の勝手な想像通り、前漢代に既に文獻に見える通り進歩した裝飾的の柱礎が行はれて居つたことにし、後漢代に於ける遺物に不幸にもそれを證明する樣なものを發見し得ないのではないか。後漢から、三國、兩晉、南北朝と所謂六朝時代となるのであるが、此の六朝時代頃となると、柱礎の形式も大分に進歩して裝飾的のものとなり、蓮瓣の彫刻したもの等も見られる、從つて唐時代以後柱礎の形式は著しく發達し又裝飾的のものとなつて種々な變つた形式のものが、非常に多くなつてきたのである。それと共にこれ等の寸法等にも一定の規約が出來る樣になつた。變つた形式の柱礎は今此處にその一々を掲出し說明することは省畧するが、挿圖の二三の例(第四十二圖)によつてその一斑を窺ふことゝして、宋時代の柱礎の規約を述べて此項を一先づ終ることゝしよう。

李誡の營造法式卷三の石作制度の中の柱礎の項にその規約が述べてあるが、柱礎の大いさは先づ大體の標準を柱の直徑の二倍としてゐる。だから柱の直徑を一尺とすると柱礎の一邊の長さ、或は直徑は二尺になる譯である。かくしてその柱礎の表面の大きさは定められるが、次ぎにその厚さは、石の大きさに依つて差があるので、先づ一尺四寸平方以下の礎石は一尺に

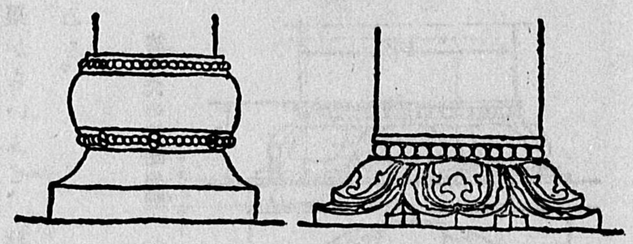
就て厚さ八寸とする。だから一尺平方の礎石ならば厚さが八寸となり一尺四寸ならば厚さは一尺一寸二分になる又三尺平方以上のものは、一尺に對して八寸といふ規準に依つて算出された數字から一尺の二分の一を引き去つた殘りの數字を以つて定める。即ち三尺の大きさの柱礎の厚さは一尺九寸となる譯であつて、四尺以上のものは厚さを三尺と定めてある、又その柱礎には、圖に示した樣な覆盆、盆脣と稱するものを刻り出して、これの寸法をも記載してある即ち覆盆の高さは柱礎の一邊が一尺に對して一寸の割合であり、盆脣の高さは覆盆の高さ一寸に對して一分の割合としてある。(第四十三圖) 宋時代頃になると柱礎にも可成り多種類の文樣が彫刻されたらしく、營造法式に載せてあるそれ等の文

第四十三圖



營造法式に依る宋代の柱礎

第四十四圖



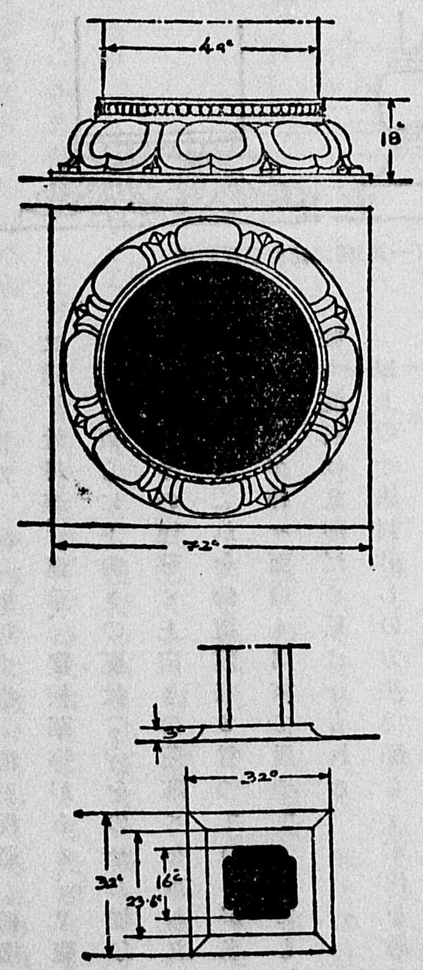
清時代の柱礎二種(其一)

樣にも龍水(波に龍の文樣)、海石榴華(柘榴の文樣)牡丹華、蓮華、寶相華等がある。又覆盆の上に更らに上向きの覆盆(?)をのせた樣なつまり下向きの蓮華と上向きの蓮華とを重ねた柱礎もあつてこれを仰覆蓮華と言つてゐるが名稱の附け方が仲々面白く出來て居つてこゝにも矢張り流石は支那だと思はせられる。

以上の寸法割出しの方法は恐らく宋代を通じてその前後の時代一般に行はれた大體の比例だと考へて好からうがこれとよく似た樣な規準が清の工程做法にも載つてゐる。この書に依ると矢張り柱礎の大いさは柱の直徑の二倍とし、厚さをその半分としてゐる。但し柱の直徑が七寸以下のものは柱礎はその二

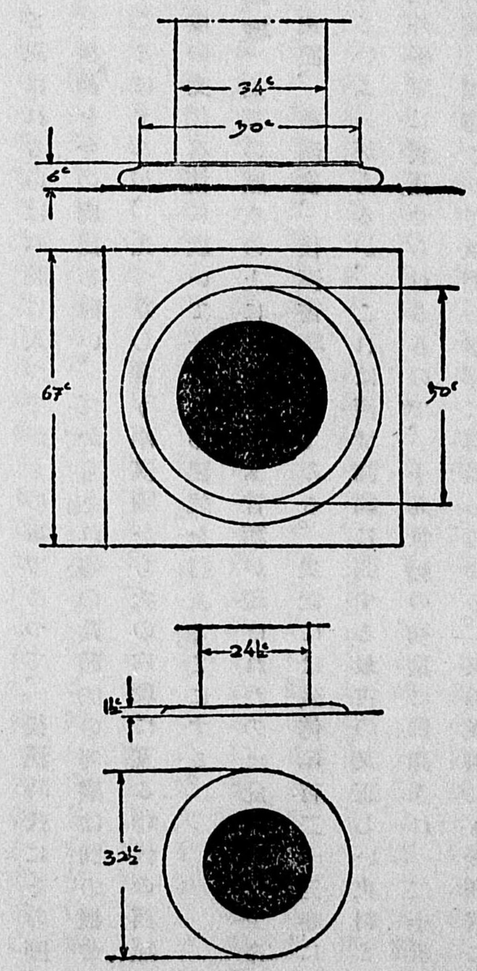
倍よりも二寸少なく又厚さはその三分の一としてある。私が今迄に實測した結果からいふと、此等の規定に相當するものはないが大體の比例は似通つてゐる。

第四十五圖



清時代の柱礎四種（其二）

同圖



一九　漢代頃の西域及び印度事情

印度の土地で發達した美術がどんな徑路に依つて支那に入つたか、又そ

の徑路に於いて西域諸國がどんな影響を與へ、どんな關係にあつたかといふことに對しては近時次第に明瞭にされつゝあるけれども未だその充分な研究は將來の學者の努力に俟たねばならないのである。此の地方との交通接觸といふことは、既に前漢の次に開けてはゐるが、美術の上に影響のあつたと思はれるのは六朝に入つてからの事であつて、後漢時代にその歴然とした根跡を今の處認め難い。だからそれ等の具體的の考察は別の機會に讓ることにするが、先づ差し當り兩漢頃から次の六朝に亙る時代の西域及び印度の文化事情に就いて一通りの記述を行ふことにする。

西域。 支那の歴史の上に西域といふ言葉が現はれたのは此の時代であつて、史記、前漢書、後漢書等に出てゐる。史記には列傳第百二十三卷に大宛傳といふのがあるが、これは西域諸國に關する最古の又正しい史料として内外學者に貴重せられるもので、十九世紀の初葉に佛譯され、二十世紀の初葉に獨譯されて歐洲の學界に裨益してゐる。又前漢書にも後漢書にも域傳なるものが載せられてゐる。此等の諸書にいふ所の西域といふのは漢の領土よりも西方の國を指したものであつて、それ等の人種は先づ大體に於いて亞細亞南方系民族中の西藏緬甸族(Tibetan and Burmese Group)と、更らに北方系民族中の土耳古族(Turkic Group)との二族に屬するものであろうと考へられる。支那人士の間に西域諸國の事情が知られるに至つたのは張騫の功績である。始め前漢の武帝が匈奴(蒙古族に屬する)の盛大を惡んでこれを征せんとしてその計畫を立てたのであるが、その策戰上當時西方にあつて勢力漸く擴大して來た月氏(土耳古族に屬する)と結んで匈奴を挾擊しようとした。そして先づ月氏と和合する爲めにこれに使する者を天下に求めた處が關中の張騫がこれに應じて月氏に使することゝなり、建元三年(西紀前一三八)に長安を發して西域の諸國に漸く達して元朔三年(西紀前一二六)即ち十三年目に長安に歸着した。張騫の旅行の目的は不幸にして達せられずに終つたけれども、此の爲めに西域地方の知識は頓に增し當時此

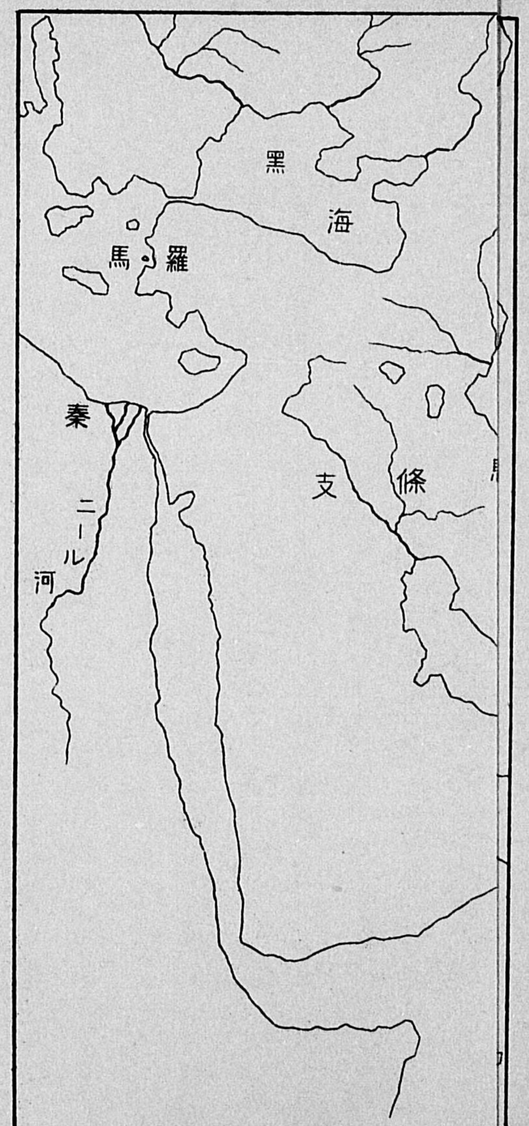
の地方に旅するものは相當の數に上つたのであつた。張騫はその後即ち元鼎二年(西紀前一一五)に更らに西域に使してゐるのであつて、此の爲めに西域諸國で漢に通ずるものが三十餘國に達したのであつた。かくして前漢武帝の頃には西域との折衝は可成り密接なものであつたのであるが、當時のそれ等西域諸國といふのはどんなものであつたかといふと天山北路には伊犂河の流域地方に烏孫(Wusun)が居り、天山南路の方には小國が三十六國、後に分割して五十餘國となつたがこれ等の諸國の中で主なものは、

車師前國——新疆省　吐魯番(Turfan)
車師後國——同　濟木薩(Tzimsa)
焉　耆——同　哈喇沙爾(Kharashar)
龜　茲——同　庫　車(Kucha)
溫　宿——同　阿克蘇(Aksu)
疏　勒——同　喀什喝爾(Kashgar)
于　闐——同　和　闐(Khhotan)
樓　蘭——鄯善の南
莎　車——同　葉爾羌(Yarkand)
大　宛——舊露領中央亞細亞 Ferghana 地方
康　居——大宛の西、北、Syr Daria 流域を中心とした地方
奄　蔡——康居の西北、裏海の北
大月氏——始め匈奴の西方、敦煌、天山の間に居たが後中央亞細亞に入つて一國を立てた。
大　夏——(Bactria)中央亞細亞のアラル湖に入る嬀水(Oxus)即ち現今の Amu Daria の流域
安　息——(Parthia)大體現今の波斯方面
高　附——今のアフガニスタンの Kabul の地方
罽　賓——今の印度河(R. Iudus)上流の Kashmir 地方。(白鳥博士の說に

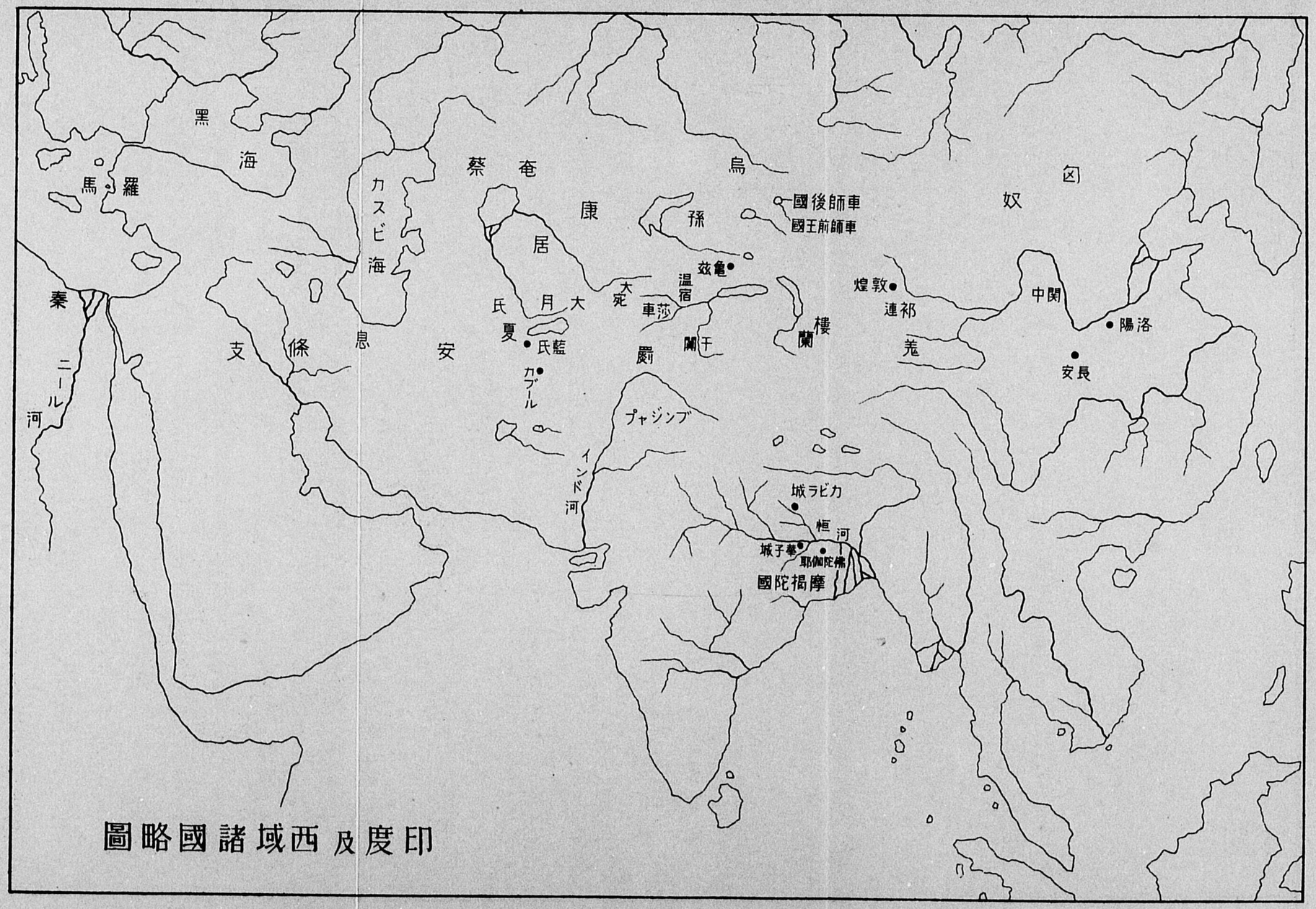
依るゝ健陀羅 Gandhara 地方に當る。東洋學報第六卷同博士著罽賓國考參照)

以上に列記した樣な西域の諸國(圖參照)は勿論その住民も同一の一種族のみではないし、又文化の程度も甚だまちまちである。張騫が歸國してその傳聞した所を武帝に復奏した所が史記の大宛傳に載つてゐる。今その文に依つて西域諸國の一二に就いて見ると次の樣である。

大宛在匈奴西南。在漢正西。去漢可萬里。其俗土著耕田。田稻麥。有蒲陶酒。多善馬。馬汗血。其先天馬子也。有城郭屋室。其屬邑大小七十餘城。衆可數十萬。其兵弓矛騎射。其北則康居。西則大月氏。西南則大夏。東北則烏孫。東則扜罙。于寘。于寘之西。則水皆西流注西海。其東水東流油鹽澤。鹽澤潛行地下。其南則河源出焉。多玉石。河注中國。而樓蘭姑師邑。有城郭臨鹽澤。鹽澤去長安可五千里。匈奴右方居鹽澤以東。至隴西長城南接羌。焉漢道焉。(鹽澤とあるのは今の湖水羅布泊 (Lob-nor



及西域諸國略圖



印度及西域諸國略圖

水東流泄鹽澤。鹽澤潛行地下。其南則河源出焉。多玉石。河注中國而樓蘭姑師邑。有城郭臨鹽澤。鹽澤去長安可五千里。匈奴右方居鹽澤以東。至隴西長城南接羌。鳥漢道焉。(鹽澤とあるのは今の湖水羅布泊 (Lob-nor

のこと）

烏孫在大宛東北可二千里。行國隨畜。與匈奴同俗。控弦者數萬。敢戰。故服匈奴。及盛取其羈屬。不肯往朝會焉。

康居在大宛西北可二千里。行國與月氏大同俗。控弦者八九萬。與大宛隣國。國小。南羈事月氏。東羈事匈奴。

奄蔡在康居西北可二千里。行國與康居大同俗。控弦者十餘萬。臨大澤無崖。蓋乃北海云。

大月氏在大宛西可二三千里。居嬀水北。其南則大夏。西則安息。北則康居。行國也。隨畜移徙。與匈奴同俗。控弦者可一二十萬。故恃彊輕匈奴。及冒頓立。攻破月氏。至匈奴老上單于。殺月氏王。以其頭爲飲器。始月氏居敦煌祁連間。及爲匈奴所敗。乃遠去。過宛西擊大夏而臣之。遂都嬀水北。爲王庭。其餘小衆不能去者。保南山羌。號小月氏。

安息在大月氏西可數千里。其俗土著。耕田田稻麥。蒲陶酒。城邑如大

宛。其屬小大數百城。地方數千里。最爲大國。臨嬀水。有市民商賈。用車及船行旁國。或數千里。以銀爲錢。錢如其王面。王死輒更錢效王面焉。畫革旁行以爲書記。其西則條枝。北則有奄蔡黎軒。

條枝在息西數千里。臨西海暑濕。耕田田稻。有大鳥卵如甕。人衆甚多。往往有小君長。而安息役屬之。以爲外國。國善眩。安息長老傳聞。條枝有弱水西王母。而未嘗見。

大夏在大宛西南二千餘里嬀水南。其俗土着。有城屋。與大宛同俗。無大王長。往往城邑置小長。其兵弱畏戰。善賈市。及大月氏西徙攻敗之。皆臣畜大夏。大夏民多可百餘萬。其都曰藍市城。有市販賈諸物。其東南有身毒國。云々（身毒國は印度の事）

要するに西域といふのは、支那の西方諸國即ち中央亞細亞地方の諸國をいふのであつて、張騫の探險以來此の方面に於ける知識が開け交通が行はるゝ樣になつて、此等の地方を通して或は直接に或は間接に遠く希臘羅馬

の美術から波斯、印度方面のそれが支那に入つて來るの機緣を生ずるに至つたのである。而かも西域諸國といはれる幾多の國の中で、以上述べた樣なのはその主なるものであるが、その中でも間接的に又直接的にそれ等美術の移動に關係を有するのは、大月氏、大夏、安息といつた樣な國々であるけれども、之も實は今の所比較的明瞭に知られてゐるといふ丈けであつて、それ以外の國々が全然關係がないか又當時如何なる程度の美術を有してゐたかといふ樣な事は、今後一層の探險發掘による精細な研究が行はれて後に明かにされることであつて今はそれ等に對して云々する時機ではない。大月氏、大夏、安息といつた樣な國々はどういふ點に於いて支那の美術と關係を有するかといふと、希臘羅馬のそれと印度のそれとを接觸混合させて一つの別の美術を作り上げたといふこと、從つてこれが支那に入つて所謂印度西域文化の影響といふことで呼ばれることになつた點に存する此等特殊の美術及びその個々の影響は以上の二三の國から支那にのみ入つ

たといふ譯ではないのであつて、中央亞細亞一帶所謂西域諸國に大體に於いて擴がつたことは想像し得らるゝのである。大谷光瑞氏の西域考古圖譜を始め、外國人によつて發表されてゐる所の于闐、龜玆、高昌、敦煌等の發掘研究の報告はこれを證してゐるのであつて西方諸國、印度、中央亞細亞方面の美術が佛教と關聯して支那に入つた經路、及び支那佛教美術發達の道程は今後の發見と研究とに依つて闡明されるのであつて、今の處では何等斷案的の事は論ぜられないのである。

印度。 此地には古くから數種の民族が住んでゐたのであるが、所謂印度アーリア人 (Indo-Aryans) が印度の西北部即ち印度河 (R. Indus) 上流の五河地方 (Punjab) から、移住して來て前住民を征服して印度の地に定住したのは、紀元前約二千年頃の事であると信じられて居る。此の印度アーリア人は高級な文化を有して居つた民族であつて、深遠な印度文化の基礎を造り上げたものである。後ガンガ河 (R. Gages) の流域地方に移つて强大な國家を建設するに至つたのであるが、此の印度の古代史をダット氏 (Dutt) は次の樣に四つに分けてゐる。(1)

一、吠陀時代——(2000B.C.——1400B.C.)
二、史詩時代——(1400B.C.——1000B.C.)
三、理論時代——(1000B.C.—— 242B.C.)
四、佛教時代——(242B.C.—— 500A.D.)
五、ブラーナ文學時代——(500A.D.——1194A.D)

併し乍ら印度の美術として、諸種の方面に影響を與へ又關係を有してゐるのは殆んど佛教美術であつて、此の佛教美術が起り始めたのは勿論佛教時代以後の事であるから、以下佛教時代に於ける印度の事情を大畧述べることとする。

註(1) Romesh Chunder Dutt ; A history of civilisation in Anciet India, 1891.
印度の古代の歴史は學者に依つて各々多少の差違のある區分法をなして

あるものであるが、前記ダット氏のものは比較的多くの人々に利用されてゐる。併し乍ら實は此の古代の歴史は甚だ判然しないものがあるのであつて、所傳の悉くは到底事實の眞相とすることは出來ないものである。そして所謂釋迦の出生頃迄の歴史は傳説の僅かに存する程度のものであるが、釋迦出生頃から後の事はやゝ確實なものが知られてゐる。釋迦の出生の年代は種々の異説があるが、普通には紀元前五五七年に憍薩羅國(Kosala)の迦毗羅城(Kapila)に生れたとなつてゐる。當時の印度には此の釋迦の生れた憍薩羅國と摩揭陀國(Magadha)との二大强國が存在して居り他に幾つかの小王國もあつた樣である。摩揭陀國といふのは初め史詩時代に於いて漸く恒河の上流地方に勢力を擴げて來たインドアーリア人の殖民中の主なるものの一種族である所のヴデア族(Videha)が恒河の北方、今のチルト(Tirhut)に植民して王國を建設したのに始まつてゐる。此のチルトは北部ベハル(Biher)にあるが後、南部ベハル、即ち摩揭陀に植民して次第に强大な王國を建設するに至つたものであるが、紀元前六〇〇年頃にサイスナーガ王(Saisunâga)が出て此の摩揭陀國にサイスナーガ王朝を開いた。此の王朝の第五代目に頻婆沙羅王(或は頻毘沙羅 Bimbisára に作る)が出たが、此頃が即ち釋迦出生の時代である。此の頻婆沙羅王は非常な賢明な君主であつて、その在位二十八年の間に摩揭陀國の基礎を固め、その勢力は中印度に比肩するものがなかつたのである。處がその子の阿闍世(Ajátasatru)の爲めに弑せられた。此の阿闍世も大いに國力を伸張して西部ベハル、北部ベハル等一帶の地を領有して居つたのであつて、彼の波吒釐子城(PátaliPutra)即ち今のパトナ(Patna)の都市は彼れの創建である。

釋迦が成道した佛陀伽耶(Bodh-gaya)の地は此の摩揭陀國にあるので、佛教を信仰するものは此國内に可成り多く、頻婆沙羅王は釋迦成道後之れに歸依し、その子の阿闍世も始めは反對して居つたが後その教を信ずるに至つた位であつた。阿闍世は三十餘年間在位したが、その後は餘り振はずナ

ンダ王 (Nanda) 家が次いだが、この間の事蹟として傳へられるものもなく、終ひに孔雀王朝即ちモールヤ王朝 (Maurya) になつて、始めて印度は統一されて印度王國が建設されたのである。此當時は恰度希臘に於いて歷山大王 (Alexander) が勃興して西方に遠征した頃に相當する。此歷山大王は紀元前三二三年に印度に遠征して、西北部の印度河上流の地方から侵入して來たのである。當時印度の西北部に存立して居つた多くの小王國は到底歷山大王の軍には敵せず、大王は進んで中印度にまで侵入し樣としたのであるが、終ひに之れを果さずしてその年にバビロンに歸つて續いて死沒したのである。此の大王の死報が印度に傳へられると、希臘に支配されて居つた西北部の小國は希臘の支配から脫し樣として反抗した。彼の旃達羅笈多 (Candragupta) と稱するものは、摩揭陀國のナンダ王家 (Nanda) に屬する人であるが、その首都を追はれて此の印度の西北部パンヂャブ (Punjub 即ち印度河上流地方) に逃れて潛かに兵を養つて居つたのであるが、此の機會に乘じて西紀前三二二年に摩揭陀國に歸つてナンダ王朝の末世の王を弑し、自ら王位に即いた。これが前に述べた孔雀王朝即ちモールヤ王朝 (Maurya) の始祖である。かくして此の旃達羅笈多は强大な摩揭陀國の王となり、その勢力を以つて一擧に西北部の印度を併呑して更らに進んで、歷山大王の遺將であり且つ大王の死後シリア (Syria) 王となつた所のセリューコス (Seleukos) と戰つて破り、和議を整へてその女を娶つて妃となした。此の爲めに摩揭陀國の版圖は非常に大きなもので、當時の印度に於ける文化の中心地である北半の他は彼れの爲めに統一されたのであつた。彼れは在位二十五年間で死し、その子の頻頭沙羅 (Bindusára) が位に卽き此の次ぎが彼の有名な阿育王 (Asoka) であつて、紀元前二七二年の事である、阿育王は羯陵伽 (Kalinga) 卽ち現今のオリツサ及びベンガルを征服して其版圖は益々擴張されて行つたが、此の羯陵伽の戰ひは甚だ慘忍を極めたものであつて死傷者が夥しかつた。王は太くこれを後悔して終ひに佛敎の尊信者となり、佛敎の保護者

であり、奬勵者であると共に政治上にも幾多の善政を布き、印度史上に沒す可らざる名君として傳へられるのである。此の阿育王の事蹟は極めて廣い範圍に亙るものであつて、到底その一々を詳記するの餘裕はないが、その中でも殊に吾々の立場から見逃すことの出來ない事は佛教の特別の保護者であつて、所謂佛教美術の最古の遺物として存するものは此の大王の時代に大王に依つて造られたものであるといふことである。印度の建築史は或はもつと廣く美術史は此の阿育王の時から始まつてゐるといふことはフアーガソン氏(James Fergusson) ハーヴェル氏 (E. B. Havell) 或はクーマラスワーミ氏(Ananda K. Koomaraswamy) 等が等しく論じて居る所である。此の佛教美術の上にも大なる業蹟を殘した阿育王は、在位三十七年間で西紀前二三二年に沒したのである。その死後所謂孔雀王朝(Maurya)は暫らく繼續したのであるが甚だ振はないものであつて、その衰頽の頃に此の孔雀王朝の部將であつたプシヤミトラ (Pusymitra) といふものが王を弑して自ら王位に即

いてシュンガ王朝 (Sunga) を創立した。此のシュンガ王朝は十代百五十二年程いてヴアースデヴア王 (Vasudeva) の創めたカンヴア王朝 (Kanva) が代つた。此のカンヴア王朝は四代四十五年續き、その次ぎに之れに代つたのはアンドラ王朝 (Andhra) であるが此のアンドラ王朝は三十代、四百五十六年間續いたといはれてゐる。此等の間に於ける印度の歴史は甚だ明瞭でないが、恐らくは特に著しい事蹟もなかつた樣である。アンドラ王朝の滅亡した年代は松本博士に[1]依ると紀元四五〇年であつて支那の南北朝時代に相當する。而して當時の印度國内は小王國が各地に分立して甚だ不統一の狀態にあつたが、西北部の地に盛んに他民族が侵入し、進んで中印度に迄その勢力を擴げるに至つた。彼の塞族(Saka))が中印度に侵入して所謂シャカ紀元を創めたのは西紀七八年卽ち支那に於いて後漢時代の初めに相當する。此處で先づ中印度の事情の記述を止め西北部の所謂印度河上流地方に於ける事情を畧說することゝする。

註　(1)松本文三郎博士著。印度の佛教美術三頁參照。(尙上來記述した文中の年代は總べて松本博士の此著に從つたものである)

此の印度の西北部は印度全土にとつての唯一の交通の要路に當つてゐるのであつて、古くは所謂イントアーリア人が此處から侵入して來た事は既に述べた通りであるが、由來此地方は他民族に屢々侵入され占領されて居つたのである。從つて外國文化に接觸するの機會も多く、印度固有のものとこれら外國のものと混合して特殊の美術をも大成するに至つたのである。紀元前五一八年には波斯王のダリウスが此地を占領して、その領土として居つたのであつて紀元前五世紀頃は此地は波斯の勢力の下にあつた。歷山大王が此地に侵入したのは前にも記した樣に、紀元前三二三年であるが其後孔雀王朝の旃陀羅笈多王の版圖となり阿育王の代を經て、その沒後は(紀元前一九〇年頃)大夏卽ちバクトリア(Bactria)の爲めに併呑されて居つたのである。此の大夏といふのは今の中央亞細亞のアム河(Amu Daria)流域卽ち嬀水(Oxus)の附近に建國して居つたもので希臘の殖民地であつた。此の大夏のユウクラチデス王(Eucratides)——紀元前一七〇年頃の時には都城を現今のタキシラ(Taxila)の附近の地に築いて、所謂希臘印度式(Greco-Indian Style)と言はれる佛教美術の一派を造り上げた。處が矢張り此の中亞の地に居つた塞族(Saka)といふ民族が此の前後の頃卽ち紀元前一六〇年頃にその隣國の月氏に壓迫せられて南に下つて印度の地に入り、當時此地方に勢力を張つて居つた所の大夏と屢々衝突したのである。塞族が終ひに印度の西北部に侵入し、進んで中印度に出てシャカ紀元を建てたのが西紀七八年であつたことは既に述べた通りであるが、此の塞族は併し西紀前十三世紀頃頃ぶる國力を伸張した安息に臣屬して居つた樣である。故に實際に此の印度の西北部地方に勢力を有つて居つたのは安息であつて、當時羅馬が盛んに中亞の諸國と戰つてこれを隷屬せしめ、進んで印度に侵入して來たのであるが安息は之れを妨いで終ひに羅馬をして印度の地に入ることを得ざらしめ

たのである。けれども此の安息の國勢も次第に振はないものとなつて內亂が起り甚だ衰頽するに至つた。これと共に中印度に於いてアンドラ王朝(Andhra)が又漸く衰微して國力甚だ振はないものとなつてゐた時であるが、これに乘じて紀元五〇年の頃に月氏が西北部に侵入し中印度方面へ迄も進出して所謂貴霜王朝(Kushan)なるものを創立した。此の月氏なるものは始めは敦煌祁連の間に居住して居つたものであるが、匈奴や烏孫の爲めに壓迫せられて、次第に西に移つて嬀水の北部に據つて居つたが塞族も壓迫し、塞族は南に下つて印度に侵入し、月氏は塞族の故地を占領して、游牧の狀態から次第に土着定住し國勢も發展し、西紀前一世紀の頃には南方の大夏を滅ぼしてこれを併呑した。當時月氏には休密、雙靡、貴霜、肸頓、高附の五翕侯(Yaghub)に分れて居つたのであるが、西紀四五年頃に此の五翕侯中の貴霜翕侯(Kushan Yaghub)の丘就卻(Kujula kadphises)が王位に卽いて、他の四翕侯を併せて月氏國を統一して都を大夏の舊都藍氏城(今のバルク

Balkh)に奠め、次第に諸方を蠶食して安息の舊領土を併せ國力は甚だ强大なものとなつた。此のクジウラ・カドフイセス(丘就卻)に次いで王位に卽いたのは閻膏珍(Wema Kadphises)であるが、此王の時には印度の西北部一帶は完全に月氏の勢力版圖に入り、中印度と國境を接して居つたのである。そして羅馬と通商して盛んに印度の產出品を羅馬へ輸出したのである。此のウエマ・カドフイセス(閻膏珍)の次ぎに出たのが有名な迦膩色伽(Kanishka)であつて、西紀一二〇年の頃卽ち支那では後漢の中葉、安帝の頃に當つてゐる。此の迦膩色伽王時代の月氏の國勢はその頂上に達して居つたのであつて、勢力の及ぶ所、その領域として居た所は、南は印度河に達し、北はカシュミル、ヤールカンド、カシュガル、和蘭の地方を併せ、遠く支那の新彊省天山南路の方に延び、東は中印度のアンドラ王朝の衰微に乘じて恒河の流域に達し、その都の華氏城も一時は月氏の爲めに陷れられて居つたのである。西は安息と接してアフガニスタン地方はその版圖に入れられて

居つた樣であるから、實に廣大な地域にその勢を擴げて居つたのであつて、迦膩色伽王は新たに都をプルシアプラ(Purshapura)即ち現今のペシアワル(Peshawar)に奠めたのであつた。彼れ迦膩色伽王は佛敎の保護奬勵者として阿育王と共に並び稱せられる人であつて、佛敎弘通の爲めには非常に力を盡し業蹟を殘してゐる。

迦膩色伽王の後は此の月氏の所謂貴霜王朝も甚だ振はないものであつて次第に衰微し、中印度のグプタ王朝が勃興するに至つて西北印度の地を失ひ、カブール(Kobul)の地方を僅かに保有してゐる程度のものであつたが、第五世紀に至つて匈奴の爲めにこれも亡ぼされたのである。印度の西北部の地方は以上の樣に屢々他民族に侵入され占領され、或は希臘のもとに、或は波斯のもとに、或は塞族に或は月氏に併合されてその宗敎なども種々なものが混入し、その文化も甚だ錯雜した關係を生ずるに至つたのである。印度に於ける恒河流域地方及び印度河上流地方の變遷は大畧前述した樣なものであるが、印度の佛敎美術は大體に於いて先づ前記二地方に依つて二大流派とすることが出來るのである。即ちその一は恒河流域地方の主として摩揭陀國の土地に行はれた中印度式とその二は印度河上流地方卽ち西北部の地に行はれた健陀羅式とである。今此の二つの系統をなす所の佛敎美術に就いて述べることは、餘りに詳細な部分に入り過ぎるし且つ又此の事に關しては次に記す樣な名著に於いて詳細に論述されてゐるから、以下その一二の主要な事項を摘記するに止める。

松本文三郎氏著　印度の佛敎美術及佛敎藝術とその人物
關野　貞氏著　印度の佛敎藝術に就いて(建築雜誌四〇〇號西遊雜信ノ四)
瀧　精一氏著　健馱羅式美術(國華二三六號)
濱田耕作氏著　希臘印度美術の東漸に就て(國華一八八——一九六)

中印度に於ける佛敎藝術卽ち中印度式の藝術は大體に先づ印度固有のものと考へて好い。今日に遺物の殘つてゐるものは、阿育王以後のものであ

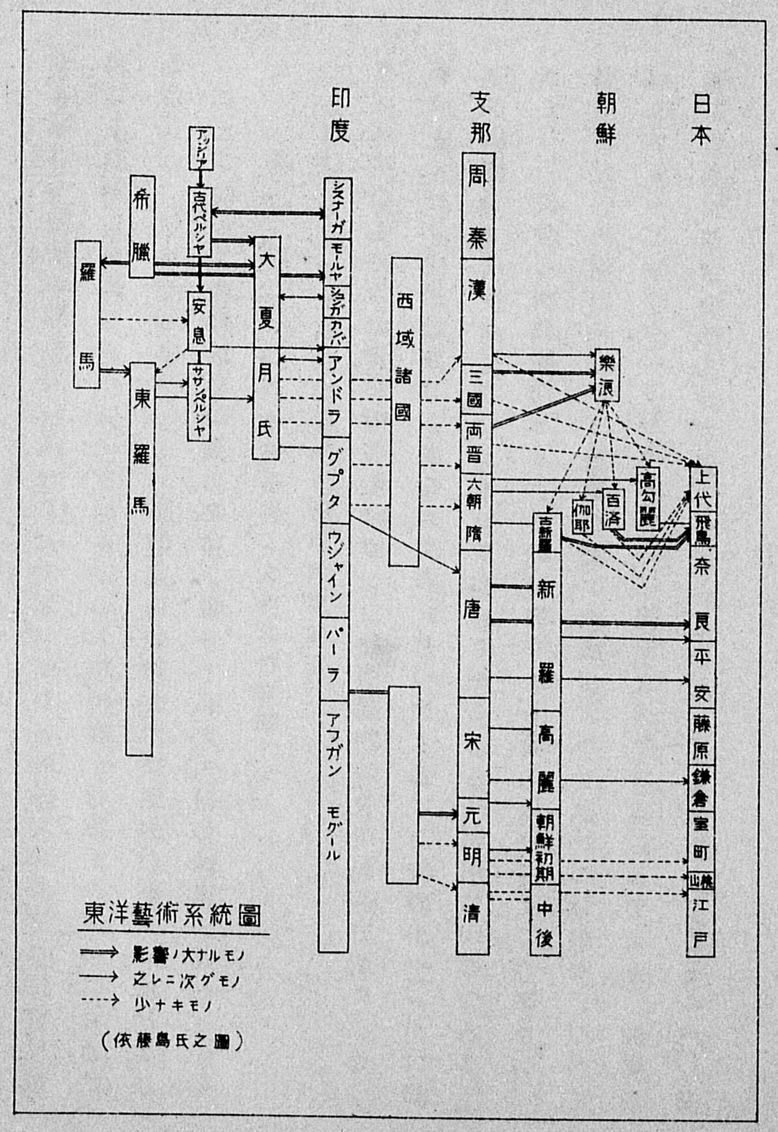
るがこれ等に表現されてゐる處のものは勿論、希臘等の影響のあつたらしいことを充分に認め得る樣なものがあるのであつて、例へば阿育王の建てたといふ石柱即ちスタンバス(Stambas)等の頭部にそれが存してゐる。けれども一般的に言つて中印度のものは印度固有のものであると認められてゐるのである。此の中印度式の佛教藝術として遺つてゐる所の建築的のものには、今述べた石柱の他には塔婆(Stupas)及びこれに附屬して石門と玉垣、招提又は支提、制底、制多等と譯されてゐる所のチャイチャ(Chaitya)精舍(Vihara)又は僧房といふもの等がある。右の中で塔婆又は卒塔婆(Stupas)と稱するものは、古いものでは阿育王の建立だと傳へられるサンチの大塔(Sanchi)があるし、アバヤギリアの塔(Abāyagiriya)等も古い方である。前者は紀元前二世紀頃、後者は紀元前一世紀頃といはれてゐる。又鹿野苑の塔(Barnath)は七世紀頃のものといはれ可成りに大きなものでゐる。これ等の印度の塔は支那に於ける佛塔形式の起原をなしてゐるといふことは學界一

般に認められる所である。

(勿論塔婆は中印度のみで行はれた譯でなく、西北部即ち健陀羅地方にも行はれこれ等健陀羅式塔婆が矢張り支那の佛塔形式發達の上に大きな關係を有すること勿論である)

又石門及び玉垣はサンチの塔の周圍のものを始めとして鹿野苑、佛陀伽耶(Bodh-Gaya)バルート(Bharhut)アマラバチ(Amaravati)ムトラ(Muttra)等にあるが何れも紀元前二世紀乃至紀元二三世紀頃のものである。これ等の石門は後所謂印度の塔門(Torana)となり、支那の牌樓の起原をなしたのではないかといはれてゐるが、此說[1]には私は甚だ贊成を表はすものである。又Chaityaなるものは有名なアジャンタ(Ajanta)を始めエロラ(Ellora)カルリー(Karli)ナーシック(Nasik)其他に多數に殘つてゐるか、これ等の中でアジャンタ、カルリー等の窟殿(Grotto)は矢張り支那の石窟寺の起原をなしてゐるものである。

次ぎに印度河流域即ち健陀羅式といはれる佛教美術はどうであるか。これは既に述べた樣に此の地方が屢々外國民族の侵入占領する所となつたのであつて、その中でも希臘殖民地となつたに就いては希臘式の傳統と技巧とをもつた大夏の技術家が續々入つて來て、こゝで印度固有の技巧と混合した一種の樣式を大成したのであつて、この事は既に述べた通りであるが、その所謂健陀羅式(Gandharan Style)なるものは西紀前二世紀の頃に始まつてゐるのであつて、當時の希臘印度王が佛教を尊信して多くの堂塔を作り佛像を彫刻した事に起因してゐる。そして大體紀元前二世紀の後半を最盛期として紀元後一世紀の頃までが先づ健陀羅式の流行期であつて迦膩色伽王の時代は衰頽期であるといはれてゐる。[2] そして四五世紀の頃には殆んど消滅してしまつたのであるが、此の健陀羅式の最も著しい特徴はその佛像の彫刻に表はされてゐるのであつて總べて希臘彫刻に胚胎してゐるものである。建築に於いてはその纏つた姿の遺物がないが、希臘式の細部が可成り



第四十六圖(本文二四二頁參照)

應用されてゐるのであつて最も著しいものはコリント式(Colinthian)や、又はアイオニア式(Ionic)の柱式(Order)が使用されてゐることである。此等の健陀羅式の美術は勿論早く後漢時代に支那に入つて居つたに違ひないのであるが、當時の佛教美術として支那に現存するものが少しもない爲めに、どの程度のものであつたかは今日では全く知ることが出來ないのである。而かもこれら健陀羅式なるものは支那に於いても直ちに支那化せられた爲めか其後の支那の佛教美術の遺物中には健陀羅式の分子は甚だ僅少である。

註(1) 松本文三郎氏著印度の佛教美術參照

(2) 同　佛教藝術とその人物參照

以上に於いて西域及び印度の事情と併せて印度の佛教美術の極めて大樣は叙し終つたのであるが、これ等印度の佛教美術が西域の諸國を通じて如何なる徑路で支那に入つたかといふことは濱田博士の論文に明かにされてゐるがその影響の程度等に就いては支那に於ける初期佛教美術の遺物が早

く壞滅して終つてゐる爲めに、何等具體的の參照を試みることは出來ないのである。又後漢以後の製作にかゝるものはその遺物遺跡が比較的よく現存してゐるが爲めに、多少その間の狀態を推知することは必ずしも不可能ではないのであるからそれ等に就いては後日の機會に於いて更らに充分の考究を費すこととしたい。第四十六圖は京城高工の藤島教授が作製された所の東洋藝術系統圖であるが甚だ簡明に了解することが出來ると思ふのでこゝに拜借轉載することにした。

二〇　門內繫鈴

あの有名な田尻北雷博士の玄關には田牛と書した木版があつてこれをたくと「たのもう」といふ意で取り次ぎの書生さんが出て來たものだといふことを聞いた事がある。又私の小供の頃時をり物を教はりにゆくお寺があつた。此の寺の玄關は森閑として小供の聲位でお賴みいたしますとどなつても奥へ通じないが、その爲に小さな鐘が吊してあつて撞木が紐でぶらさげてある。父が私にあの鐘をならせば取り次ぎが出てくるのだと教へてくれたので、いつもそのお寺に行く毎に面白半分にがん〳〵と鳴して小僧さんを驚かして嬉しがつた事を記憶して居る。玄關に鈴や鐘を吊して訪客に之をたゝかせるといふ趣向はどこにもよく見受けることであつて讀書人らしい奥床しさがある。こうした考へは矢張りもとは支那から始まつたものではないかと私は思ふ。英國などにもよくある所のノッカーはつまり支那の門鈴と同じ樣なもので必ずしも支那が專賣ではなくどこの地方にもあるものらしい。けれども東洋殊に支那のものに特別の興味を覺える私達には、ひいき目か慾目かしらぬが支那の門鈴が雅趣に富んでゐる樣に思へてならぬ。門鈴といふのは門內に鈴を吊して紐を門外に繫いでこれを引いてなら

すものである。橋西雜記に依ると、宋の陳雍の家に大鈴が吊してあつてその旁らに「無錢雇僕客至請挽之」と書いてあつたそうである。北平邊の讀書人の門内には今でも此の雅趣が喜ばれてゐる。橋西雜記の著者は北平などの門鈴のある家に「某姓拉鈴」などとあるのは陳雍頃の遺風だといつてゐる。鈴を吊してゐるのも仲々面白いが、鈴を吊さないで門の扉に金具をとりつけ、これに大きな鐵の環をかけてあつて訪客は此の環を動かして金具を打つて凉しい音をたてゝ家人に開門を乞ふ樣なのもある。金具の形は普通は丸い恰かも我邦の釘かくしの樣なものでこれに一個又は二個の環が附けてある。立派なものになると獸面を彫刻したものもあつてこれを獸面環又は獸環といつてゐる。獸環が用ひられ始めたのは古いもので後漢の遺物にも見られるし前漢の文獻にも見えてゐるが、一種のノッカーの樣な役をなすようになつたのはもつと後代のことだらうと思ふ。此等の金具の位置も我邦の扉の把手の樣に低くなく扉の中ばより遙か上にある。兩開きの

扉に一對の金具が取り附けられてゐる恰好はよく釣合ひが取れて仲々美しい。序いでながら扉の把手を下の方につけるのは我邦丈けの樣である。西洋のものも半ば以上に取りつけてゐる何時の頃からそんな習慣になつたのか知らないが古建築等のものをみるとそうでもないから、背の低い日本人が便利だと思つて低くした所から生じたことであるかも知れぬ。

二一　支那の民族と文化

支那の建築を研究する上に重要な關係を有する事項であるが爲めに、支那民族及びその文化西方起原說に關する從來の諸學說の大畧の紹介を行ふことにする。本文は主として橋本增吉氏の論著に負ふ所甚だ大である事を斷つておく。

一つの建築樣式を大成する上に、必要な素因をなすものゝ主なるものは、その民族的關係とそれの居住して居つた土地の地理的關係である。同一民族であつても、その居住して居つた土地に依つて各々異つた建築樣式を大成してゐるし、又同一地方に於いてもその民族を異にしてゐる場合には、その建築樣式は異つてゐる。前者の最も著しい例は、印度建築である。印度建築を大成した所謂 Indo-Aryan Nation は、人種學的に言へば西洋人であるが、その居住して居る土地は地理的に言へば東洋である。又後者の例としては、世界の到る所にその例がある。交通が自由となり、移住が盛んとなつた今日に於いて、その實例は可成りに多い。處が支那に於いては、先づその土地も人種も共に東洋のものである。そうして大體に於いて今日支那の建築と稱する所のもの、即ち私が此書に取扱つてゐるものは、現今の中華民國と畧同一の國土に於いて所謂漢民族と稱せらるゝ一文化民族に依つて形成されたものであるが、併し必ずしもその漢民族のみの建築でもなく、又支那の國土に於いて發生し發達したものゝみでもない。それ等の點は次第に叙述してゆくが、先づその漢民族を中心として亞細亞大陸民族の大體を述べ、且つ又漢民族の由來に關して結局は定說がないにしても一通りの學說を紹介することにする。

現今地球の表面に居住する所の民族を大別すると、歐羅巴系民族と亞細亞系民族との二つとなるが、此の中で亞細亞系民族と稱するのは大體に於いて所謂亞細亞大陸に居住してゐるのであつて、これを更らに詳しく言ふと、東方は支那本部から蒙古滿洲新疆西藏の方面、西伯利亞、トルキスタン、歐露の北部地方一帶及び遠くスカンヂナヴア、フインランド、ラプランド、中央亞細亞方面からトルコ、ハンガリーにまで及んでゐる。此の極めて廣大な地方に延蔓してゐる所の所謂亞細亞民族なるものも、實は更らに幾つかの系統の民族から出來てゐるのであつて、先づその言語の相違から區別して、亞細亞南方系統民族と亞細亞北方系統民族との二つとするこ

とが出來る。此の亞細亞南方系統民族と稱せられるものは、その使用する言語が總べて單綴(Monosyllabic)であつて、全く孤立してゐる。そうしてその語尾は少しも變化しない。只その文中の位置の相違に依つて品詞を異にし、又文法上の關係を示すものである。こういふ性質の言語を單綴語(Monosyllabic Language)と稱するが、此の種の言語は所謂支那語がその一例であつて、この系統の南方民族の言語が總べてこれである。だから此の種の言話を話してゐる所の亞細亞南方系統民族の事を普通に孤立語(Isolating Language)族と稱し、又はその大部分が、支那語であるから、支那語族とも稱するが、此等南方系統民族は更らにこれを細別して、一、支那族(China Group)二、交趾支那族(Cochin-Chinese Group)三、西藏緬甸族(Tibetan and Burmese Group)といふ三種になる。支那族といふのは所謂漢民族の事である。私が取扱つてゐる支那の建築の系統を大成した最も主要な民族であり、又世界的に比類少ない大文化を建設した民族である。彼等は支那本部の地を

主として根據として發展進歩したものである。交趾支那族といふのは安南、暹羅方面の民族であつて歴史上に荊蠻、閩越、南越、安南、交趾、南詔、大理、林邑、占城、眞臘、暹、羅斛(老撾)、暹羅等の名稱で表はれてゐるのがそれである。西藏緬甸族といふのは西藏地方を根據とし緬甸方面にまで延びて居つた民族であつて、これは歴史上に氐、羌、吐蕃等の名稱で呼ばれ、四五世紀頃支那本部に入つて前秦、後秦、後涼等の諸國を建て又十一世紀頃西夏國を建てたものも此の民族である。次ぎに亞細亞北方系統民族の使用してゐる言語はこれを粘着語(Agglutinative Language)と稱し、主要な語の外に例へば我邦のテニヲハの樣な助語を用ひ、これを主要語に添加して文法上の關係を示す樣な性質のものであつて、我日本語の如きはこれに屬するが、この種の言語は南方系統民族の孤立語が單綴語であるに對して、總べて多綴語(Polysyllabic Language)である。此の言語を使用してゐる所の北方系統民族はその居住地がウラル山脈、アルタイ山脈を包括してゐる

爲めに、別にウラル、アルタイ語族(Ural-Altaic Branch)と稱するが、これを更らに細別すると一、通古斯族(Tungusic Group)二、蒙古族(Mongolic Group)三、土耳古族(Turkic Group)四、フィン族(Finic Group)五、サモエード族(Samoyedic Group)六、極北族(Arctic Group)七、日本族の七種になる。通古斯族といふのは西伯利亞、滿洲地方に住する民族であつて、前者を通古斯人(Tungus)後者を滿洲人(Manchus)と稱する歷史の上には肅愼、扶餘、高句麗、靺鞨、渤海、女眞(金)、清等の名で表はれてゐる。金は十二世紀頃中部地方に入寇して一時勢力を振つたし、清は十七世紀頃に明を亡ぼして支那を統一して一大帝國を建てた。蒙古族は內外蒙古の地に根據を有する民族であつて、匈奴、玁狁獯鬻、烏桓、鮮卑、奚、契丹(遼)等の史上の名稱は皆此の蒙古族であるといはれてゐる。十三世紀の終りに元と國號を建てた大帝國は此の蒙古族の活躍である。土耳古族は更らに細かく分られて Yakuts, Uigurs, Kirgis-Kasaks, Kara-kirgises, Karakalpaks, Turkomans, Uzbegs, Osmans, etc. となるのであつて、西南亞細亞からバルカン半島方面に分布されてゐる。歷史の上では月氏、烏孫、嚈噠、柔然、突厥、回紇等の名で表はれてゐるのがそれである。最後に日本族は單に言語の性質の上からは明かに糊着語であつて、即ちウラルアルタイ語系に屬する譯であるが、言語の比較研究のみを以つて、その民族の所屬や本源を論定することは甚だ危險な事であつて、この意味に於いて日本民族なるものが如何なる系統に屬するかの問題に就いては、種々の說が發表されてゐるが、私の取扱つてゐる支那の建築には直接何等の關係がないから省畧する。

即ち以上に述べた樣な亞細亞民族中で、所謂支那建築史を構成してゐる所の最も主なる民族は、支那民族即ち漢民族である。然らばその漢民族なるものは、本來此地に居住して居つたものであるか、それとも他から移住して來たものであるか、又その大なる文化は彼れ等民族が自ら生み出したものであるか、或は他から學んだものであるかに就いては、種々の說が從

來發表されてゐるけれども、結局いづれも科學的に確實な根據を有してゐるのではなくして、一つの學說乃至は臆說に過ぎないのであつて、今日では新石器時代(Neolithic Age)の文化を有してゐる一文化民族が黃河沿岸地方に居住して居つて、これが次第に大きくなつて今日の支那の基礎をなしたものであるといふ事實から、支那の文化史は始められなければならないのである。

抑も人類の文化開發の初期はどんな狀態であつたか、そうしてそれがどんな經過を取つて發展して行つたものであるかといふ樣な事は、考古學的研究が最近著しく進步して來たので畧明かにされてゐる。勿論それは一般的法則的の事柄であつて、土地に依り又は民族に依つては、未だ全然攻究せられないものもある。支那のそれは今漸くその方面の研究が緒に就かうとしてゐるのであつて、支那上代の考古學的研究は頗ぶる前途多忙なものである。それはともあれ、先づ文化發達の一般的經過に對する學說を紹介する所から始めて行かう。

人智の開けない極めて野蠻な時代には、勿論火の使用法を知らなかつたのであるが、此の低度の文化から更らに進んで極く幼稚ではあるが、ともかくも金屬の使用法を知る樣になり、その最初に使用したのは鐵であるといふ事であるが、然しこれを利器の材料として使用する樣になつたのは、それよりも後の事であつて、先づ青銅を使用し次いで鐵器を用ふる樣になつたものであるといふ事を、科學的の根據に依つて創唱したのはデンマークの Thomsen 氏であつて、それは西紀一八三六年であつた。即ち文化發展の經路はその利器に用ふる主要な材料から區別すると Stone Age, Bronze Age, Iron Age, の三時期となるといふのであつて、此の文化の三階段說はその後の考古學的研究に依つて、益々その科學的根據を確めるに至つたのであつて、現今では人類原始の文化を論ずるものは、總べて此の三時期を以つて基準としてゐるのである。處がその後即ち西紀一八六五年に英國の Sir

John Lubbock が石器時代を前後の二期に區別する必要あることを說いてこれを舊石器時代 (Palaeolithic Age) 新石器時代 (Neolithic Age) と名付けたのであつた。舊石器時代といふのは、所謂氷河時代 (Glacial Age) であつて、西紀前二萬年乃至四萬年といはれる尨大な過去で、その遺跡は今の所では佛蘭西の南部 Garonne 流域地方、西班牙の Pyreness 山脈地方に發見されてゐるのみで、特に後者の方の Altamila 洞窟の遺跡は、世人に廣く知られた名高い遺跡である。その他にはアメリカ大陸にも此の舊石器時代の遺物が發見されたと報ずる學者もあるが、これは甚だしい疑問とされてゐるのであつて、舊石器時代遺跡の確實なものは、前記佛蘭西と西班牙の二ケ所のみである。現今世界の最古の文明發祥地として知られてゐる所の埃及、ベビロン、中央アメリカ、印度、支那の五ケ所は何れも新石器時代より始まつてゐるのであつて、それ以前の文化の遺跡は發見されてゐない。佛蘭西や西班牙の舊石器時代の遺跡は、近年漸く發見されたのであつて、永らく地下に埋れて人間の歷史から葬むられて居つたので、今日の世界文化には何等の基礎をなしてをつたものではないのである。殊に此の舊石器時代と新石器時代との年代上の距りは、實に大きなものであつて、その間には地表には一大變動があつたのではないかと迄想像され、當時の Cro-Magnon 人種なるものも恐らくは死滅したのではないかと言はれてゐるのであるから、現今世界の文化は先づ新石器時代から始まつてゐるものとしなければならない。故に支那に於いても矢張り同樣である新石器時代の遺物遺跡は可成り多く發見されてゐるけれども、舊石器時代のそれと思はれるものは未だ一つも發見されてゐない。然し初めにも述べた樣に支那に於ける此種の研究は從來殆んど等閑に附せられて居つたのであつた。最近に於いて漸く提唱される樣になつた支那考古學が將來如何なる發見發表をなすかは勿論豫測出來ない事であつて、支那の土地に氷河時代の文化がなかつたといふ事は、之れを斷言する事は出來ないのである。

然らば此の新石器時代の文化は、支那の土地に於いて發生したのであるが、又その文化を有して居つた漢民族は本來此の支那の土地に居住して居つたのであるか、それとも他の地方から移住して來たのであるかといふ問題に逢着する。今これを詳細にいふと漢民族は本來此の支那の土地に居住して居つたのであるか、或は他の地方から移住して來たのであるかといふ問題と、更らに支那文化の起原は此の支那の土地にあるか、或は他民族から移入したものであるかといふ問題との二つになる。換言すると民族起原論を文化起原論との二つであるが、遺憾なことには此の二つに對して、未だ的確な科學的の說明が與へられてはゐない。支那民族自身の間には、他の地方から移住して來たといふ樣な何等の傳說を有してはゐないけれども、それは移住して來たものではないといふ理由にはならないのであつて、これ等の問題に就いても矢張り支那考古學の將來に待たねばならないのである。だから結局はさきに述べて於いた樣に、支那の文化史は黃河の沿岸地方に住して居つた新石器時代の文化を有する民族から始められなければならないのである。然し乍ら西洋の學者には比較的早くから此種の問題に對して研究をしてゐるものが多い。そしてその大部分が所謂支那文化西方起原論を唱へてゐる。而かもその多くが民族の起原と文化の起原とを混同してゐる感がある、今西洋學者の說の一通りを紹介することにする。

十六世紀の末から十七世紀の始めにかけて、耶蘇教の布教の目的で、支那に渡航した所の Jesuit 教の宣教師が、ともかくも西洋人として支那研究に着手した最初のものであらうが、彼等の手に依つてなされた紀行文や報告文等が、その本國に於いて支那に對する興味を換起したのであるが、これと共に東西の交通が開けて種々な方面に於いて支那の研究の必要が認められ、從つて學者のこれに注目するものが次第に增加して來たのである。恰度西紀一六二五年に彼の大秦景教流行中國碑が陝西省西安府の碑林に於いて發見せられ、これが歐洲の學界に紹介されたので一層その興味を換起

したものである。處が當時の學者は別に科學的の研究を遂げた上の結論ではなく、單に深遠な支那文化に對する臆說を立てて或は支那は世界最古の文化を有つてゐるのであつて、世界各國の文化の淵源をなしてゐるものであるといふ樣な說をなしたものであつたけれども、これは極端な說であつて先づ大部分の學者は他民族の文化を移入したものであると說き出したのである。Joseph de Guignes, (1) 氏は支那の道德、宗敎、文字等は總べて埃及に胚胎してゐるのであつて、支那人は埃及人の殖民したものであると說いてゐるが、これに對してはDoshauterayes氏が反對意見を發表した。併し多くは前述した樣に、西方起原說を主唱してゐるPauthier氏やLenormant (2) 氏等は、支那の文字とバビロンの楔形文字との比較研究から出發して支那とバビロンとの文化は共通の起原を有してゐるものであると說いてゐるし、John Chalmers (3) 氏は言語の比較研究を行つて支那文明と西方文明との類似する點を述べて、支那の民族はヒンヅークッシュ山脈以南から移住して來

たものであらうといふ樣な事を述べてゐるけれども、何れも科學的根據は甚だ貧弱である。

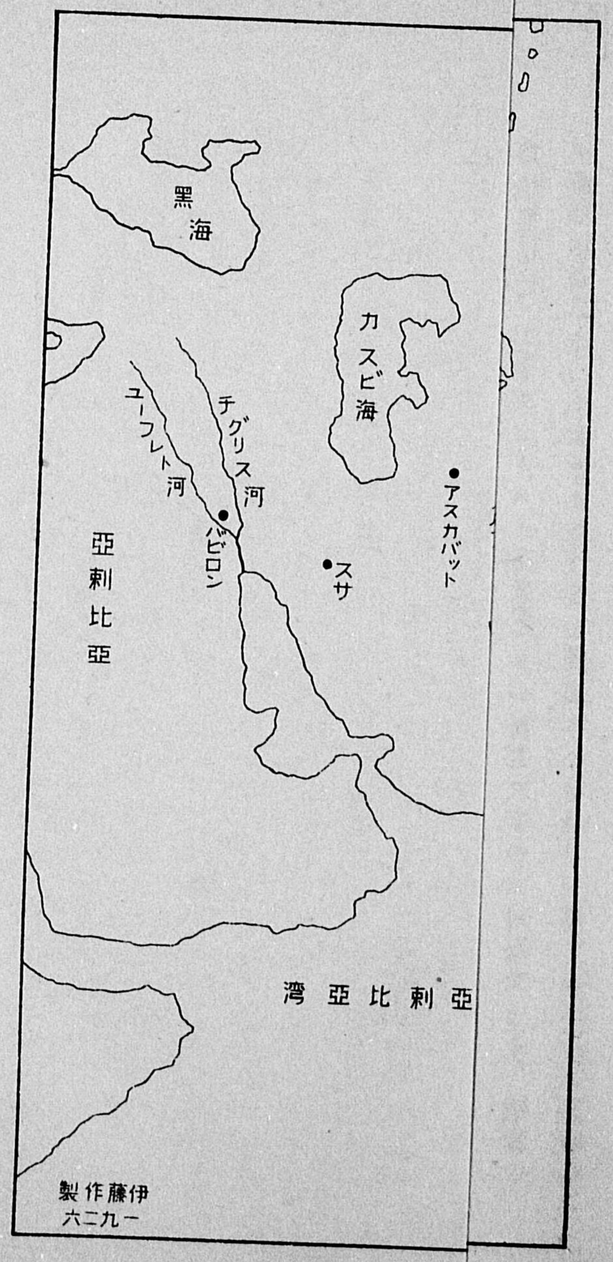
(1) de Guignes ; Mèmoire dans lequel on prouve que les Chinois seut une Colonie égyptienne. (埃及支那殖民論)

(2) F. Lenormant ; A Manual of the Ancient History of the East. (東洋古代小史)

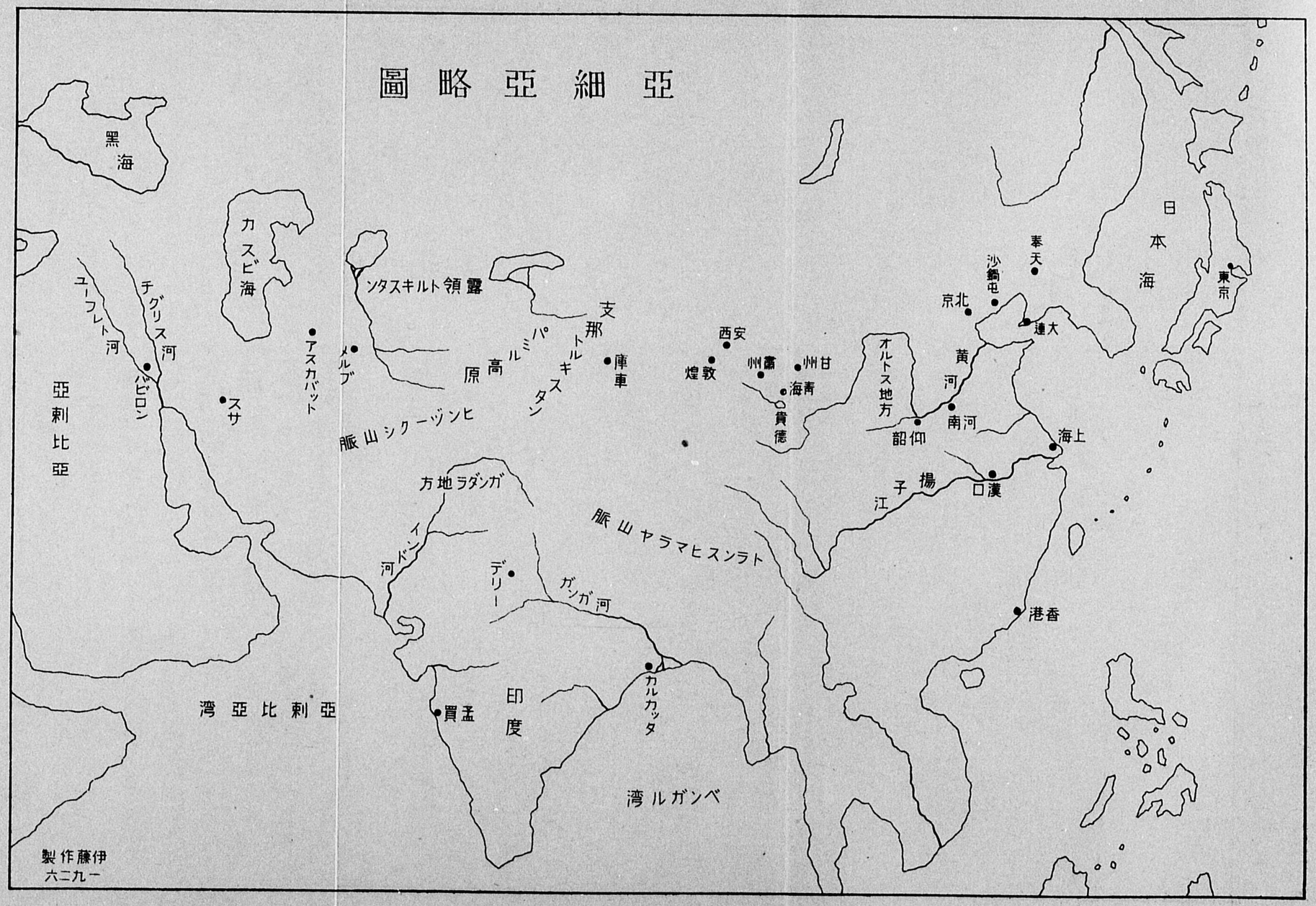
(3) Chalmers ; The Origin of the Chinese. (支那民族起原)

これ等に比べると Terrien de Lacouperie 氏の西方起原論は可成豐富な材料と廣い版圖の上に立脚したものである。その研究の要旨は支那文明とカルディア (Chaldea) 文明との比較研究を各方面卽ち天文曆法から文字言語といふ樣なものに依つて、その根源を同一であると論じたものである。例へば一年を十二箇月となし、閏月があり、十二時を以つて時間を數へ、一週を七日としてゐる事も支那、カルディア（チグリスユフレート河流域バビロンの文明。西紀前四十世紀頃）共に同樣であるし、天體の各名稱意義、十

干十二支の名稱等を始め此種のものの類似又は一致を多數に擧げてゐるし、又文字等も支那の文字はアッシリアのものから出たのだといつてゐる。支那の文字は蒼頡が鳥跡を見て作つたものであるといふが、この蒼頡の古音はDunkitであつてこれはカルデイアのウル(Ur)の王Dungiのことであつて、鳥跡といふのは瓦に刻んであるアッシリア文字であるといふ樣な事を述べてゐる。其他單に一場の說話として聞く時は、仲々興味ある事柄を述べてゐるのであるが、科學的の組織ある論述ではなく、全く信を置くに足らぬ文獻である。又James Legge (2) 氏は支那民族ももとは黑海、裏海の間に住して居つた民族の移動して來たものであると論じ、F. V. Richthofen 氏は支那民族は堯の時に支那の地に移住して來たものであつて、初めはパミール高原の地方に於いて、西方の民族と相接して居住して居つたものが、次第に東漸し敦煌、安西、肅州、甘州等の邊に移り、更らに渭水に沿ふて南下して漸く農耕の生活に入つたものだといつてゐるが、人類の發生地がパミー



原の地方にがいて東漸し敦煌、安西、肅州、甘州等の邊に移り、更らに渭水に沿ふて南下して漸く農耕の生活に入つたものだといつてゐるが、人類の發生地がパミー



ル高原の様な寒い土地であつたとは到底考へられない事である。又英國の A. J. Ball (3) は支那とスメル(Sumer)との言語文字の比較研究から、兩者の關係を說いてゐる。其他可成り多くの學者に依つて支那文明と西方文明との同源が論じられてゐるけれども、いづれも單に一つの說たるに過ぎないものであつて、此種の問題の解決は尙遠き未來に俟たねばならない。

(1) Lacouperie ; Western Origin of the Ealry Chinese Civilization.
(古代支那文明西方起原論)

(2) Legge ; The Chinese Classics. (支那古代文學)

(3) Ball ; Chinese and Sumerian. (支那人とスメル人)

然し乍ら近年に至つて中央亞細亞地方の發掘探檢が行はれる樣になつて、その結果は或は此の支那民族起原論又は支那文化起原論に何等かの科學的解決を與へるべき資料を提供するものは、此の中亞方面の將來の考古學的研究ではないだらうかといふ樣な感を懷かせるものがないでもない。卽ち

西紀一九〇三年から四年にかけてRaphael Pumpelly氏一行が、前後二回に亙つて露領土耳其斯坦地方の探險を行つてゐるが、その第二回目の事業に加はつて居つたH. Schmidt氏のMerv, Askabad附近の地の發掘、西紀一九一〇年頃迄に行はれたGroudji Groujimairo ; Hedin ; Stein ; Pelliotの諸氏や、我邦の大谷光瑞氏等に依つて行はれた支那土耳其斯坦地方の探檢發掘が齎らした業績等は、此の地方の文化史研究に可成り重要な資料を提供するのであつて、支那文化と西方文化との間に何等の關係があるといふ樣な前述の諸說を立證するに有力な根據を與へ樣とし、又民族移動の事情に對しても適當な說明を與へ得る樣な事實が發見せられたのである。例へばパンペリー氏の探檢に依つてメルヴのオアシスのGhiaur Kalaに於いて發掘された多數の遺址に依つて、紀元前數世紀も前から人類の居住が絶えて終つたのだといふ事實が明かにされAnauに於いて發掘された有史以前の遺跡、即ちアナウのデルタ、オアシスの中央から一哩餘の所に高さ四十呎乃至五十呎位の二つの小圓丘があり、それが都市の遺跡の一つであつたので、その中のものは嘗てKomorof將軍がこれを發掘して動物の遺骨や土器の破片を發掘した事があるが、パンペリー氏の探檢隊はその南北兩方の圓丘を發掘して此の都市の遺跡は日乾し煉瓦(Sundried Brick)を使用した住居を有つてゐる民族が、長年月の間此處に居住して居つたものであつて、その北方圓丘には、Stone Ageの遺物を含む層があり更らにAneolithic Ageに進む文化の遺物を包含して居り、南方の圓丘には更らにBronze Ageの文化の遺物を含む層のある事が知られ、これ等はシュミツー博士の研究の結果に依つて、各時代に居住して居つた人類の文化が順次に進歩發達して行つたことが明かにされたのである。且つ又此の北方圓丘で發見された土器の文樣が、Mussian, Susa等で發見された土器の文樣と類似してゐるといふ事實はトランスカスピア地方とエラム地方との間に何等かの關係あることを暗示し、又南方圓丘で發見せられた銅器時代の土偶は、スメル人との間に何かの交渉があつたの

ではないかと言はれてゐる。

處が此處に一つの興味ある事實が新たに學界に紹介せられ、これを動機に支那石器時代文化の本質が次第に究明せらるゝの氣運に向ひつゝあることは、最も注目に値ひするものである。それは北京の農商部地質調査所技師であるところの瑞西人の地質學者であり又古生物學者である所のAndersson氏が、西紀一九二一年の夏に奉天省錦西縣沙鍋屯に於いて新石器時代の遺蹟である一洞穴を發見して、これを學術的に發掘調査し、同年秋に河南省澠地附近の仰韶村に於いて同時代の遺蹟を發掘し、更らに一九二三年、一九二四年に亙つて甘肅省貴德盆地並に青海沿岸地方に於いても矢張り同樣の收穫を得たのであつて、これ等の發掘品が今新らしい興味を學界に提供しつゝあるものである。即ちこれ等の遺物は大體に於いて二つの系統に分けられるものであつて、その第一は石器類及び土器の一部であつて、これは今日迄に學界に知られてゐる所の支那上代の土器銅器類等の系統のも

のであるが、第二のものは現今迄の學界には何等の類似さへ知られて居なかつた所の彩色土器であつて、恐らくは第一のものとは全然その系統を別にしてゐるものの樣であることである。その彩色土器といふのは、赤地に黑紅や、白などで紋樣を描き出した精製されたもので、形狀は別に珍奇なものとてはないが、古代希臘或はミケーネ時代のものに似たものである。これと全く同一の種類のものを濱田青陵博士が北京の商賈から買ひ求めて、その內四個を京都大學に他の二個は原田淑人氏に依つて東京大學へ送られたのである。恐らくはアンデルソン氏發掘の後土着人が盜掘して、これを商賈に賣り渡したものではないかといはれてゐる。さて此等の彩陶は甘肅から出たものが、最も著しい特質を備へ仰韶村のものがこれに次ぎ、沙鍋屯のものは極く簡單な文樣のものが少し出たのみである。所がこれ等の土器の研究が學界の興味の中心となつてゐるものであつて、先づこれを發見發掘したアンデルソン氏の論文には

An Early Chinese Culture, 1923.

The Cave deposit at Sha-Kou-Tun, in Feug-tien, 1923.

Preliniary Report on Archaeological Resarch in Kanshu, 1925.

又瑞典のアルネ(Arne)氏のものには

Painted Stone Age Pottery from the Province of Honan, (1923)

尙此の他に大英博物館の支那陶器の權威者ホブリン氏、オーストリーの考古學者フランツ氏、ベルリンのシュミツト氏等の研究發表があるし、邦人の研究では京都大學の濱田教授の論文が「民族」の大正十五年一月號三月號の誌上に發表され、又東洋文庫主事石田幹之助氏の論文が「支那」の同十四年十月號、「民族」の同十五年三月號に發表されてゐる。發見者である所のアンデルソン氏は此等彩色土器の實年代を約紀元前三千五百年乃至千七百年位の間であるとして、これは支那民族が河南甘肅方面に文化を開く以前に中央アジア、トルキスタン地方に居住してをつたものであつて、その

頃に彼の彩色土器の原型を使用して居つた所の西部アジア方面の文化民族の影響を受けたものであつて、これが後彼れ等支那民族が東方に遷移してからのものにも殘つてゐるものであつて、支那文化は始め中亞方面に起つたものでそれが支那民族の祖先と共に東方に遷移して來たものであるといふ樣な事を言つてゐる。此の彩色土器に關する詳細な研究から引いて支那民族やその文化の起原の問題に迄は今の所及んでゐないけれども、多くの學者の所說はともかくもこれ等は現今の支那民族の祖先が使用して居つたものであるといふ點と、その彩色土器の特徵は西方文化の分子であるといふ點とは大體に一致してゐる。その西方文化の分子の由つて來る所をアンデルソン氏は上述の樣に說いてゐるのであるが、これに反して瑞典のカルルグレン氏は彼の河南地方の所謂黃河沿岸地方の文化は可成り古くから發達して居つたもので、これが民族のエクスパンションに依つてその文化圈が西は甘肅の方に及んだので、こゝに於いて西方の文化圈と接觸して、こ

れが再び河南の方へも入つて來た爲めに、西方文化の分子が支那の土地に發見されるのであつて、決してトルキスタン邊から遷移して支那文化の出來上つたのではない。その證據には支那固有の文化に屬する遺物は、河南地方に多くて甘肅方面には少ないといつてゐる。

此れ等に對する詳細は前掲した諸論文に就いて知られることを希望するが、只一事の注目に値する事は以上の樣な探檢發掘が今後續々計畫實行されて此種の考古學的研究が豐富な材料に依つて行はるゝ事になると、例へ彼のラクペリー氏一派の樣な支那文化西方起原說は一笑に附せられる種類のものであるとするも、併し更らに的確な科學的根據に立つて、支那民族の起原及びその文化の起原に對する適切な學說が樹立されるの氣運に到達するであらう一事である。けれども今日の所では先づ黃河流域地方卽ち河南方面に定住して居つた所の、新石器時代の一文化民族として漢民族の歷史を以つて最古のものとしなければならないのである。大正十一年一月の

大阪朝日新聞の紙上に於いて、濱田靑陵博士が「東亞文明の始源」と題する一論文を發表せられたことがあるが、その中に於いて博士は「今日迄の我我の知識では、支那に於いては未だ舊石器時代の確實な遺物を知ることが出來ないから、漢民族が舊石器の文化狀態を支那の土地で過したか、或は他の土地で濟まして來たかに就いては、何等科學的根據を有した解答を與へることが出來ない。舊石器の發見が今日迄、我々の耳に達せぬからと云つて、あの宏大な學術的未開地に於ける將來の發見は決して否定出來ないのみならず、理論上から云つて漢民族が舊石器時代を支那の土地で送つたことを必ずしも拒絕することは出來ない」と述べてをられるが、博士の此の豫言的の言葉は終ひに實現されたといつても好いのであつて、最近に於て佛國の宣敎師リサン及びド、シャルダンの二人に依つて蒙古漠南のオルトス地方に於いて、舊石器時代の遺跡を發見したといふ事が報ぜられた。その詳細に亙つた報告が出てゐない爲めに、果してそれが所謂支那民族の祖

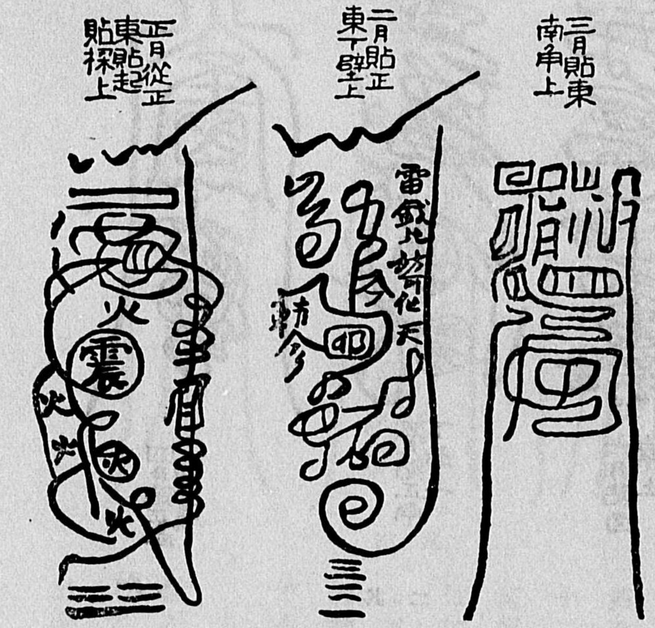
先の遺したものであるか、否かを想像することさへも不可能であるが、ともかくも濱田博士の言はれる樣に、あの廣大な支那に於いて今後果して如何なる新事實が發見されるか豫測し難い事であつて、漸次驚奇な發見が行はれ有史以前の文化の研究に豐富な資料を提供するだらうことは想像に餘りあるのであつて、所謂支那考古學の使命と前途は多くの人々に依つて刮目されてゐるのである。一體原始文化の形式や內容は何處の國の何の民族のそれも著しい差違特色のあるものではなく、甚だよく類似したものであるから、單にそれ丈けの類似を以つて、その文化の同根を論じその民族の同源を斷ずることは大なる危險があるし、且つ又比較言語學的研究といふ事も勿論極めて有力な且つ重要な研究であり、文化の同根、民族の同源を立證する上に是非依らねばならない研究ではあるが、これを單にその研究のみに依つて結論をしようとすることは甚だこれを疑はざるを得ないものである。印度アーリア人がその以前は希臘拉典の民族と同源であつて、希臘語拉典語等と印度の梵語とは同根の言語であるといふ事が立證され、兩民族の同源論に有力な結論を導いたといふ例もあるが、又嘗て邦人某氏が一時盛んに主唱した樣な希臘語と我國語との類似から、兩民族の同源を斷定し樣とした滑稽もある。前述したテリアン、ド、ラクペリー氏の言語學的研究は邦人某氏のものとはその越きを異にするとしても、方法論的には兩者似たものであつて科學的根據からは甚だ緣遠いものである。更らに又民族の起原と文化の起原とは、當初にも言及した樣に全然それを別にして考へなければならないことであつて、西洋の學者の多くはこれを混同してゐるかの觀がある。東西兩民族が或る期間に接續地域に居住して居つたといふ事實が假りに立證されたとしても、それに依つて兩民族の文化の起原を迄も同一であるとし、又は甲が乙に影響されたとする事は甚だしい早計であるし、又文化が總べて同一系統の起原をなすといふ事實が假りに立證されたとしても、それを以つて直ちに兩民族を同一起原から發足したものとす

ることは、之れ亦甚だしい早計であるといはねばならない。例へ如何に接續地域に居住して居たとしても、その民族の文化の程度や民族的特質の差に依つて必ずしも他民族の文化の影響を蒙るもののみとは言はれないし、又その反對にその民族文化の狀態や民族的特質に依つては極めて容易に他民族の文化を受け入れ得るものであつて、これを以つてその民族の起原を迄も同一であるとすることは無謀も甚だしい。極端な例ではあるが、我飛鳥奈良時代の文化が支那隋唐の文化と全然その形式内容を一にするからといつて、當時の日本人の全體は支那人の歸化したものだとすると論理上大した差はないことになる。これを要するに今の所では支那文化西方起原說には多く信を措くに足らないものである。

附言。彩色土器は其後も各地から發見され又これに對する研究論文も多く出て居る。今や支那古代文化の研究は世界考古學界の興味の一中心をなしたかの感がある。此稿では彩陶の初めて發見された當時の學界の反響を一言したにすぎない。

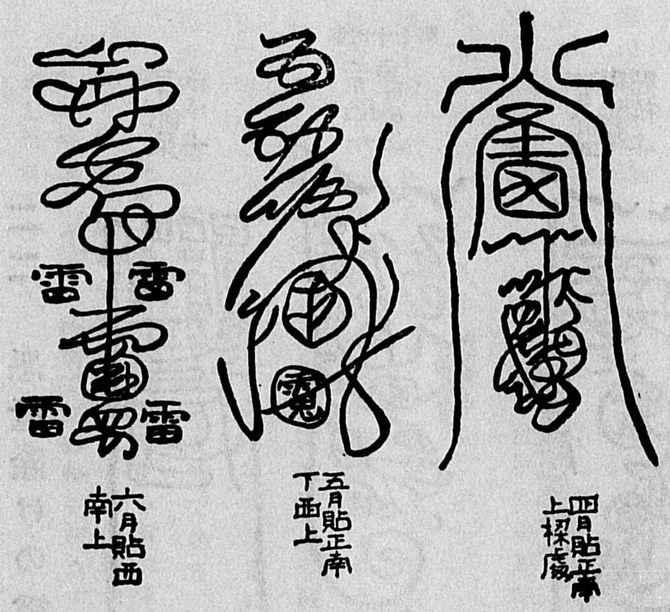
二二　惡魔除けの靈符

第四十七圖



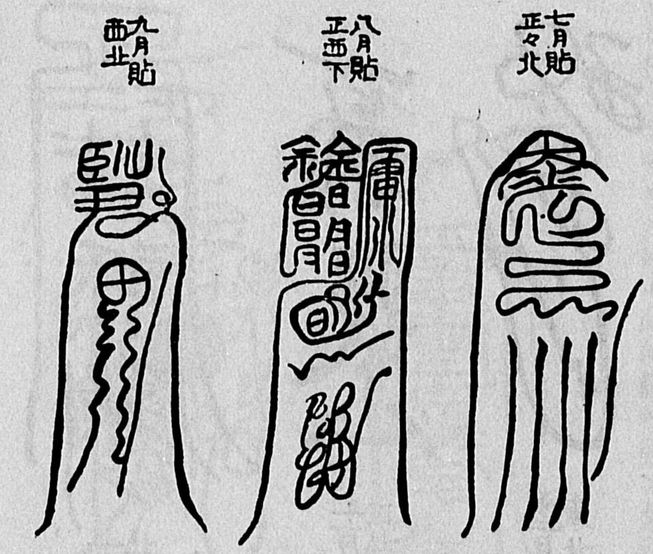
其一

迷信の多い支那には種々の惡魔除けが行はれてゐるがその中で魯班經に記載されてゐるものゝ數種を紹介することにする。魯班經は古くから支那に傳はる我邦の番匠往來の一種の樣な書物で民間に一般に廣く行はれてゐるもので住宅の魔除けや



其二

災害拂ひに關した事が卷末に出てゐる。その中の一つに地支靈符といふお札の樣なものがある。第四十七圖の其一から其四迄に掲げた十二種がそれである。此の十二枚が一月から十二月まで一箇年になつてゐるのであつて、正東方には一月と二月、正南方には四月と五月、正西方には七月と八月、正北方には十月と十一月



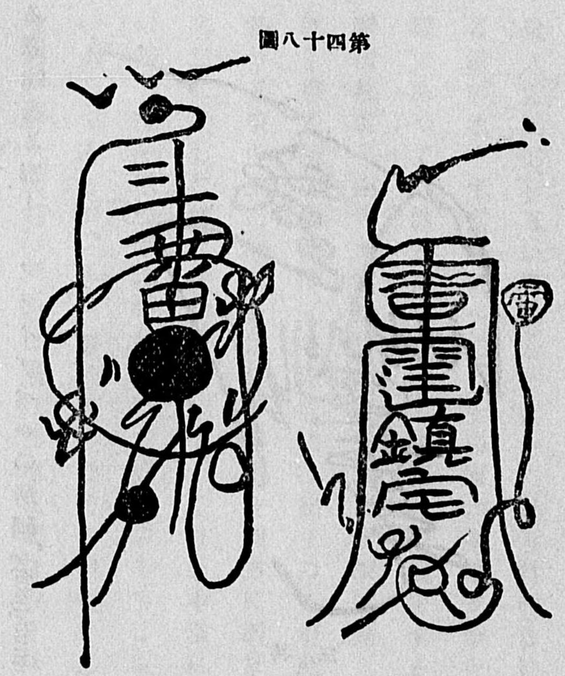
其三

との各二枚宛となり、東南方には三月、西南方には六月、西北方には九月、東北方には十二月の各一枚宛を、總べて家屋内の梁上或は壁上に貼り付けておくのである。かくするとその家内に在る所の惡鬼、邪神を禳ふことが出來るそうである。

こういふ效能書の通りの驗があるかどうかは私は未だしてみないので何とも確言は出來ないけれども、日本等に

其四

もよくあることで修驗者等がよく何だか譯の分らない護符を書きなぐつて、これを鬼門の隅に貼つておけだとか、竈の上に貼れとかいつて、これに又相當の信者がある。此處に掲げた五雷地支靈符と稱するものは古本魯班經に記載されてゐるものを轉寫したものであるが、何れ仙術を得たものだ



第四十八圖

とか何とか稱する連中が所謂神かゝりの狀態で書きなぐつたものかも知れない。十二種類を通じて、雷、火、震といつた樣な字が見え、殊に雷の字が好んで用ひられてゐる樣であるが、

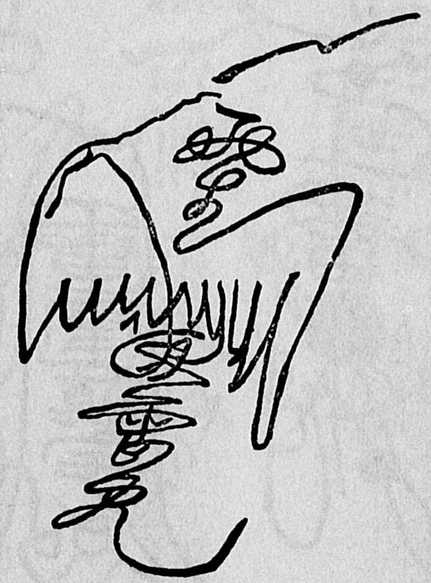
其一

然し神かゝりの狀態で書いたと思はれる樣な暗示的な處もないし又

其二

線に强い力が表はれてゐない。私は嘗て某氏の展覽會に於いて佛蘭西の巫女がその所謂神かゝりとでも言ふべき狀態にあつて描いた線を數種

類見たことがあるが、非常に暗示的であり且つ線そのものには何となく或る意味ある形――クライブベルの所謂 Significant form ――があることを見て驚いたことがあるが、此の靈符は幾度かの轉寫を經て、その原形は大いに失はれてはゐるだらうが慨してそういふ點が窺はれない。平凡な風水子の氣紛れの揮毫かも知れない。



其三

第四十八圖に示した三種類も矢張り古本魯班經に載せられてゐる靈符であるが此の三つの中で其二と其三とは他のものと變つてその線の配置や全體の形狀に仲々暗示的な

何かがあつて面白い。其一は鎭宅の靈符であつて硃砂(赤色の顔料)を用ひて描き、梁の上に貼るのであが、その貼り付ける際には左手を用ひて貼り他人に話ししない樣にして密かに貼り付けなければ效力がない。貼り終ると清い水や米食を供へて、その家の無事安泰を願ふのである。其二は五雷符であつてその五雷を祭つて諸物の魔禳をする。即ち東方蠻雷將軍、西方蠻雷使者、南方火雷靈官、北方水雷蠻浪兩師、中央直雷姚將軍であるがこれを祭る所の呪文等も魯班經には出てゐるが此處には略する。此等五雷を祭つて壇の上に楊柳を以つて淨水を四方に洒ぎ、黃色の紙に硃砂を以つて其二に示した樣な靈符を書いて、これを中堂に貼り付け三牲を捧げ、大工の斧一挺を以つて梯子を上つて梁木のあちこち各所を三度宛打ちまはすといふのであるが、その祭の順序はともかくとして靈符に描かれる其二の樣な形が仲々面白い。前に揭げた地支靈符のそれよりも遙かに意味ありげにみえる。其三も同樣である。

二三　支那建築史の年代區分

凡そある事項の史的叙述に於いては、その記述法の必要から適當な區劃を定めて、これを纏めることの極めて重要な事は、今更こゝに論ずる迄もない事であるし、且つ又その叙述し樣とする事項の性質によつて、その區劃は必ずしも一致したものでない事も、又こゝに論ずるの要はないであらう。だから建築史の叙述に當つても、當然その爲めの特殊な年代區分が必要である。

一體建築史と言ふものは、その民族の有する建築發達の史的叙述であるから、先づ第一の順序としては、その民族の有する古建築物、及び建築史的事實物件等一切の關係事項を編年的（クロノロジカル）に配列しなければならない。そうして單にそれの配列のみでなく、第二にこれ等から全體の系統を支配する所の一般的法則を發見しなければならない。私が滿蒙の大正十五年一月號で『支那に於ける傳說的建築史と事實的建築史』との二つの體系の對照を述べた際に、歷史的叙述の一般的の缺陷としてその全體を統一する法則の發見といふことを、彼の英國のバクル氏（Henry Thomas Backle, 1821—1862）が力說して居る事を述べてその所論の一節を引用した事があるが、建築史に於いてその缺陷は特に著しいのを感ずる。從來西洋建築史に關する歐米の著書の中で、その最も優秀と思はれるもののみを學げても三四種に止まらないであらうが、併しそれ等でさへ矢張りバクル氏の理想からは遙かに遠いものである。西洋建築史等はその發達した土地が、比較的に好都合な位置にあるので、その科學的研究には甚だ利便が多いのであるから、その配列すべき材料の蒐集や研究も從つて容易であるが、それでさへ今の所ではバクル氏の理想に近い叙述は一つも試みられてはゐないのである。まして最

近漸く科學的にその研究の歩の進められ始めた所の支那建築史に、それを望むことは甚だ無理であるのみでなく、實はその單なる羅列を行ふ資料の蒐集にさへ多大の困難が伴ふのであるから、現今ではその材料を如何にして一つでも多く蒐集するかが可成り大なる仕事であらねばならない。而して材料が蒐集されると、次ぎにその編年的配列を行ふ爲めに、史的順序即ちその年代が考定されなければならないのであるが、建築史的の一切の事項の年代は比較的に正確に知り得られるけれども、遺物の年代はその實際正確なるものを知ることは甚だ困難であることが屢々である。故に此の遺物の年代考定といふことも一通りの仕事ではない。可成り大きな而かも困難の多い仕事である。此處に單に年代といふてゐる所のものは、これを私は更らに嚴格に區別して實年代と型式學的(チポロギカル)年代との二つとする。實年代と稱するのは、そのものゝ絶對年代であつて記錄等に依つて正確にその實際の年齢を知り得る場合であるが、型式學的年代といふのは型式學的の研究から假りに與へた學問上の年齢であつて、その實年代を肯定することの不可能な場合に研究上の一方便として用ひるのであるが、吾々の建築史研究の上にはその實年代であると、型式學上の假定年代であるとは多く支障を見るものでない事は後に說く通りである。その年代のいづれ(ば)であるにもせよ、以上の樣な順序から先づ材料が蒐められ、次ぎにその年代が決定するとなると、こゝに始めて史的順序が定まるのであるから、配列上の位置が明瞭となつて編年的配列が可能となる。從つて第二段の仕事である所の、その相互間の因果律的關係又は型式的の一般法則が獲得されるといふことになる。此の一般法則が獲得されることに依つて、遺物の型式學的年代が肯定されるのであるから、その研究的方法は一種の循環的方法となつて、その出發點と終局點とを截然區別し難い事になる。これを約言すると完全な編年的配列が出來上つて後、始めて型式學的の一般法則が獲得されるが、その型式學的の一般法則があつて、始めて完全な編年的配列が可能である

といふことになる。だから建築史研究の方法は、無始無終の甚だ錯雜した循環的研究法である。處が此の方法論としての理想論が、實際に應用される場合に、果してどんな形式を取つてゐるかといふに、普通一般には先づともかくも總べての意味に於いての準備として、其の研究對象である所の材料の蒐集を行はねばならない。而かも此の材料蒐集といふ樣な單なる仕事でさへ、支那のそれに於いては甚だ困難なことで、篤學な學者が一生をこれに捧げても、尙且つこれを盡すことは不可能であることは、自明の事であるが、ともかくこうして蒐集された所のものの中で其の實年代の明確に知られ得るものゝみを以つて一つの配列を行ふ、それは併し或る時期に於いては極めて豐富な材料に依つて精細な配列が出來るであらうし、又或時期に於いては之れを全く缺如すると言ふ樣な結果となるであらうが、それは止むを得ない。一般には近世に近づく程、その配列は精細となり、古代に朔るに從つて、それは粗略となつて行く。そうして漢代以前となれば遺物の配列は殆んど不可能となつて、僅かに文獻的の材料のみとなるが、これは止むを得ないであらう。こうして精疎甚だ不均一ながら一通りの史的配列が出來れば、次ぎに諸種の方面から比較的年代考定の行ひ易いもの及び略ぼそれに妥當と信ぜらるゝ年代のものを以つてこれを補綴する。上の樣な方法に依つて出來上つた所の一種の配列法が、今日の一般の建築史なるものであるが、私はこれを建築史的配列法と稱する。此の配列法は學問上一つの配列法であること勿論であるけれども、併しこれを以つて直ちに實年代とすることは出來ないのであつて、從つてこれから歸納される型式學的一般法則なるものは、實年代考定の一の標準とはなるけれども、實年代を決定することは出來ない、それは終ひに型式學的年代以外に出ることは出來ないのである。建築史の研究に於いては、可及的その實年代を知るの必要なことは說明を要しないが、併し必ずしもこれでなければ建築史研究の目的は達せられないのではない。足りない點は型式學的年代を以つ

てして少しの妨げもない。かくの如くして出來上る史的叙述は、それが少くとも建築史である以上、何等の支障はない。何故ならば私の目的とする所のものは、古建築物の實年代考定の唯一の標準を獲得し樣とするのではなくして、その型式學的の一般法則を獲得し樣とするものであるからである。かくして獲得した所のものが如何なる方面に役立つか、又は役立てられるかそれは知らないけれども、建築史研究の目的はその功利的なものゝ上に存するのではない。又それが如何に一般文化史の上に必要な法則であるかは説明する迄もなく餘りに明白な事であると私は思ふ。

以上述べる所に依つて建築史の研究は、その型式學的研究と密接に平行してゐるといふよりも、寧ろ全然同一のものであることが明かとなつたであらうが、かくして建築史といふものは、その内容からみて一つの建築進化論であるといふことが出來る。今だから之れを要約すると建築史なるものはその叙述の形式に於いては、編年的に叙述された所の一般史的體系と

少しの差がないけれども、その研究の方法は型式學的であるし、その内容は建築進化論であるといふことになる。だから今方法論的にみて支那建築史なるものは、その型式學上如何なる區分を行ふことが最も妥當であるかを考へてみる。支那に於ける建築史の年代は何時の頃から始まるかが第一の問題であり、第二には爾後現今迄の間に於いて、その建築史上型式學的に見て、大なる變化を齎らす樣な事件があつたかどうかを考へ、それは何時頃にあつたかを明かにして、これ等を以つて一通りの時代區分の基準としなければならないのである。そこで第一の問題を先づ考へてみる。支那の歴史は悠遠な過去に出發してゐる。今日知られる世界最古の文明發祥地の一つである丈けに、その初めは四千年前といはれ五千年前といはれ或は又それ以上であるともいはれてゐる。シュレーゲル氏(G. Schlegel)等は、西紀前一萬九千年頃、既に天文學が發達して居つたといふ樣な説を出してゐる。シュレーゲル氏の一萬九千年といふ數字は何を基準として算定したの

か知らないが、ともかくも今日では黄帝の年代は西紀二千六百年以前といはれてゐる。だから支那建築史の年代は假りにこれから始まるものとして、第二の問題として爾後今日迄に支那藝術史上大なる影響變化のあつたと思はれるものは、西域諸國との交通の開けた事及びこれに續いて新宗教として佛教が傳へられた事であらう。我日本建築史に於いては、實質上眞の建築史は佛教渡來以後に始まるといはれて居るが、支那に於いてはそれ程の大なる變化はないけれども、併し一つの劃時代的の變化であつたことは否み得ない事實である。そこで私は先づ先輩學者の時代區分の例を述べて、然る後に私の見る所を述べて私の立場に基く所の區分を述べてみたい。

ミュンステルベルヒ氏(Oskar Münsterberg)は、太古から清末迄を二分して前期後期として、その區劃を後漢末と三國時代の初めに置き、更らにこれを細かく區分して次の様にしてゐる。

前期

一、石器時代　(紀元前二千前以前)
二、銅器時代　(紀元前一千年以前)
三、銅鐵時代　(紀元前二百年以前)
四、漢藝術發達時代　秦漢時代　(西紀前二〇〇—西紀二二一)

後期

一、六朝時代　(西紀二二一—六一八)
二、唐時代　(西紀六一八—九六〇)
三、宋時代　(西紀九六〇—一二八〇)
四、元時代　(西紀一二八〇—一三六八)
五、明時代　(西紀一三六八—一六四四)
六、清時代　(西紀一六四四—　)

伊東忠太博士は大體此のミュ氏の時代區分法を承認して、その後期の方の細別の名稱に歴代王朝の名を用ひた事は、前期の方の名稱と一致しない

から、寧ろこれを

一、六朝時代――西域藝術攝取時代
二、唐時代――極盛時代
三、宋時代
四、元時代　衰頽時代
五、明時代
六、清時代　復興時代

といふ風にした方が適切ではないかといつて居られる。其他英國のブッシエル氏(Bushell)は、支那藝術史を次の様な三期に分けてゐる。

第一期　原始時代（太古―後漢末迄）
第二期　古典時代（三國時代―唐末五代の終り迄）
第三期　發達及衰頽時代（宋―元―明―清）

彼の有名な獨逸のヒルト氏(Friedrich Hirth)は、太古から唐末迄を三期に

支那建築史年表

附東洋諸國歷代年表

伊藤作製
一九二六·五·

西紀	歷代	ミュ氏	ブ氏	ヒ氏	伊東氏		健陀羅	中印度	朝鮮	日本	西紀
2700											2700
2600	黃帝	石器時代	第一期 原	支那固有	石器時代	推論					2600
2500	少皞 顓頊										2500
2400	帝嚳										2400
2300	堯										2300
2200	2205 舜										2200
2100											2100
2000	夏										2000
1900								吠陀時代			1900
1800	1818										1800
1700	殷	銅			銅						1700

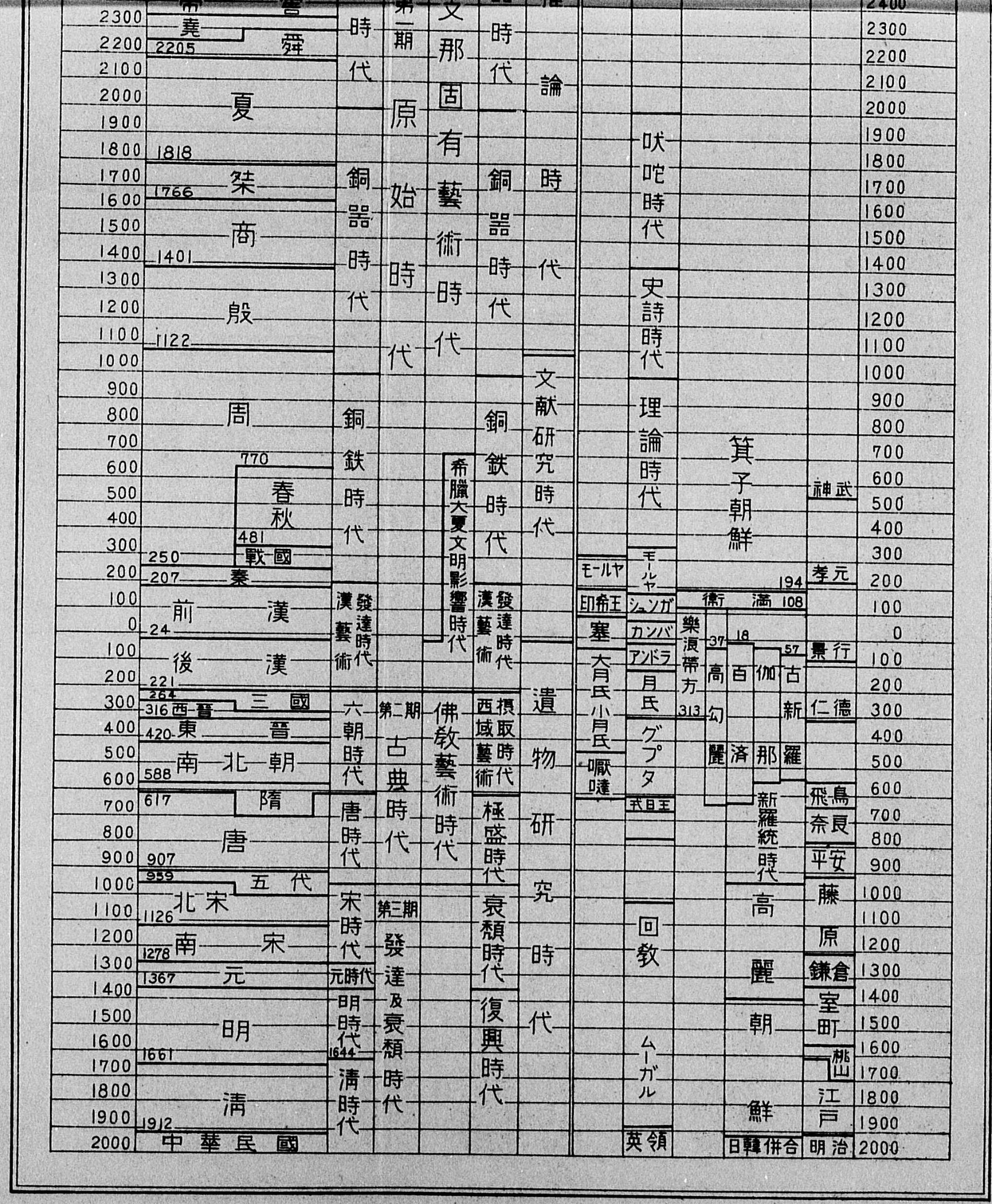
三、宋時代
四、元時代
五、明時代
六、清時代

衰頽時代
復興時代

といふ風にした方が適切ではないかといつて居られる。其他英國のプッシェル氏（Bushell）は、支那藝術史を次の様な三期に分けてゐる。

第一期　原始時代（太古―後漢末迄）
第二期　古典時代（三國時代―唐末五代の終り迄）
第三期　發達及衰頽時代（宋―元―明―清）

彼の有名な獨逸のヒルト氏（Friedrich Hirth）は、太古から唐末迄を三期に



第四十九圖（本文二九一頁參照）

分けて

第一期　支邦固有藝術時代（太古―西域交通即ち前漢迄）

第二期　希臘大夏(Greco Bactria)文明影響時代（後漢―佛教渡來迄）

第三期　佛教藝術時代（佛教渡來後―唐末迄）

としてゐるが、唐以後の時代區分がない。以上諸學者の年代區分はこれを圖表第四十九圖に示した通りであるが、これに就いて私の考へる所を次ぎに述べてみよう。

ミュンステルベルヒ氏の前後の二期の區分は、大體に於いてそれを認めるとしても、前期の四區分は私の建築史の時代區分としては、之れに賛成し難いのである。なる程石器時代、銅器時代、銅鐵時代といふ樣な區分は考古學上一般に使用せらるゝ所の法式であるし、又それがミュ氏の言ふ樣な實年代に相當することを認めるとしても、それは支那考古學の上には或は便宜であつても、建築史的叙述の上には何等の便宜をも得るものではな

い。又大體に於いて前漢後漢の時代に相當する年代を漢藝術發達時代といふのに對しても、私は大なる贊意を表はし難い。何故とならば此の時代に於いて、確かにその建築のみならず、一般藝術にも進歩發達の跡はあつたことは認めるが、併し他の時代に於いては、それを認めぬといふ譯には行かない。又漢民族固有の藝術の發達した時代といふのならば、私の見る所では前漢よりもつと以前にこれを認めなければならない。又その極盛の時代といふ意であるならば、これを極盛時代と明示して、それより以前にその發芽時代を認めることが科學的の區分法ではなからうか。敢へてトムゼン氏(Thomsen)以來の利器の主要材料を標準として區別した石器、銅器等の名稱を、建築史の年代區分の上に適用して、その次ぎに型式學的立場の區分名稱を使用するといふことは、少くとも建築史の叙述に當つて統一ある記載法とはいはれない。又後期に於いては細かに區分し、歷代王朝の名稱を使用したものであつて、一般の歷史上の區分と異らないものであるから批評の限りではないが、ミュ氏が是非はともかくとして、前期の方ではその王朝の名稱を使用しないで、後期に至つてこれを使用してゐるのは、この理由の如何に拘はらず、甚だ統一を缺いた區分法といはねばならない。尙最後に言及するが、私は他の理由からして、此の歷代王朝の名稱を以つて建築史年代の區分の上に使用することに贊成するものである。序いでながらミュ氏が明時代と清時代との區別を、西紀一六四四年即ち闖賊李自成が北京を奪取して明を亡ぼした年としてゐる。そうして所謂清時代は此年から始まるものとしてゐる。清の世祖が北京に入つたのは、西紀一六六一年であつて、政治史上の此の年代を採用しないで、事實上明の亡んだ一六四四年を採用した事は卓見ではあるが、それならば更らに進んで清の太祖が滿洲に起つて、始めて皇帝號を稱した年、明の萬曆四十四年、即ち西紀一六一六年をなに故に採用しなかつたのであるか。更に此の事は後に言及する。ともかくもミュ氏が、折角その年代を區分するに當つて、前後の二

期を各異つた立場に依つて、細かく區分したことは甚だ不體裁であつて、これを伊東博士は指摘してその後期をば、前出した樣にして居られる。それは一應甚だ合理的であると言はれるが、その前期をミュ氏のまゝ踏襲される事は、私は前述した樣な理由から贊成出來ないし、後期のそれに對しては博士自らも斷つておられるが、私はそれにも贊成し難いのである。殊に博士は明清時代を復興時代と呼ぶことは、他により善き名稱が考へ得られぬ故に、姑くこの名稱を用ふるといつて居られるが、他に善い名稱が考へられぬものを、何を好んで不適當な名稱を使用する必要があるであらう。又ミュ氏の謂ふ所の後期の各王朝の名稱の代りに、前出した樣な名稱を使用することの當否は別として、その名稱は性質上建築史年代の區分に甚だ應はしく、その內容を明示した稱呼であるが、後期の方を爾かく整頓しながら、前期の方をミュ氏のまゝに考古學的年代の區分稱呼を踏襲されることはどうかと思ふ。以上の樣な理由で、私は不幸にして伊東博士の區分法

にも從ふことが出來ないものである。次ぎにブッシエル氏の區分法はどうであろう。氏は通じて三時期に區分して太古から後漢末迄の第一期を原始時代と呼んでゐるが、此の長い間を單に原始時代といふ事で一括することは甚だ亂暴である。長い間といふ時間上の問題はどうでも好い、その中には前漢後漢等も含まれることになるが、堯舜時代と漢時代とを等しく原始時代といふ名の下に纏めることは當を失するも甚だしいといはねばならぬ。これに對してヒルト氏は、流石支那學の大先輩丈けに、その區分法は甚だ要領を得てゐる。ブッシエル氏が原始時代と言つた年代の大部分を、支那固有藝術時代としてその最後の約二百年間程を、希臘大夏文明影響時代としてゐるが、之れはヒルト氏の卓見であつてブッシエル氏よりも遙かに當を得てゐる。又その次ぎの佛教藝術時代といふことも正しい區分法であると私は思ふ。伊東博士もいはるゝ樣に唐以後の區分の發表されてゐないことは甚だ遺憾である。私は此のヒルト氏の區分法に從ふことが最も學術的

であると信ずるが、唐以後の名稱が示されて居らず、又これに何等か稱呼を與へるといふことは困難な仕事である。前にも述べた樣に建築史の叙述にも、又はその研究にも年代の區分といふことは極めて必要な事であつて、又その區分の根據は私はその型式學上の分類を以つて最も適當と思惟するものであるが支那の建築史に於いては實はその叙述を行ふ域にまで至らないともいはれるのであつて、今漸くその科學的研究が緒に就いたのであるから、型式學上の根據から適切な區分を行ふといふことは困難である。だから私は今の所では、その年代區分の根據をその型式學上に求めないで、別の根據に求めることを以つて寧ろ正當とするものである。

書て私は支那建築史の資料の上の相違を論じて、漢代を中心としてその以前を主として文獻に依る資料とし、其以後は主として遺物を以つて其研究資料とすることになるから、漢代を境として正反對の對立的の建築史が出來る。これは二元的體系のものであると言つたことがあるが、型式學的研究の未だ充分に行ひ得ざる今日では、その年代區分の根據はこれをこの資料上の區別に求めることが私は最も便宜だと思ふ。そこで遺物が少しは存在する後漢時代以後と建築的遺物の殆んど皆無である前漢時代以前とに先づ二大別する。而かも此の區分は偶然にも支那に佛教建築が行はれる樣になつた頃[1]と殆んど一致する。即ちヒルト氏の第一期に相當するものである。ヒルト氏は之れを支那固有藝術の時代としたのであるが、私はこれをその主として對象とする資料の性質の上から、文獻研究時代とし後漢時代を遺物研究時代とするものである。而して此の文獻研究時代と言ふ中でも確實な文獻が殘つてゐるのは、周時代以後であるから、周代のものは文獻の上から或る程度迄はこれを知り得るけれども、周代以前になると周代の文獻から想像し、またはその古代文字から假定する位の程度であるから、眞の文獻研究の時代は周代以後であつて、これ以前は推論の時代といふべきである。だから私がその研究資料の種別に依つて行ふところの區分なる

ものは、先づ太古から前漢時代の末までを前期とし、更らにその中で殷の末迄を推論時代とし、周の初めから前漢の末までを文獻研究時代とする。又後漢の初めから清の末までを後期として、これを遺物研究時代と稱する。所が此三つに區分された時代は、單にその資料の種別のみでなくて、同時にその取扱ひ上の區別となり、方法論的の相違を規定する事となるし、又從つてその內容上にも特徵を齎らすことになる。[2] 右の中で推論時代といふのは、その年數から言へば可成り長い間になるのであつて、大體一千七百年程の間になる。此の間に於いて、例へそれが今日から見て、可成り古い時代に屬するとはいへ、又その詳細を知り得る遺物や記錄が缺如してゐるとはいへ、他の諸種の點から考へても、その建築は可成り發達進歩しなければならない筈である。一千七百年といふ年數が假令幾分の誤算があると假定しても、二百年三百年以上の誤算のある譯ではない、少くとも一千五百年以前にその建築を認めることは、理論上之れを正しいとしなければならないから、これを清末から逆算すると恰度南北朝時代の初期に當ることになる。我邦で言へば、明治初年から逆算して允恭天皇の頃に當るのであるから、私がこゝでいふ所の推論時代の初期と末期とに於いては、その建築に格段の進歩がなければならない。けれどもこれは理論であつて、實際にそれを證明すべき資料は絕無といつても好い位であるから、周時代の文獻を涉獵してそれ以前を想像し又型式學的の研究からして、それを類推しなければならないのであつて、私が推論時代と稱する所以であるが、以上の樣な理由から此の推論時代といふ年代は相當に長い年代でありながら、これを細かく區分してその詳細な點を考究することは不可能である。次の文獻研究時代はこれを歷史上の年代にすると周、(春秋戰國時代を含む)秦、前漢の各時代となるのであるが、これは大體に於いて、その各時代に細別することは不可能ではない。又後期の遺物研究時代といふのは、既に斷つた樣に主として遺物の存在から、その研究の大部分が成立するといふ意味

であつて、これに對して尙文獻が有力な他の一部を成すことは說明を要しないであらう。此の後期に於いては後漢以後三國、兩晉、南北朝、隋、唐、五代、北宋、南宋、元、明、淸の各時代が含まれるものであるが、これ等の各時代に於ける大體の遺物も之れを存在するか、然らざれば他の例證から、その詳細を具體的に知り得る程度にある故に、此の歷史上の區分を採用することも、又必ずしも不可能ではない。

(1) 佛敎建築が支那に行はれる樣になつたのは、先づ大體に於いて後漢時代としてよからう。此事に關しては東洋學報第十一卷に於いて大谷勝眞氏が「支那に於ける佛寺造立の起原に就いて」詳細に論じて居られる。

(2) 滿蒙第七年第一號所載拙著論文「支那に於ける傳說的建築史と事實的建築史」參照。

建築史の年代區分は、型式學的根據からすることの極めて妥當であるべきは、既に述べた通りであるけれども、支那のそれに於いては未だ研究の資料蒐集の時代にあるのであつて、その型式學的研究の結論は遠き將來に待たねばならない。それ故にその年代區分の根據に就いても、今遽かに適當な稱呼を與へ、又は暗示を與へる事は困難である。そういふ理由から私は今提示した三區分の上に更らに必要な細區分を行ふとなれば、歷代王朝の名稱に依る歷史上の年代稱呼を踏襲することの甚だ當を得てゐることを信ずるものであつて、此の意味から私はミュンステルベルヒ氏の後期の區分法を採用し只僅かにその淸初の年代をミュ氏に倣はないで、淸の太祖が滿洲に起つて皇帝號を稱した西紀一六一六年を以つて起算しようとするものである。從つて明末は事實上そんな所の西紀一六六一年とすることは、ミュ氏と異らない。同樣な見方から元末明初の起算に就いてミュ氏の說を訂正する、そこで私の年代區分を示すと次の樣になるであらう。

前期

一、推論時代　（太古—殷末迄）

二、文獻研究時代　（周初―前漢末迄）

イ、周時代　（西紀前一一二二―二五〇）

ロ、秦時代　（西紀前二四九―二〇七）

ハ、前漢時代　（西紀前二〇六―西紀二四）

後期

一、遺物研究時代　（後漢初―清末迄）

イ、後漢時代　（西紀二五―二二〇）

ロ、六朝時代　（西紀二二一―五八八）

ハ、隋時代　（西紀五八九―六一六）

ニ、唐時代　（西紀六一七―九五九）

ホ、宋時代　（西紀九六〇―一二七九）

ヘ、元時代　（西紀一二七一―一三六七）

ト、明時代　（西紀一三六八―一六六一）

チ、清時代　（西紀一六一六―一九一二）

二四　支那建築の遺物

支那建築史の年代は、その研究資料の種別に依つて前期後期の二大區分をすることの便宜であることは、別項に於いて述べた通りであるが此の前期の資料としての文獻は恐らくは後期のそれの遺物よりは遙かに多種多樣であり、又その存在する形式が甚だ雜多であるからこれをその資料として取り扱ふ事は甚だしい困難が伴ふのである。別項にも述べた樣に遺物の蒐集は頗る難事業であり、又その年代考定はその上の難事業であるが、文獻のそれに於いては更らに以上の難事業である。何故であるかといへばその所謂文獻なるものゝ量が莫大な數に上るのであつて、只汗牛充棟といふ言

業が、僅かにその一部を言ひ表はし得る程度にあるが併しそれ等の莫大な數の文獻の中に於いて建築的事項の詳細を徴すべきものは殆んどないといつてもよいのである。後期のものには建築專門の書籍が二三種は存することが知られてゐるが、前記のものには强いて擧げるならば、周禮の考工記には多少その事項がないでもないが、大體に於いてはその文獻研究といふ事は、その莫大な數の書籍から、建築的事項やこれに關聯した記事を探索しなければならないのであるから、此事が既に多大の努力を要することであつて、私の如き勿論その一部分をも成し得べきではない。此點に關しては支那文獻に親まれつゝある、あらゆる方面の學者の援助を待つてその苟しくも建築に關する事項を記載するものは、細大となくこれが示敎提示を受けなければならない。處がかくしてその資料を蒐集することには多大の困難を伴ふものであるが、更らにその上の困難がある。それは所謂その資料としての文獻の本文批判といふことである、これはその研究の理想論から言つて當然行はなければならない事である。例へば今述べた所の周禮考古記の如きは甚だ疑問とされてゐる書籍であつて、從つてその內容を以つて直ちに周代の建築狀況を推すことは、或は正當でないかも知れない。殊に考工記そのものの本文は文章が極めて簡約に記されてゐる爲めに、その解釋が又むづかしく註を賴りにしなければ解し難い點が多いが、その註は漢代の司農鄭氏以下唐、宋、元、明等各時代の學者が施してゐるが、それ等はその時代のものを根據として解釋してゐるのであるから、直ちにこれを周代のものとなすことは出來ない。これ等はその一例であるが、一體に文獻の取り扱ひ上、大切な注意の一つは本文批判を試みなければならない事であつて、墨子の書にあれば悉くこれを墨子の言とし思想とすることは、學者の間に早くから注意されたことで吾々の研究に於いても當然その用意が必要であるが、併しこの事は文獻を取り扱ひ慣れない吾々として、又漢籍の攻究に對して門外漢であるべき吾々として、困難以上に寧ろ不可能な

ものとしなければならない。從つて先づ文獻上の資料の蒐集以外の仕事は、之れをその方面の專門學者の示教を待つて後、その記載文の解釋に努め、又假りにその文獻を基礎としての解釋に妥當な型式學的の基礎を與へることが差し當り吾々の仕事である。文獻研究といふことは、以上に述べた樣な困難を伴ふものであるが故に、これは單なる建築史家の仕事としては到底その滿足な結果を得ることは出來ない。だから今の所ではその資料の一部として、私の知り得る一二の事項を試みに推論する程度のものであるから、これ等文獻的資料に就いては甚だ遺憾ながら實は吾々は餘り多くの知識を有してゐないのである。只方法論としての理想は、吾々は以上述べた樣な態度であることを必要とすることを知れば足るのである。

故に私は此處に遺物に就いての若干總括的な考察を試みることにする。伊東博士は普通一般的に用ひられる分類法に依るが便宜であらうとしてその遺物を次の樣に分類して居られる。

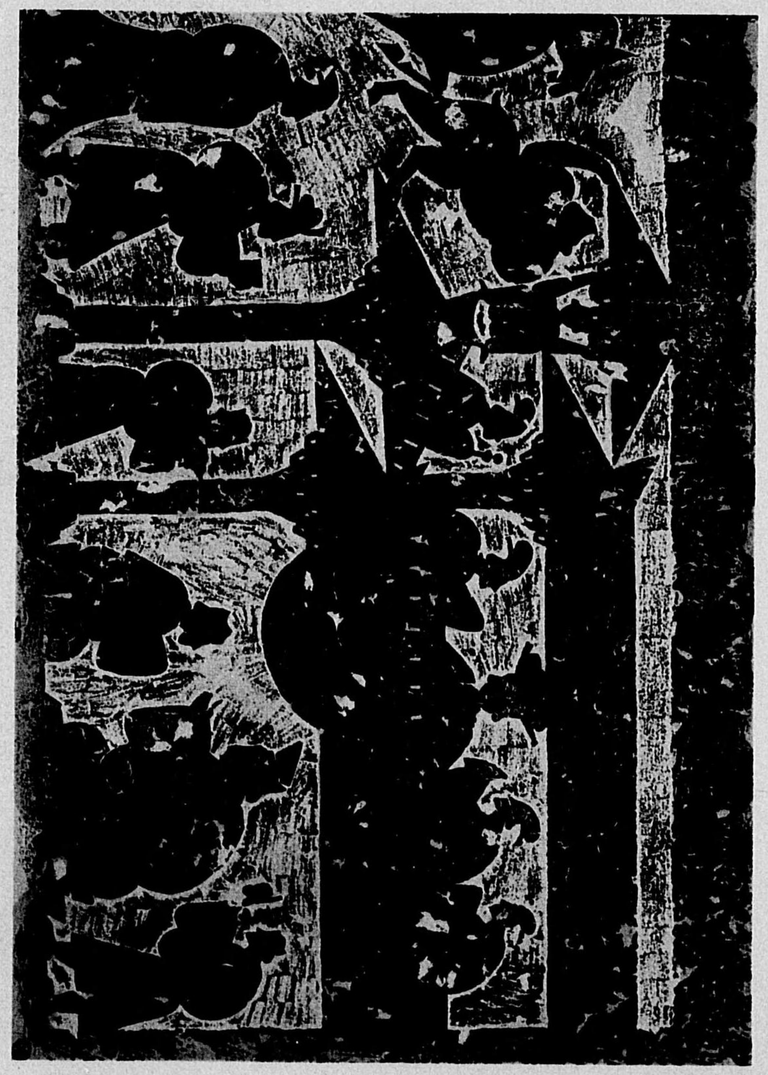
甲、宗教的建築
一、壇、廟
二、佛教建築、即ち佛寺佛塔
三、道教建築、即ち道觀風水塔の類
四、儒教建築、即ち文廟書院の類
五、廟祠、即ち淫祠の類
六、回教建築、即ち清眞寺
七、陵墓
乙、非宗教建築
一、城堡
二、宮殿、樓閣
三、住家、商店
四、公共建築、即ち劇場會館衙門の類

五、牌樓、門、闕の類
六、碑碣の類
七、橋

大體後漢時代以後各時代の遺物が悉く右の様な種類の各項に該當するものを有つてゐない事は勿論であるが、支那建築史の遺物は此の分類に依つて、その全部が盡されてゐるのであるが、此に私はその遺物の物的形式の特異性に依つての分類を行ひ、これに依つて總括的な考察を試みることにする。

支那のみならず一般にその建築史的遺物を物的形式の特異性といふ點から分類をするとなると

一、構造物。遺物及その遺跡
二、建築的資料を提供し得る彫刻
三、同　繪畫圖様類（第五十及五十一圖參照）



（支那一）　漢代石像畫　圖十五　第
（關參頁八〇三支那）

第五十一圖　漢代畫像石文様（其二）

（本文三〇八頁參照）

四、同　工藝品其他

の四種となるであらう。此の中で第一の構造物としての遺物と遺跡とが、その大半以上を量に於いても質に於いても占めてゐることは勿論であるが、各時代毎に就いて言ふと必ずしもそうではない。併し大體を通じて右の様な順序は、その量及び質に於いての等差を示すものと見てよからう。此の構造物といふ事も甚だ明瞭を缺く用語であつて、伊東博士の分類中にある碑碣の類をも含むものとするか、或はこれは第二項の彫刻類の方に入るべきかといふ様なことになるであらうが、私がこゝに第二項中に擧げる處の彫刻類とは右にも明記した様に、建築的の資料を提供し得る様なものを指したのであつて、彫刻物そのものは建築に應用されたもの以外には直接何等の關係のないものであつて、從つて私の叙述には觸れないものである。依つて碑碣の類は第一項のものゝ中に含まれて居るものとする碑碣の類が建築として、建築史の中に叙述されるものであるか否かは少くとも問題と

なり得るけれども、建築といふものを美的の構造物といふ見解からすれば、碑碣の類はこれを建築史の上に取り扱つても好いことになる。私はこんな立場からしてこれを構造物中に含むことゝする又墳墓の如きものはこれを如何に取り扱ふか、墳墓そのものが直接に建築といふ事は出來ないにしても、その墳墓内部の構造は勿論建築的の技術を徴するに足るものもあり、又その細部を應用したもの等もあるから、これを建築史の上に取り扱ふことが諸種の點に於いて甚だ便宜が多い。そこで此の第一項の構造物といふ項はこれを更らに

一、地上構造物

二、地中構造物

の二つとすることが出來る。先づ最初に地上構造物に就いて考へて見る。支那の國土はその南北は北緯二十度近くから五十五度近くに亙り、その東西は東經七十五度附近から百二十五度附近に亙つてゐるのであるから、少くとも建築の進歩發達の上に重大な關係を有つ所の要素の一つとしての自然環境とでもいふべきものは、到底これを單純に一局部の觀察のみで論ずることは出來ないのであるが、支那建築なるものの材料は可成り多樣であつて、在來の日本建築は一般に木造であるし西洋建築と言へば煉瓦造か石造であるといふ樣に考へて來たと同じ意味にそれを或る一種の材料のみを以つて、主要な構造をなして來たものとする事は出來ない。支那建築が抑も木造から發達して來たものか、それとも石造から進歩したものであるかは今此章に述べ樣とするのではない。只現在する建築史上の遺物に就いてその構造の主要材料を見ると、

一、木造

二、石造

三、塼造

四、前三者の混用

の大體四種とすることが出來る。木造のものは腐朽し易く又災上し易い爲めに、その現存するものは比較的近代のものが多く、古いものは極めて少ない。今日學界に知られてゐるものでは、私の見聞した範圍に於いて、天鎭の慈雲寺が唐宋の過度時代のものといはれてゐるのが、(依伊東博士)恐らくは最古のものであらう。又河南省登封縣の小林寺初祖庵は宋の宣和七年、卽ち西紀一一二五年の建造と考へられ(依關野博士)建造年代の正確なものの最古に屬するものである。これ等の詳細に就いては省略するが嚴格な意味に於いて此の初祖庵の如きは、寧ろ第四項の木石混用のものゝ中に含むべきであるが便宜上木造のものゝ例に、その年代の明確なものとして擧げたに過ぎない。宋時代になると遺物も比較的存在してゐるし、他の資料も幸に比較的よく揃つてゐるので、隨分にその詳細を知ることが出來るが、それ以前のものは遺物としては殆んどなく、その他のものに依つてこれを知り得るに過ぎない。宋代の木造建築は我邦にも輸入されて、所謂唐

樣建築といはれる所の一種の禪宗樣の建築をなしたものであり、これが我邦にも遺つてゐるのであつて、それ等の系統的の關係を考究する上に於いても、宋代の木造建築は興味あり又價値あるものである。又木造のものの一例としてその地下構造物に入るべき木造がある譯であるが、寡聞な私は未だ支那に於いての木造の好適な實例を聞かない。朝鮮に於いては最近に樂浪時代の木造の完全なものが發見されて世界最古の木造物として學界に傳へられたのである。樂浪時代の現存する遺跡はその土地は朝鮮であるが實は漢民族の遺跡であつて、學術的にいへばこれを支那建築史中の一頁に挿入して差し支へはない譯である。支那の地に於いても勿論木造の存在はこれを否定することが出來ないけれども、私の寡聞なる未だその實例を不幸にして知らない。又石造建造物の遺物はその材料が耐久性のものであるゆゑに、可成り古代に屬するものが殘つてゐる。先づ石器時代のものとしては考古學上人のよく知つてゐるドルメン(Dolmen)がある。ドルメンとい